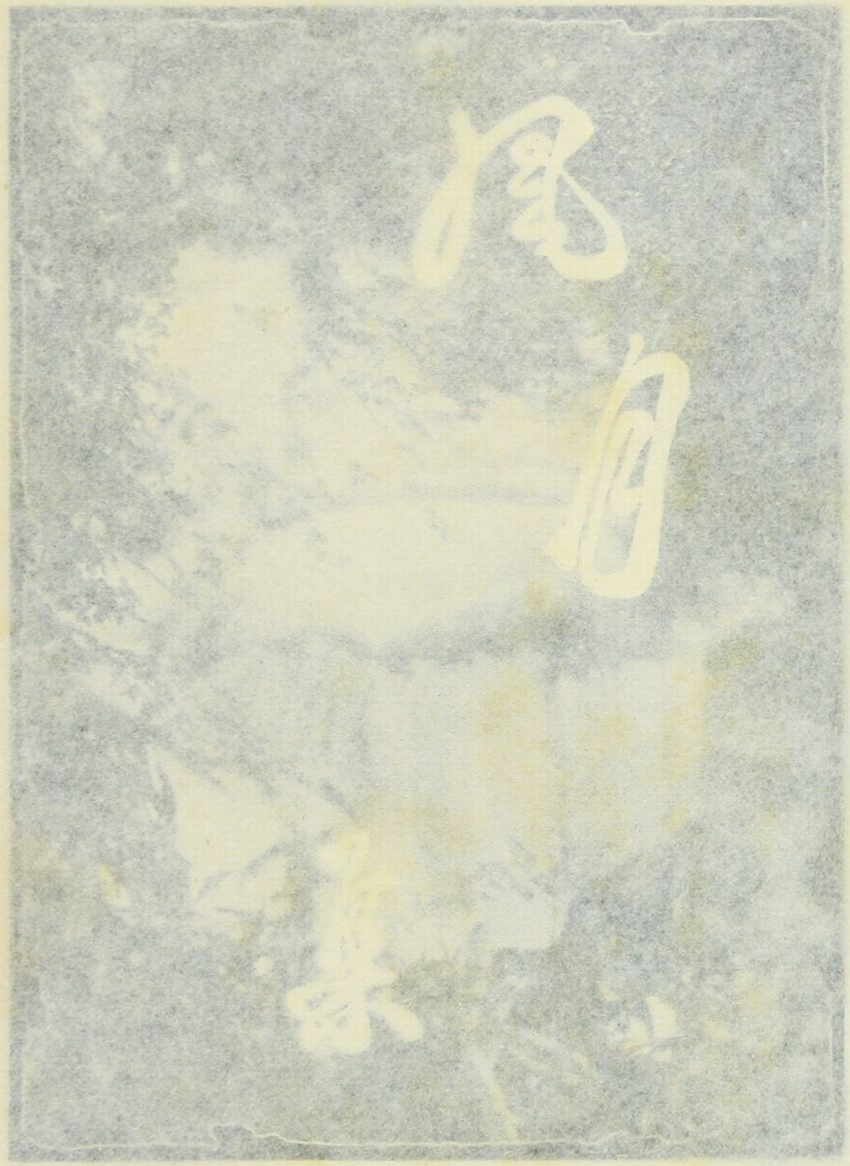
乙羽生著

風月集

乙酉生著

風月集

風月集


風月

瀑布

はしがき

景によりて情を憶ひ、情を以つて景をおもふと、人間寔に我儘なるかな。夫子ことしは落人（オチウド）の眞似もせず、帳場格子の關の戸にかくれて、見越の松の盆栽一株（ヒトカブ）、これも常盤木の片割（カタワレ）ながら、インキ壺と一緒に、辛（ツラ）き目見する兩側には、白雲（シラクモ）の長松、ヘン己（オレ）も他年鐵枴の儉約して、三軍を叱咤すべきにと、力（リキ）みかへる牛若の涎くりと、兀（ハゲ）ちょろの李兵衛、堅いの〳〵石屋とは假の名、常盤津の宗清、喉を自慢の頭（アタマ）かくし藝も、ありといふなる、世はさま〴〵の天窓（カヅ）數を、ヂロリッと眺めやりて、あれは花色の襦袢

の裏、かなたは月にも、、、、くら縞のお仕着、興はこれにても足るべきを、愁じいに學者めかして、風流に纒綿られなば、脚の底の飯粒、却て口の干上るを奈何せむ。よしや吉野のみが名所かは、こゝに算盤の玉箒、總ての憂さを、五珠に彈いて、儘よ文學は、忘られぬむかしの故郷と、夜は孤燈の下、晝は仕切書くなる刷毛ついでに、墨をなすりつけたるこの一卷、今宵目出度校合を了れる窓に、折から月の影清く、墨繪の竹のさら〳〵と映りて、實にこれは風月集とや。

己亥八月

著者

の裏、かなたは月にもめくら縞のお仕着、興はこれにても足るべきを、愁じいに學者めかして、風流に纏綿られなば、脚の底の飯粒、却て口の干上るを奈何せむ。よしや吉野のみが名所かは、こゝに算盤の玉箒、總ての憂さを、五珠に彈いて、儘よ文學は、忘られぬむかしの故郷と、夜は孤燈の下、晝は仕切書くなる刷毛ついでに、墨をなすりつけたるこの一卷、今宵目出度校合を了れる窓に、折から月の影清く、墨繪の竹のさら〳〵と映りて、實にこれは風月集とや。

己亥八月

著者

己亥八月

著者

目次

袖時雨（小説）……一
こぼれ梅（小説）……二五
京屋娘（小説）……一一五
娘姿十五區（雜筆）……一五九
鷹の羽（雜筆）……一九一
美人八容（雜筆）……一九八
送漣山人辭（雜筆）……二〇七
勇み肌（雜筆）……二〇九
京の雪（紀行）……二一四
團洲別墅（紀行）……二一六
日光結構記（紀行）……二二〇

麥藁帽子（紀行）……二三二
夏の夜（紀行）……二四二
酒池肉林（紀行）……二四八
駒塲の秋（紀行）……二六〇
神田覗機關（紀行）……二六七
おぼろ月（新躰詩）……二七七
夏の川（新躰詩）……二八七
暮の秋（新躰詩）……二八九
古關の雪（新躰詩）……二九九
涼榻詩味（漢詩）……三〇五
俳諧算盤珠（俳句）……三一二
以上

風月集

袖時雨

（上）

おう影がさして、美くしいことゝ、四十恰好の婀娜ッぽい奥様が、振上げたる顔に、夏の月の清しう射して、半ば捲きかけたる簾の影の、竹縁に端居したる、これも歳は五十に近かるべき女の、鬢の邊に清光を浴せかくれば、此方は及び腰の、顔を襟に埋めたるが、弗と思ひつける如く首を擡げて、ほんにマア美

い月で御座りますこと、夫もモウ歸りまする刻限、今宵は御緩りと遊ばして下さいませ、別けてこの邊は田舍も同樣の不自由ゆゑ、決してお構ひはいたしませぬ、そして先刻からお話の一條も、夫が戻りましたなら、ちよッぴり一ト言、奥樣のお口からこれ斯うとお話して頂いたら、夫がいくら愚痴ッぽくなりましたと申しても、定めし快く納得致しませうほどに、何うぞ一言お辭をと、云ふ聲も顫はれて、袖に窃とうけたるは涙なり、奥樣と云はれし女の、やゝ顔を和らげて。お霜、あれ泣いて呉れては困るよ、もと〳〵妾がさう云ふのではなく、旦那はお前も知つての通りの一酷もの、斯うといひ出されては、理が

非でも退かれぬが性分、こゝの處は殘念にも思ふかなれど、一先づ田舍に歸つて呉れ、機もあらば妾からお詫して、また呼び戻す事にもならう、くよ〳〵せずと、まァこの月でも見たがいゝよと、深切さうに云ふ奥樣の、襟元はくつきりと白く、大形の丸髷に年の數の二つ三つも隱れて、縞明石のお召に、身無しの比翼帶、月のさす方は襯衣も見え透くばかり、涼しげの打扮なるに引かへて、此方は月の光に背きつ、うち沈む顔の艶、衣も不斷着の洗ひ曝しに、振も打扮も繕はぬ愁ひの思入れ深く、兎角は露を夕顔の棚に翻して、隣れる家の門涼み睦ましきを小耳に、青薄の月に薫りて、煙るが如く亂るゝ傍、石竹の花の白

きは輝き、紅なるが影の黒く風にたはみて、小庭ながらも小瀟洒せる夜の樣、日の暮方の一ト降りに、撒水せぬに風薫りて、虫の音の蘇生たらん如きも涼しゝ。霜と呼ばれたる女の、なほ力無氣に顔さし上げて。奥樣御免なされて下さりませ、ッイ永年の御心切にあまへまして、緣起でもない泣き事ばかり、妾は奥樣のお傍に居りまするのが、今年で恰度十六年、あの坊ッ樣が今以て、老爺〳〵とお仰つて下さるだけ、なほこの土地が去りたうは御座りませぬ、仰せの通り當節は正直一方では渡れぬ世間、お若い方で御器量な御發明な人樣の多いのに、夫は老る年の五十八、六十の坂にモウ〳〵近うなりましては、桃も

毛虫の旨味がぬけ、愚痴ッぽくばかりなりまして、お役には立つゝ無しの律義一方、それをこうして十六年が間も、お用ひ下された且那樣の御心切、やれこれからが御恩がへしと思ふ近頃は、中症の氣味でもあるか、御覽の通り半身が思ふやうには利かぬとやら申しまして、氣分の悪い時分には、寢たり起たり、御覽遊ばしませ、その石竹も娘が緣日で買ふて戻りましたのを、昨日の朝植えましたのなれど、未だ根がつかぬかして、何うやら風にも堪へぬ樣子、いかに世間は智恵には勝たれぬ掟とは申せ、同役中では故參の夫が、何日になつても今日の境界、手堅いからと云つて金庫の番人で暮されもせず、後から次第に

乘り越されて、今ではホンの唐銅火鉢の、たゞお店の番を致しまするより、能の無い烏は、何日になつても鷹の眞似は出來ませず、旦那樣のお飽き遊ばすのも、無理とはさら〳〵存じませねど、この年數になりましてから、何の顏あつて在所へおめ〳〵歸られませう、今が今まで他樣に何屋の何兵衛と、名を謳はれたその身が、老耄れたから暇が出たのぢや、ソレ見た事か血氣の頃に肥桶見捨てた天罰さと、世間の噂にか〵るがいやさ、また二つには、娘のお淸、あれも今年は十五歲、お坊ッ樣と飯事して遊んでゐましたのが、昨日今日と思ふてゐたのに、もう高等の女學校とやらに、入れて呉れの、裁縫を習はしての

と、强請らる〳〵程親の自慢、試驗とやらが近くなつたと、喜んでゐるその矢先、在所に歸ると聞いたなら、何のやうにあれが泣きませう、奥樣奥樣、何うぞお慈悲にもう二三年、せめてはお娘の成人するまで、お目かけられて下さいますやう、旦那樣にお執成をお賴み申上げまするとは、泣くより外の情ぞ無し、彼方はそれを凛として。お霜、泣いて呉れるな、お前の心の切ないのを、知つての上の今の一ト言、妾が詫びして利かれる程なら、何んでわざ〳〵來ませうぞ、所詮これは叶はぬと、思ひ込んだなればこそ、お前にも先刻から事を分けて云ふぢやないか、男の無分別なは、夕立の雨の一ト しきり、降つて晴れ〵ば、

また元の月のよい中、十六年も一緒に稼業を勵んで呉れて、ホンにお前の云ふやうに、世間では儀兵衛さんの福山堂やら、旦那様のお店やら判らぬとまで、云ふて呉れる得意場もあるのに、何時まで儀兵衛を打つ捨り放しにして置かれうぞ、實以て一寸の間だ、後の事を氣にかけずと、こゝは何うぞ妾にめんじて、一旦在所に戻つて呉れ、な、お霜、妾を怨んで呉れるなと、顔には不愍さの色を見すれど、上眼づかひに窃み見て、お霜の様子をのぞけるさへ、此方は頼みの綱切れて、涙に沈むばかりなるを、賺すやうにして、坐を立ちさま、それぢやァお霜、妾はもう歸ります、儀兵衛が戻つたら、お前からよう云ふて呉れ

と、門口に出づれば、待ち草臥たる車夫の、欠伸を嚙みゞめて、履物をそと直すや否、氣は沈着けど仕打の急かれて、拳車に乗ると、ツィ其處の三軒目から、曲れるあとは月の檐、見送る窓に雲湧きて、雨にやならんと氣遣ふ空を、怨めしげに見上ぐるも女の情、かくてもとの坐に直りて、そと泣き伏する傍から、娘も涙に曇るなる門の戸を、了得にまだ月の射すに遠慮して、や、物思はし氣にノッソリと、歸り來れるは儀兵衛なり。

（中）

お霜今日は遅うなつたと、半は汗に汚れたる瓦斯糸の單衣を、着たまゝの、歸るや否、竹縁の端に力無さゝうに胡坐して、譯

も無くつまらぬ〳〵と頭を傾むくるを、女房はそれと察しながらも、なほ平生の氣性を見てとつて、我から話柄を持出しもせず、何うやら御氣分がと斫り込めば、儀兵衛は顔をさし俯けたる儘、おう、少々加減がと打沈むに、藥など差上げませうかと云へば、ナニ大した事はない打捨つて置け、案ずるほどの下痢でもないが、正午時分から少とお腹が緩み出し、お店で赤玉を頂いて服んでから、もう何んとも無いが、あァ年を老れば氣が緩む、腹が緩む、嫣、アいつそ田舍の方が住みよいな、かうして居る此處も邊鄙とはいふものゝ、下町の雜沓してゐる處から見ると、何んなに住み好いか知れはせぬ、熱鬧場にゐる人は、氣

が強く、人情も輕薄に、思ひやりといふものは、トンとなく、ツマリ前行く人を搔き分けても、我一人進めば濟むやうな人氣の、荒らう無うては金が儲からず、結構人だお人良だと、云ふて吳れる人樣の、自力無いのが多ければ、何んぞの時の賴みにならず、昨日の恩も、今日は紙卷莨のパイプに齊しく、吸殼と一緒に捨てゝ、見向もせぬが當世の人心で、その人の零落れては義理ある顔も鼻摘み、よし仇で返さうとも、温石の冷たうなつては、疝氣の腰へも當てられぬな、お清こゝへ來い、嬢やこゝへ來て、また何時のやうに、腰を按つては吳れぬか、おやお前泣いてか、また母アさんに叱られたな、母アさんは私と違ふ

て氣早な性質、逆らつて叱られな、おう、蚊が食ふわい、泣くな、こゝへ來てこの月でも見い、アレ虫が鳴いとるよと、慰め顔に云ふ父よりも、慰めらるゝ娘の切なさ、先刻聞いたる奥樣のお話を、知らぬ顔にお隱しなさるも、妾へ氣をかねての事かと、思ひまはせばなほ湧きかゝる涙を、袂にうけては顔さし俯けて、團扇の骨を數ひ居たり、母のお霜はいつそそれをもどかしがりて。まア貴君、氣樂さうに何を云ふておゐでなさる、妾どもに心配させずと思召して、いくら隱しておゐでても、先刻お店の奥樣がと云ひにかゝるを、また氣の早いと儀兵衛は眼で知らせて、その奥樣が何うなされた、たつた今その曲り角で、

擦れ違ひに逢ふたのは、たしかにそれぢやとは思つたが、向ふは威勢の好いお手車、此方は老躰のおひろひとて、ツイ御挨拶もせなんだが、そして宅へは何んぞ用事か。あれまた貴夫は空とぼけて、昨日やら今日やら、お店で旦那樣から何かお話はありませぬか、無いとあつては、何うやら話の撥が合はぬが、今日奥樣がゐらしつての仰せには、儀兵衛奴は、これは失禮、そのナニ貴夫が老耄とやらで、店の役には立たぬから、暇を貰ふて田舍へ引ッ込めと、一口に云へば斯ういふ御難題、これが旦那樣ばかりのお辭なら、いつもの御氣性と諦めもせうけれど、アノ沈默の奥樣までが、今のやうな御言分、妾腹が立つて、

口惜しくつて、何うしやうかと思つたが、主人には勝てぬ奉公人、一生も二生も勤めやうと思ふてゐる私共を、お三どんか三助にでもおつしやる如く、年老つたから田舎に歸れ、直ぐ暇をおとりと、可愛さうに詰め腹を切らすやうな云ひがゝり、日頃柔しい貴君にこんな事を聞かしたら、口惜し紛れに何んなことにならうかと、實はお聞かせ申さぬ筈でゐたなれど、遲かれ早かれ一度は譯を云はねば濟まぬ今日のお話、そ、その話で、今もお清と二人で泣いてゐました、貴君余り酷いではありませぬか、自分達お二人が出世さへなされば、アトの奉公人は十年勤めやうが、廿年辛抱しやうが、それは構はぬ、年老つて耄碌した、店に遣ふては置けぬと仰しやつても、人間一生はいつも廿歳代の花ばかりではなく、お店に寂がつくと共に、奉公人も愚痴にならうさ、鯛ぢやからとて、鯉ぢやとて、骨もあれば頭もある、その脊肉のお旨しい所ばかり喰べて、尾がまづいの、鰭がたべられないのと、俎板の上に揑と投り出されたからとて、もとの通りの鯛にはなられず、人もあらうに儀兵衛さんを、ホンに口惜しい、昔時の事は忘れくさつてよ、旦那さんも奥樣も十六年前の事を考へて御覽遊ばせな、旦那樣は未だ書生上りの藥劑師とやらを肩に着て、意張つては商賣も奈良佐といふ、得意場を見つけて、薄荷の買入を賴まれたのが、そも〳〵親父さ

んの働き、その折は店と云つても、お成道を横丁の孫店、二間々口は名ばかりの猫の額で、臺所とも坐敷とも兼帶の間がある外は、直ぐ其處が隣家の土藏、諸道具と云つたところが、調劑用のテーブルが一ツ、夜はその四隅に紙を張つて、蚊帳の代りに用ひられた事もあつたとやら、そんな苦勞をしたお庇蔭に、奈良佐でも手堅い親父さんを見込んで、品物も貸して下され、藥品の買入れもさして下さる、親父さんはいつも外向を駈けずり歩き、旦那は店で賣藥の調合さ、夜晝寐ずに働いて、たゝき上げたは今の身代、それで得意先の古店では、ッイ近頃まで親父さんを旦那といひ、今の旦那樣を先生と云つてゐたのが、一

抵親父さんの正直過ぎなさる所から、何日とはなしに旦那は旦那、夫は並の奉公人扱ひされて、それから後は若手の者に乘つ越され、今日になつて、アの難題、お清口惜しいではないか、それに旦那は旦那としても、アノ奥樣が怨めしい、今でこそアノ打扮はしてゐられ、根が吉原の花魁樣、他人を魅すが商賣の、昔からの氣が失せられで、義理もあり、少しは恩もあるべき夫を、今になつて今の顏あつて、自分の口から暇を取れと云はれるものぞ、これが若し本所邊の大店なら、今頃は暖簾を分けて貰ひ、商賣も自儘勝手に出來やうもの、主を擇ばねば、十幾年の辛勞しても、みんな水の泡になつた、お清もう泣きやる

な、泣いたところが仕様は無い、時よ時節と諦めて、いつそ田舍に引ッ込まうか、おやもう夫は熟睡つてお仕舞ひなされたワ、一生の大事の話をしてゐるのに、この通だもの、お清、妾どもは一生日蔭の桃の木よ、お女郎様でも運が向けば大家の奥様、妾等のやうに年が年中働いても、なるほどにはならぬが世間、くよ〳〵思ふて、この上になほ病氣にでもなつたなら、それこそ賴む木陰のない親子、ほい寂冷えでもさしてはならぬ、お清、搔卷出して父さんにかけておやりと、人心の見透くやうなを憤れど、子ゆゑにいつか氣まぐれて、椽端に涼む夏の月、また青薄の葉に入りて、婆娑たる影の風に搖ぐも面白く、娘は

燈下に書さし展べて。お母さん、昨夜のアトを讀みませうかと、讀本のつゞきを讀み聞かすれば、お霜は夫と娘とを、等分に煽ぎながらも、見やる月は薄雲にかすれて、庭の隅には虫の聲の、都には程遠き秋の姿を、團扇の露草に見するも寂し。

（下）

零落し哀れを知る冬の雨の、よろづ振ひ落されたる林に入りて、人目も草も枯れ果てたる秩父の山里、淋しさはこゝぞと、訪ふは孤松の聲するばかり、人の心のさもしきは、雪に近き空の景色の、雲のいろにも知らるべく、儀兵衛親子の、京はかゝる他の身の、明日の時雨は我か袂よと、上野を出でゝ掛川より、

この村に遁れ來つ、それも繫がる淵明が、菊をつくる翁のあるを、少との所縁と尋ね來て、そこの山人に朽ち果てける。時雨は百の梢を洗ふて、峯は夜嵐の吹き荒むなる、麓は未だ夕陽の紅葉の、色あるを心頼み、筧は絶えせぬ山陰の清水の、夜も音をやすめぬを、せめては世を忘れぬ便りと、こゝに形ばかりなる竈を置きけるも哀れなり。儀兵衛は浮世の事の、心にかゝらぬなりたる、氣の緩みにや、どつと病の床に臥して、枕さへ上らぬ今日此頃、女房も娘も、そをいたはり侍けども、老病のじめり〳〵、霽るゝ間も無き檐の玉水の、次第に細うなりぬるぞ、こゝろはそ心細けれ、お霜お清はその事を文しては、主なる人の家に知ら

せやれど、梨の礫の便すら無きのみか、やがて詫を云ふて呉れて、長くは鬼界に憂目は見せぬぞと、あれまでに誓ひし奥様の、こゝに移りてこのかたは、御狀の一ツも無きこそ怨みなれ、雁はかへり、鳥は塒に入りて、今日も夕暮の山里、お清の父の枕元に看護するばかり、淋しきは夕陽の山の彼方に隱れたるにても知られぬ。モシお父さん、御氣分は如何やと問へば、儀兵衛は病み耄けたる顔を擡げて、お清、案じるな、氣分は快いぞ、お母さんは何うした、東京へでも行きはせぬか、旦那樣からは未だ御手紙が來ぬと、そのやうな事は無い筈の、屹度約されたアノ一條、若し私が萬一の事でもあらば、アトには娘、おうお

霜とたつた二人切り、何うして世に立たれやう、お霜は何うした、お母さんはと苦し氣に問ふを、女房は煎じた藥を茶碗に移して、貴夫もう煎藥は出來ましたから、一ト口呑んで下さいませ、根が風邪からの流行病、氣をお丈夫に持つて下されば、平癒も間近い、御心配なさらずと氣を沈着けて、旦那樣からお使の來るのを待つてゐて下さいませ、こゝは東京とは違つて、名醫もなく、妙藥はトント少ない、氣丈夫にしてゐて下されば、また東京まで出まして、大學の博士達にも見て貰らひませうと、氣を慰むる妻と娘、儀兵衛は斯うと覺悟しながらも、流石は恩愛の、兎角溢るゝは涙なり、かゝる中にも待たるゝは主人

の命、今日は使があるか、明日は文など來やうかと、待ち暮したる、日も一月あまり、思ふ心は矢竹に逸れども、手應へ無き玉の、外れたる的は脆くも碎けて、儀兵衛は五十八歳の、冬の日の短かくも散る寒椿、口には念佛の外に、旦那樣を思ひつゞけたる怨み死、折しも嵐に吹き折られたる冬嶺の松の杖、女房と娘とが手を取り交はしたる儘に、泣いて泣いて、また泣いて……○

＊　＊　＊　＊　＊

眞綿で人を縊り殺しながら、その生前の德を頌ふて歩く僞善者の多い世は、一將功成つて、萬骨を裹み負ふせたる花の雲、日

暮里の燒場を直ぐ底に眺めながら、春は霞に鳥邊野の煙の裙を摘草と洒落ける女のあれば、それ其方の足元から、高揚りのする雲雀は花の上野山、醉ふては相手の鍬引く、三穗の谷中の天王寺に、喧嘩過ぎての坊さん達の、大施餓鬼あるぞ興なしや、見れば萬人の目のつき易き境内に、彰忠碑といふ大なる石を建てゝ、手代儀兵衛の精靈を嚴に鎭めまつり、しかも人寄せの樂隊賑やかに、廣目屋が紅白の旗花やかに飾りて、回向を世に見せしめの大風呂敷は、これぞ福山堂が慈善家として知られたる始めの催なるぞ、世は面白けれ。（卅二年八月新作）

こぼれ梅

（一）

元祿の名殘未だ失せやらで、人は蝶花のうつら〳〵と、華美のみを衒ふ寶曆の頃は、社杍の鯨自然と挫けて、骨の無き武士の多かる中に、これはまた女性の身として、一段に勇ましき二人の尼あり。

さりながらその名も伏屋の裏に、埋木の花咲く折もなく、世の秋を觀じてにや、時雨の落葉に身を任して、老いて俤の移るに、色も香も無けれども、墨染の腰衣に娑婆を包んで、門外不出、

他人に見らるゝを好まねば、盆に栽ゑし吉野櫻も年々に憔悴して、可惜盛りを垣間見られずして凋む憾みあるを、況てや女子に百年の春あるものあらで、一朝粉膩の粧ひ褪めては、花の木陰に駒繋ぐ人さへあるべからず。

この二人の尼の昔時の俤慕はしきは、今も眉目の間に殘る愛嬌なり。何時の頃より頭剃りこぼちて、斯かる土地に住み詫ぶるにや、訝かしき限りなりと、村内の不思議の一つに算へられけり。

名にしおふ隅田川白髭の社より、やゝ東の方に踏ん込みて、秋ならば白晝も虫の音を聞くべき閑靜なる處に、よしありげなる

庵あり。小柴垣を結ひめぐらし、門の栞戸半ば開きたり。一方は竹叢に隱れて自然の城郭をなし、一方は田の面を見渡して、清風絶ゆる間なく、垣の外には小川流れて、さや〳〵と水音の聞ゆるに、春は一枝の梅にも知られて、南は早く笑ひ初め、麗らかなる日晷は茅葺屋根の庇を辷りて、障子の骨四つ五つ目を照しぬ。只看れば容貌うるはしげなる尼の、庭前の井戸端に立出でゝ閼伽桶に水を汲み、早咲の梅花一枝手折りて、竹椽の下に立寄り。手向けの花を折りたれば、靈前に供へ給はずやと呼はれば、室内には念佛の聲頓に止みて。新らしき花を供じ給はんとな、命日の靈も嘸ぞ喜び給ふべし、いざ此方へ賜はれと云

ひつゝ、障子開けて立出で、靈前に花を供ずるは、こもまた優しき尼なりけり。手にかけし念珠に稱名の數とりながら、椽の端に直と座して。おう何時の間にか、美事に梅も咲きました な。御身も妾も斯かる身になりてよりは、花も月も慕はしき事のなく、たゞ〳〵一門の冥福を念ずるより外無ければ、春秋も知らぬ間に過ぎ。こゝに三昔しの今日は大石殿始め各々が果て給ひし日なり、松風吹いて寒月泉岳寺の墓前に冴ゆれど、妙海殿は菩提所を守護し給ひて、念佛修行に退轉なく、妾等も此處に庵を結びて、御奉公申し居れど、今もなほ慕はしきは父上の御事なり、時も如月の半ば過ぎなれば、俗にありし頃は、父上

と共に野に清香を趁ひける折なるに、斯くなりては蝶に心の移らふともなくて、徒らに餘年を貪ぼることの氣樂さよ。御身は回向仕果て給ひしか、妾の勤めは濟みたれば、代りてなし給はぬかと睦ましげに辭を交ふれば、庭前にありし尼はうち頷きて。さらば妾代りて回向いたすべし、いざ見たまへ、出家には要無き色香なれど、梅花の咲き揃ひたる抔、なか〳〵に興ある眺めなり、庭前に下立ちたまはずや、履物を參らせんとて、室内に入れば、尼は云ふが儘に庭前に下りて、其處此處とそゞろ歩く時、物申の聲して、門より入り來る男あり。年は五十路の坂を越えつらんか、相好に憎氣なく、腰には大小を佩したりけり。

尼慌たゞしく出でゝ、何處よりと問へば、男は慇懃に會釋して。我はお目付役を勤むる者なるが、弗と御門前を通りかゝりしに、折かけ垣の梅の花の、いとも美事に咲きゐたれば、數奇の心に立寄りたり、煙草の火を惠み給はれと云ふに、尼は機嫌克氣に微笑みて。おう〳〵、ようこそ入らせられし、こなたへ掛けさせ給へ、妾等斯く住み詫びては、訪ふ人も無き柴の戸、雨に曝されたる樣なれど、塵は能く拭ひ置きたれば、腰を下させ給へと、うち解けて物云ふ程に、茶を汲み來りて客にすゝめ、常に客人とて無ければ、茶臺樣の器もなし、ゆるし給はれとて、差出す茶碗を客は手に取りながら、只見れば尼の掌に刀瘢とお

ぼしき痕あり。訝かしと思ひながら、その顏ちらと打瞻れば二人ともに賤しき人とも見えず、今もなほ優しき顏に、凛としたるところありて、人品の氣高きこと高家の姫君とも見擬ふべし、兎も角も若き時のさま、思ひやらるゝまゝに、客は茶に咽喉をうるほして。尼御前には、何日の頃より此處に住み給ふぞ、若かりし時は、お宮仕へなどし給へりしや、花も羞らふ御俤にて在せしならん、世の諺にも容顏美きは身を滅ぼす斧とか申す、お小姓の誰やらと、左樣した譯の事ありて、浮世の中の儘ならぬより、斯かる姿になり給へるにはあらぬか、懺悔には百の罪も消ゆると聞く、語り聞かし給はずやと問ひ出づれば、二人の

尼は涙ぐみて。いえ〳〵、さる浮事は身に覺えだに無けれども、この掌の傷は、つゝむ由ありて、年月他人に語る事もあらざりしが、仇々しき事にて、年老ひたる尼に濡衣着せ給ふことの、口惜しう思ひ侍れば、聊か身の上をお話し仕るべし、其處は端近なれば、此方に入らせ給へとて、客を一間に招じたり。

（二）

京の嵯峨野を零落し身の捨處と、荒家の裡に佗びしく暮す浪人躰の男あり。以前は播州赤穂の侍なりしも、主君淺野殿の雲隱れしたまひし後は、諸士其所此所に離散して、流浪の身の定め無き世に住み佗び、農と變じ商と化し、纔に口を糊する者の多

き中に、これはまた世渡りの事を知らぬ男にや、たゞ徒らに坐して喰うて、饑餓の來ん日を待つものゝ如し。よしや鷹は死すとも穂を摘まず、士は窮しても迷はぬものとは云へ、無爲に暮し居ては、米が天より降るものでなく、金銀は地から湧くものにあらず、働いて食ふにさへ、世辭辛き世の中なるに、浪人の分際でお米庫の二つ三つも所有て居るらしいアノ顏色は、あアの今の中に佩せる兩刀の鞘を外けて、槇木割にでもすればよいのにと、何日も近所に住む芋作が口の端にかゝりぬ。

小唄に名高き嵯峨や御室も、花の盛りの過ぎ去りては、夜は淋しき片山家、野面の秋の裏枯れつ、嵐山颪そく〳〵と、荒屋の

檐に音させて、窓に射し込む月影の、更けて一入冴えかへり、四隣物凄きまで寂寥せり。破れし垣根を結ひまはせし茅屋の裡には、病み衰へたる浪人が、布團の上に起き直りて、隙間洩る風に瞬く行燈の下に、愁然と腕組みしてうち凋れ、幾回か嘆息なして獨語やう。云ひ甲斐無き今の身上や、我も山岡覺兵衛とて、淺野の藩中にては、他人に知られし武士なりしが、かく零落れては存命ても詮なし。主君不慮の御最後ありし以來、仇吉良上野を覘けねらへども、時期到らねば手出しもならで、諸士其所此所に潜伏なし、敵方の隙を窺ふ折柄、如何せん我とこの病氣にかゝり、苦痛に窶れ貧に痩せ、氣力頓に衰へて、復讐なん

どは思ひも寄らず、糊口する道さへ盡きし儘、餓ゑて死を待つ苦しさは、想ふに前世に犯せる罪の深くて、斯くは武士道に外るゝにや、聖賢の教にも君辱められ臣死するは理の當然なるに、病みて今迄生き延びしも、皆これ上野を討たんが爲なり、さればこそ一家中の面々も、あるに甲斐なき活計して、時節到來せんを待居らるゝに、我のみ武運に盡き果てゝ、坐して死を待つ無念さよ、さりながら大石殿が御前途見屆け、その上にて割腹なさんと思ひ居たれば、今死なんも口惜し、別けて女房が心切を無にするは情無き業なり。我の病床に臥してより以來、朝夕の煎藥時刻を欠かせし事なく、馴れぬ世帶の繰廻しも、貧

をば我に知らさじと、辛苦に弱る心も掬まで、今更自害がなるものぞ、あア辛らや男並の武士一人が、生死の境に身を置き兼るは、えゝッ殘念と、切齒をなして口惜がり、拳に落る涙をはらひて。それにしても山科の安否如何やら、大石殿は御無事なるか、都に遠き住居には風の便も聞くことならず、あアまた木枯の音がするに、女房は何故歸らぬかと。表の方をうち見遣りて、たゞ落涙に及びけり。

折から雨戸を押開けて。覺兵衛どの只今歸りました、途中で手間費りましたので、何時までも御不自由をさせました、今日は天氣も快晴つたゆゑ、市の方も豪らう賑かで、それは〳〵面白

う御座いました、北野の天神さんへも參詣しましたら、恰度懇意な大原女に逢ひまして、變つた噂を聞いて來たが、ホンに人の心と云ふものは、明日は知れぬもので御座いますな、それはアノ山科に御閑居の大石殿がと、辭を切れば覺兵衛思はず膝を進め。おう、その大石殿が如何なされた。まア斯うで御座います、アノ大石の御家老樣が、何うした風の吹き廻しか、後月の中旬から、祇園町の一力に流連の御全盛、幇間末社に取卷れて、揚屋酒に入浸り、太夫とやらの膝枕に、たわいも無く泥醉て御座るとか、あれでは知恩院の鐘の聲でも目が覺めまいと、見て來たやうな苍の取沙汰、妾も聞いて吃驚し、告げて呉れた女に

別れて、祇園詣りの序でがてら、近所へ行つて噂を聞けばまんざら嘘でも無いらしい、こりや斯うして居る場合ぢやないと、急いで戻つて參りましたが、息が斷れる路が遠い、ホンに隙が入りました、御塩梅は如何で御座います、藥も煎じて置いた筈、もう召上りましたかと、慰むれども覺兵衛は默然として腕を組み、唇嚙みくめ居たりけり。

良あつて顔を擡げ。女房ども好う聞いて來て呉れた、その噂耳に入らずば、何日までも大石殿を忠義無二の武士と心得、復讐の事打任せ置くのであつたに、あァ頼み難きは人の心ぢやなと、口惜氣に云ふ夫の顔を、女房つくゝ打瞻るに、眼もうるみ血

色も悪しければ、若しも風邪など感かんかと、脱ぎある夜着をかけてやり、其身は携へ歸りたる包みを解き、中より地紙取出して、扇折をぞ始めける。

覺兵衛それにジッと目を注け。女房そりや何品ぢや。はいゝこれは六角の扇屋から頼まれた手内職、貴夫へ申上げるのをッイ失念して居りました。ナニ手内職！えッ誰が許してその扇引請けた、涙人しても武士の女房、町人のする手内職して、夫の顔へ泥を塗つたな、そ其扇折氣に食はぬ、富を願はゞ再縁いたせ、この覺兵衛は暇を呉れる、出で失せよ、さァ出て行かぬか、もう言譯は聞かぬ哩、我貧困に迫るといへど、甲冑一領傳來の

太刀一振は、死すとも側を離さぬ覺悟、さるを一時の貧に苦しみ、夫の許さぬ賤しき業して、病む身に藥餌を侑めんなぞとは、その志卑劣〳〵、えッ出て失せよと、驚き騷ぐ女房が、袖を掴んで戸外に突き出し、門かけて座に直り、涙に暮るゝぞ仔細あるべし。

（三）

後髪彈く三味線は祇園町、茶屋の仲居が取卷きに、大石良雄は本性を失ひて、腹を色酒に腐らし、海鼠のやうに泥醉れつゝ、幇間末社の手拍子に、乘つて胡蝶の夢心地、呂律まはらぬ舌頭に、池の汀の鶴龜はと、小謠唄ひ扇もて、調子とり〳〵後につく、女中はいづれ花の雲、霞たなびく振袖の、裏より匂ふ留木の薫に、良雄は一入興がりて。やァ嬶か〳〵、皆の者奥に行て遊んだがよい、もう踊は厭きて、三味線も嫌ひになつた、そう耳元でヂャン〳〵やられては、この耳が聾になる哩、馬鹿奴、岩戸神樂ぢやあるまいし、大抵にして酒も切り上げよ、燒石に水の比喩はあれど、大石に酒を爾う呑まされては堪らぬ、拙者は此處にゴロリと轉んで、ドリヤ一寐入いたすとしやう、蝶になれ〳〵莊子の夢が、アハヽヽヽヽ、女中共次へ立て只今これにて御寢なるぞと、他愛も無き肱枕は何事ぞ。身は一藩の大身として、其君辱められし上は、城を枕に討死をもすべきに、

生を偷み人目を忍びて、花に戯れ月に醉ひ、御馬前までと預りたる、命を酒と色とに奪はれ、家中の諸士と誓ひたる復讐の事抔は、今日になるまで鵜の毛程も口へ出さず、たま〳〵決意を問ふ者あれば、浮世は兎角色と酒ぢやと、大盃笠に高鼾。樽を枕の底ぬけ大盡、綽名を有喜様と呼ばれて、五條の橋より評判高し。

布團着て寢たる姿の圓山も、薄墨流す一刷毛の、闇に隱れて淡く濃く、鴨の水音聞えねど、こゝ一力の奥庭は、敷き詰めたる枯松葉に、飜れし程の露の玉、遣水清く魚躍りて、釣燈籠の向ふには、芭蕉の風に破れしあり。その椽端に大石は芋虫のやうに轉寢せしが、四邊に人無きを窺ひ、岸破と起きて庭前じッと打眺むるに、今さし昇る廿日の月、竹の葉越にきら〳〵と、座敷の隅を照すに目をつけ、物をも云はず凋れかへり、落る涙を袖に拂ひて、ア、變らぬは月の影、變るは人の身の上やと。思はず獨語折から、栞戸の蔭に婦女の聲して。御家老様と微に呼ぶ、呼ばれて大石驚きながら、早速に身を反して寢轉び。コリヤ女中共は居らぬか、水を持てと呼ぶ聲は、未だ本性は違はざりけり。

呼べども囈語と聞流して、寄り來る者のあらざれば、良雄はその儘高鼾、頓ては前後も知らず眠りぬ、夜は次第に更くれども、

大石が四圍に人影だになく、宵の口には舞子お山と取卷きて、女護島の涅槃像の如く賑はひしも、眠れば色香忽ち散りて、蜂も宿らず鳥も栖まず、此室のみ寂々寥々たり。

表の方のざんざめく、豪遊を避けて裏座敷に、良雄はまたも起き直り、栞戸の方見瞻りながら、訝かしげに頭傾け。はて合點ゆかぬ、最前たしかに我を呼びしは婦女の聲、舞子お山が呼聲ならば、有喜樣とこそ云ふべきに、家老呼ばゝりは片腹痛し、聞說く仇上野方にては窃に忍びの者を入れて、味方の動靜を窺ひ居るとか、察する所最前の婦女の聲は、我心を試さんためのの、敵方の計略にてはあらざりしか、さるにても上野が心の穢

なさよと、冷笑ひつゝ油斷なく四方に眼を配り見れば、垣根の下に人影あり。良雄は早くも目を注ぎ、其處に居るのは誰ぢやと問ふ。彼方も後邊に意を配り、恐る〳〵近寄りて、御家老樣、御免なされて下さりませと、云へども此方は心を緩めず、刀の鯉口うち濕して、曲者ならば斫らんと詰め寄る、されど婦女は少しも臆せず、妾で御座いますと、燈籠の火前に顏さし向くるを、良雄はつく〳〵眺め了り。おう、御身は山岡覺兵衛殿が内方、何用あつて此席へは參られしぞ、他目については悪しければ、疾く〳〵立去給はれと、血相變へて云ひ出せり。婦女は潸々と泣き伏して。推參ながら此處まで忍んで參りしは、夫覺兵

衛が最期の所存を申上げんためと、聞くや良雄は仰天し。ナニ覺兵衛殿が最期の遺言となし、して〳〵樣子は如何で御座ると、膝押進めて打問ふに、婦女は始終涙に暮れ、兎角の辭も出でざりき、良雄は急き込み。えッ未練なり、此處を何處と思召さるぞ、暇どつては人目あり、事の大略搔摘んで物語るべし、早く〳〵と勵まされて、婦女は漸う涙をとゞめ。申すも悲しき事ながら、一通りお聞き下さいませ、夫覺兵衛こと本國を立退きし以來、嵯峨野の奥に侘しく暮らし居りし處、重き病氣に犯されて、足腰さへも自由ならず。無念の月日を送る中、北野で聞いた他人の噂に、赤穗の御家老大石殿は、祇園の揚屋に入浸りて、

主君の仇を討たうともせず、酒に魂打拔かるゝは、腰拔武士の手本ぢやと、取沙汰するを眞實と思ひ、聞いたる儘を夫に話せば、口惜涙に搔き暮れ給ひて、變り易き人の心やと、嗟嘆の餘り妾の不在を幸ひに、ツイ自害して果てました、其後肌の守を見れば、神佛の符璽樣の物もなく、たゞ君父讐共不戴天と書いたる遺書一通あり、これ御覽下され、懷劍までも持添へました、この上は夫の志遂げさせたければ、名を連判帳に記して給べ、婦女の淺い心から、御前樣を浮いたる方と思ひ込み、夫を先達てましたる罪を、お免しなされて下さいませと、地に額づきて泣き詫びける、良雄は嚴然と容を正し。あア覺兵衛殿

は不愍な最期を見給ひしよな、さりながら其志は屹度遂げさせやる程に、暫時山科に隠れ居たまへ、サア人目無き間に立去れと、云ひて嘯く月の前、水も眠りて音絶えつ、葉竹戰ぎて白露の落ちて閃く光あるのみ。

（四）

土一升に金一升を篩にかけて通したやら、萬家の瓦は砂子を撒きしに異ならず、草より出でゝ草に入りし、月は昔時の月影なから、變り果たる武藏野の、腹皷打つ狸の名は、色里にのみ微に殘りて、簑輪の田甫に蛙の聲を漸と聞く、こゝ大江戸の賑はひは、またと類ひはあらざるべし。

別けて兩國橋の繁昌は、二六時中に三筋の鎗絶えたることなく、往ふさ來るさの人の足は、水ならねども波を打て、空に埃の雲を靡かせ、觀世物小屋の太皷の音は、雨ならざるに百雷の響を起す、少し距てゝこの雜沓を知らず顔なる、本所二ツ目の橋通りは、お屋敷の長屋檐を並べて、物見格子に御次男が、通る女性の品評め、續く土塀に樂書の、相合傘の戀知りか、見かけで云へば嚴格しき、五十餘りの老人が、未だ年若な娘をいたはり、急そ〳〵歩む行先は、吉良の屋敷を折曲りて、松井町なる煙草屋へ入りぬ。

老人は店の閾に腰うちかけ。十次郎殿よく御精が出なすな、拙

者は今日しも小春の空には珍らしい上天氣ゆゑ、娘を連れて墓參りに出かけました、貴殿は、お年もお若いのになか〳〵御奮發なさるゝことぢや、時に少と折入つて話したき一大事がある、一寸勝手へ參つてお耳を拜借いたさうといへば、主人は刻みかけし煙草の手を休め。ナニ一大事とな、山科より音信でもありましたか。シッ聲が高いワ、靜になされい、壁に耳あり、障子にも目がある世の中ぢや、謀計は密なるがよいとあれば、此處は端近にて他目がある、奥へ〳〵と語り合ひつゝ、娘を店にとり殘して、二人は一室へ入りにけり。

頓て老人は主人に斯くと耳打すれば、聞き了りて莞爾と笑ひ、

俄に丁と小膝を叩きて、大石殿出來されたり、小人は酒色を以て誑らかさゞれば、其隙に乘ずるの機無し、今や吉良上野介、日頃の警衛に倦みて、漸う準備を疎畧になし、剩へ好色の白痴とて、酒に溺れ本心を搔き亂して、美目好き侍女を召抱ふる由風聞す、その噂若し眞ならば、早く我方より手を廻して、御息女お松どのを屋敷に住み込ませ、討入の夜の案内をもなさしめ給へ、遲れなば他人の足跡や踏まん、さりながら最愛のお娘御を人質同樣になさるゝこと、何程か御心苦しかるべし、またお松どのが胸の中の切無きこと、餘所ながらお察し申すと、涙を隱して云ひ出れば、老人は頭をうち掉り。いや〳〵左樣は仰せ

られな、御身とても拙者とても主家沒落の其折から、一命は晩かれ早かれ無きものと覺悟の前、娘とてもその通り、御臺樣に冊き奉りて、松よ〳〵と御慈悲を下し賜はりし御恩報じに、御主の爲めになることなら、たとへ此身を粉に碎いても、親ながら氣味の好い程潔き決心を、大石殿に言ひ遣れば、そんなら直に傳手を求め、吉良の屋敷へ入込みて、始終の樣子を注進せよ、若し謀畧成就せば、四十七士の一人にも增したる程の忠義なりと、事を分けてのお勸めに、親子共々喜びて、この嬉しさを御身にも知らさうものと、態わざ參つた、十次郎殿喜んで下され、足はぬ娘が此親に優りし忠義を立てるかと、思へば何

やら鼻が高い、が、たッた一つ悲しいは、許嫁ある御身と娘と、未だ祝言の盃もさせで、王昭君が胡關の恨み、見す〳〵敵の邸内へ、手離して遣らねばならぬ武士の意氣地、あァ味氣無い身の上ぢやな、あれ〳〵店に居る娘の姿を御覽じろ、未だ十八の蕾の花、雨にもあてず嵐にも、吹かせずこれまで育てたる、親の苦勞は並大抵では御座らぬぞ、しかも十五の春の暮、お屋敷なる奥庭の、櫻も今を盛りぞと咲き揃ひたる折からとて、御臺樣には和歌の筵を開かせられ、御奉公申上ぐる女中衆も、數多自詠を參らせけるに、娘の歌はその中での秀逸とて、身に餘りたる御賞辭、其上御身と娶合せんと、勿躰ない御臺樣の御媒妁、

貝合せ好い一對の夫婦ぢやと、羨まる〳〵程肩身が廣くて、今日か明日かと祝言の御沙汰をのみ待ち居りしに、御家騒動ありてより、花に嵐は物憂き事の始めとなり、對の扇は離れ〳〵て、何處の風を便るやら、明日からの娘の身が不憐ぢや、えゝこの別れ、氣骨が折れて、宗右衛門年の五つも老つた樣なと、了得の勇士も恩愛の絆に愚痴を溢しけり。十次郎は默然として俯向きし顏を擡げ。先刻より段々の御話し、御心切あり難う存じまする、殊に御親子の御間柄、その御嘆きもさるとながら、武士の妻マツタ娘にして、敵の陣中に擒となり、忠孝二つを全うせしもの、和漢古今に其例あれば、御嘆きは御無用たるべし、拙者には未だ許嫁のみの妻なれど、夫婦共々君に忠義を立るのは、身後の名譽この上やあるべき、さるをなどて悲しみ申さん、鶴亀〳〵と勇み立てば、老人原宗右衛門も今の言語に勵まされ。

おう勇ましや聟殿、御身にさへ御異存無くば、我等親子の如何で躊躇いたすべき、娘來よ〳〵、十次郎どのより許が出でしぞこゝへ來て禮を云やれと呼び立つれば、娘は半ば羞らひつゝ、暖簾をくぐり父の傍、袴の裾に纏綿りて聲だに立てず辭儀する樣は脊丈伸びても小兒氣の、愛度無き風のしほらしさ、晴れの小袖に晴れやらぬ雲もあるかや裾摸樣、曙染にぼかせるは、娘が顏のホンノリと、これ一對の色合なるべし。

折から店へちらと來て、賴みませうと音信ふは、ツイ聞き馴れぬ女性の聲なり。

（五）

如何に忠義の爲めとは云へ、振分髪の頃よりして許嫁の、妻よ夫と晴れて呼ぶ日を樂しめば、花にも鳥にも目は移らず、命までもと意に誓ひし男に別れて、原宗右衛門の娘お琴は、王昭君の恨を呑みつゝ吉良の屋敷へ女中奉公に住み込めば、上野介固より好色無賴の痴漢とて、お琴が艶色にいかでか意馬を狂はさじらむ、狂ひ初めては繫ぎ止むべき手綱をだに持たぬ身の、忽ち魔界に脚を辷らして、驕奢放逸酒を被むり肉を貪り、その上

口入の烏婆を說き伏せて、お琴を掌中の珠玉にせんと謀ること、斑猫の毒あるを知らずして、新菊の香に醉ふ熊蜂の危きが如し、吉良上野が警衛の尻押には、當時十八國主の隨一と聞えたる上杉彈正大弼殿の見張ありて、蟻一疋も無斷に御門は通さぬ掟なりしが、敵も味方も睨み合の合戰には、双方氣拔して、一年半年と空しく過ぐれば、何日しか互に弦を外し楯を伏せて、安眠を貪るが例なり。

上野介もそれに眞似てか、今日の今まで手出しだにせぬ赤穗の諸士を臆病と嘲り、骨無き海月と冷笑ひて、齒牙にだにかけぬやうになれば、風無き舟に帆を上ぐるに及ばぬ道理と、俄に夜

徹しの張番を止めて、たゞ老耄たる仲間二人に夜を守らせ、居眠する間々に拍子木の音かち〳〵かゝッと響かせり。

總じて高家衆の驕傲なるは、言語に絶えたる程なりしが、別けて吉良家の權勢の熾なるは、空飛ぶ鳥も落なんばかりの有様にて、先づ大名と婚嫁を結び、分に超えたる奢を極めて、下に對することゝ、塵芥の如し。斯かれば小大名を見ることは、恰度狗なんどを待遇ふやうになしけるにぞ、血性男子の如何で腹を立てざらん、淺野が一太刀怨みを報ひしも、所以なきわざにはあらずかし。

やがて死ぬ氣色も見えず秋の蟬、夕陽を射くる小座敷の、障子

にちらと映し繪の、木影を眺めて茫然と過去未來の事を考へつゝ、襟に頭の半ばを埋めて、牽牛花の露欲しげなる風情するお琴、花の姿も想ひに痩せて、綾羅の衣も重きを嘶つ。やゝあつて顔を擡げ、ふりかゝる鬢の後れ毛搔き上げては、またも思ひに塞がる一間、明けて訪ひ來る朋輩さへ無きにぞ、いとゞ心も結ぼれ勝、たゞ降るにつけ照るにつけ、忘れかぬるは夫の安否、父御の消息。渡りに舟もあらぬ身は、風の便りもあらずして、蘇武が匈奴の幽囚も、斯くまで辛らくはあらざりけむ、あァ昧氣なき身の上やと、袖に時雨の乾く間もなし。

折から雛といふ小間使の小娘、閾の外より聲かけて、お琴さま、

今中の間に煙草屋が來て居りまするが、貴女も一喫吸つけ煙草召し上がらぬか、その商人の男振は、役者で云へば辰之助ぢやと皆の衆が大騒ぎで御座んすと告ぐるにお琴はうち驚き。もしやそれかと椽側傳ひ、窃と近寄り障子の穴からさし覗けば、擬ふ形無き十次郎なるにぞ、飛び立つばかり悅こびしが、顏見て嬉しい素振をば、朋輩衆に悟られて、粹た中ぢやと氣つかれたら、それぞ計畫の破るゝ源、左すれば是まで盡したる、忠義も水の泡となりなん。逢はぬ昔時と諦めて、お傍に居ぬこそ互の爲めなれ。左樣ぢやゝと獨語て、己が部屋に立戻らんとなしけれど、未練に弱き後ろ髮、引かれてまたも寄り來るを、ジッ

と堪へて我慢して、居間に歸るや溜め涙、袖に降らして忍び泣く。

居間なる床に懸けたる軸は、おかも深雪に常盤の圖、泣き叫ぶ兒をいたはりて、賴む木蔭の市女笠、九郎に風を中てさせまじと、つくる袖垣、關の戸を叩きかねたる落人も、時節を待てば梅の花、咲いて其名を世に殘す。妾は常盤に及ばねど、時機を待つ身は一つなり、悲しき目にも遇ふてこそ、男子の爲し得ぬ効力も立つれと、氣を取直し、流石に武士の娘とて、女々敷き擧動あらざりけり。

さるにても逢ふて知らする事のあり、聞きたきこともあるもの

を、一目なりとも顔見たやと、またも未練に搔き亂す、心の絲の結ぼれは我と解く由あらざりしが。漸うにして容を改め、涙を衣もて拭ひ了り。ホンに未練に泣いて居た、こんなに氣が弱くては、所詮御臺樣に忠義とやらを立てられまい、かゝる苦勞をする事も妾ばかりの上ぢやなし、何日ぞや十次郎樣のお宅で逢うた山岡の御内儀も、遙々東へ下られて、此後傳手もある折には、當御屋敷に御奉公遊ばされて、妾と一緒に仇を討たする手筈を内通なさるゝとか、こんな大事な役目を帶びて、このお屋敷に入込みし妾なるに、何故このやうに氣弱になつたかと、胸に問ふては自ら勵む勇ましさ。俄に何をか思ひ出けん。墨磨

り流し紙を展べ、さら〳〵書きて卷き封じ、また中の間に行き見れば、十次郎は今や女中に會釋して、門より歸へる際なれば、お琴はこれぞ屈竟と、表の長屋に密と入りて、物見格子の障子引明るに、天の與へか見る人無ければ、早速に釵抜き取りて、認め置きたる書狀を結ひ付け、通りかゝる十次郎が足下に、ヒラリとばかり投げ出すを、彼方は早くも拾ひ上げ、格子の窓を見遣るを名殘、閉づる障子に急ぐ足音、右と左に別れても、思ひの種は盡きざりけり。

（六八）

容目好き花の盛りをのみ愛づるものかは、婦人は若葉の三十一

二、年數から云へば、色も香も溢るゝ程は無き頃なれど、それまでには見えぬ若化粧の一得には、剃りたる眉の痕匂やかに、染めし齒並の美くしきにも、人の目を引く山岡が女房お粂、去ぬる頃大石が計略にて東に下り、本所松井町なる矢間が家に宿かりて、十次郎が姉なりと世間へは吹聽し、吉良の屋敷に出入する商人などを頼みては、只管御奉公に上らんものと、いろ〳〵心を碎きたる甲斐ありて、翌年如月の始め、諸鳥梢に順れ睦む時、上野介が館に入込むことを得たり。

されども原宗右衛門が娘のお琴は奥勤めにして、其身は臺所廻りに働けば、十日餘は互に相見ることもならで、お琴はまたお

粂がこの屋敷に居るといふことさへ知らずに、また四五日は過ぎにけり。

今日は初午祭の當日なるに、空は清く晴れ渡りて一點の雲も無く、春風の心地好く吹き度るに、何所よりか梅の香の音信れて、夕暮よりは月のあるを一入に、千金の儲け物と、屋敷の隅の稻荷社には、參詣の老若引きも切らず。漸う童の凧を收むる刻ともなれば、いづれも夕餐に忙しき折とて、人の足も稍々閑なるを見計らひ、吉良家の主人上野介は、黒羽二重五所紋の羽織を着流し、同じく黒の二枚襲ねを裾長にひらめかして、巾廣博多の帶に脇差のみを佩き、庭木履輕らかに踏み鳴らして、からこ

ろ〳〵と散歩く後の方に、たゞ一人附添ふは女中のお琴なり。矢飛白のお召に友染縮緬の下着を襲ね、緋金襴の帶を竪やの字に結びたり。鬱金縮緬の帶上げを垂れたるは、蝶も菜の花に擬ひやしぬらん、眞紅の襦袢を庭中の黄鸝も花とや眺めん。髪を中高島田に結ひて、銀平打の釵を挿し、手には紫の服紗もて主人の佩刀を捧げ持ちたり。肌の色は白くして雪に優り、容目美しくて天女の姿やこれなるべし。上野介滿面喜悅の色を現はして、折ふし後邊を顧みながら。琴や何んと心地好きことではないか、斯く並びある行燈に火を照しなばまた何程か美しからう、夜に入りなば女中共大勢と一緒に遊ばうではないかと云

へば、お琴は莞爾と微笑みて。ホンに御意の通りに御座います、今日一日の面白さに、壽命の百年も生延びたさうなと、お奥でお噂を申して居りました、永の月日御奉公をいたして居りますと、中にも、斯した事のありますのは、何よりお嬉う存じますと、羞らふ如く打俯けば、上野介は一入笑壺に入り。アハ、、、、、氣の輕い事を申す女ぢや、まこと奉公は氣の詰まるものであらうな、殊さら其方位な年頃では屋敷勤めは窮屈なものぢやが、この上野介が不愍をかけて遣はせば、泣かずに辛抱するがよいぞ、そして年齒は。はい十八歳の遲そ生れで御座います。なに十八ぢやと、屋敷へ來ずば未だ苦勞だに知らぬ蕾が、多く

の人に交はりて、雨風雪に苦しめらるゝは、さて〳〵惜しきものではあると、口の中にて獨語時、後邊にどや〳〵人の足、何事ならんと振顧れば、お末を勤むる女中輩の、賄方用人に眼隱しかけて、鬼事をこそするなりけり。

今日は夜更けて就寢るまで、遊戯を構ひ無しとの事より、家來は轍鮒の水に入り、籠の鳥の雲井に啼く思ひして、今鬼事の眞ッ最中ゆゑ、御前も構はず遁げ隱る、彼方の木蔭に潜みては、飼犬に裙を嚙まれ、此方の垣根をぐる〳〵廻りて、茨に袖をからむもあり。鬼さん此方ぢや手の鳴る方へと、囃子立てゝは吶と笑ふ。その一群の中よりして、遁ぐるに見せかけお琴が傍へ

寄り添ふ者あり。お琴は訝かりその顏眺めて、言語やかけんとしたれども、上野介に怪しまれては一大事と、眼もて知らせば彼方は察し、此所を離れて奥庭に又も千鳥の立つ如く、パッと散りては直に寄り、笑ひ興じて樂む中に、日はハヤ曛れて月出でたり。

上野介は居間に入り、お琴は用事も果てたれば、部屋に戻りて着替をなし、庭口より忍び出でゝ、以前の處に至り見れば、樹の間〳〵に行燈照して、火影を亂す人も無し。月はあれども葉隱れの、闇こそ好けれと忍び來る女中は山岡お粂なり。待ち設けたるお琴にも、敵地の事とて油斷せず、微けき光明を便りと

して、來る人の顔篤と見究め。お前はお粂樣ぢやないか。おうお前はお琴さま、御無事で何よりお嬉しう御座います。妾も貴女に逢ふたので、何んなに氣强うなつたか知れぬ、あァこれまでの苦勞心配で、これこのやうに痩せました。ホンに大分肉が落たさうな。そして當家の用心は何うで御座います、未だ仇討の時節は來ぬかと、十次郎樣が一方ならぬ御心痛、山科からも使者が來て、屋敷の樣子は如何ぢやと度々の申越し、それで妾も此月始め漸う此家に入込みました、これからは二人心を協せ、屹度吉左右知らして遣りましよ、お心强うお思召せと、慰め遣ればお琴は喜び。それで妾も安堵しました、そして父さんは御

壯健でか。おう〳〵御父樣も御丈夫、十次郎樣にもお變り無うて、折ふしに貴女の噂話、貴女の方でも夢見の好い夜は、屹度お噂の出た日ぢやぞえ。あらまたその樣な事云ふて、妾を嬉しがらせると喜び涙に暮れにけり。

（七）

龍も時機に遇はざるときは、空しく淵に潛むことあり、されども一旦雲を獲るの曉には、また池中のものにはあらざるべし、原宗右衛門の娘お琴は、吉良の屋敷に入込みて、敵の動靜を探るといへども、花の姿の十六七、未だ年若き身の上にては、憂き事前に重なりて、味方に知らする音信さへ、心の儘にならざ

れば、泣いて袂に時雨して、秋も過ぎ冬も暮れ、翌年二月の末つかた、梅咲いて花の噂のとりどりや、鳥も囀づる頃なりけん、待つ甲斐あつて山岡の女房お粂にめぐり逢ひ、それよりして龍の翼を得し如く、喜び勇むも道理なれ。

過ぎ行く月日の半年あまり、今年も早く秋風立ちて、巷に賣るや虫の聲、風鈴の音の靜けさにも、日和の好きを知られけり。日は隱れて七日の月は木立に隱れ、庭は一面一刷毛の隈を描いた墨繪の松、釣り燈籠の火影も暗く、築山の彼方に葉竹戰ぎて、雨降るかとも疑はれ、泉水の響は琴の音を彈でゝ、寂として夢を喚ぶなる淋しさに、お琴は今宵は非番なれば、己が部屋へと

引下りて、行燈の下に書さし展べ、結ぼれし氣を慰むるに、晝の疲勞にや、机に臂をもたせし儘、我とも知らず居眠りけり。

訝かしや今が今まで、我が部屋なりと思ひ居たるに、これは如何、いと廣漠なる原野に出でたり。時は秋の最中なれば、萩桔梗こそ盛りなるべきに、左は無くて山櫻の時を得顏に咲き誇るあり、怪しみながらも進み行けば、諸鳥梢に囀りて、霞の幕を春の山、花燃ゆるかと思ふばかりの麓の方に、小袖幕を打めぐらして、花見の群ぞ居たりける。朗々と吹きすさむ笛の音は、晴れたる空に響き渡りて、その心地好さ、言語には得も盡されず、お琴も現心になりて、笛の音の聞ゆる方に行かんとすれ

ば、側に咲ける吉野櫻の木蔭にて、駒いと高く嘶きけり、恐やと驚き走せ行きつゝ、なほ振顧りて彼方を見れば、月にも擬ふ美少年の、銀鞭を腰に挿みて、根方に倚りて立たりけり。熟々見れば矢間なり。お琴は喜び十次郎様と呼ばはりつゝ、走り寄らんと近づけば、矢間は手をもて押止め。粗忽ばしき給ふな、今日は殿の御供いたし、櫻狩に參りしなり、如何許嫁の中とは云へ、餘りといへば見苦しきその振舞、人目が御座る、世間があるぞ、えッお扣へなされと叱られて、お琴は取付く島もなく、泣くに泣かれず佇立めば、矢間は繋げる手綱を解き、駒を牽き立て行かんとするに、お琴は悲しさ口惜しさ、暫時待つてと云

ひつゝも、十次郎が袖を抑へて泣き沈み、逢ひたかりしと喞ちけり。

矢間は嚴と容を改め。そは未練なり、不覺なり、御身も武士の妻女ぢや無いか、一旦心を決せし上、敵の陣中に忍び入りては、一命は元より君への捧げ物、さるを暫時の間我に逢ふ事ならぬとて、陣屋を拔け出で來りしこと、云ひ甲斐なき不所存なり、我は斯かる女々敷き妻女は持たぬ筈、然るを夫と呼び給ふは、人違ひにて侍らずや、他所をお尋ねあるべしと、袖打拂ひ塵拂ひ、駒にヒラリと乘るよと見る間に、一鞭あてゝ雲霞、跡をも見ずに駈けて行く。お琴は尙も追はんとすれば、思ひもかけぬ

横合より上野介ヌツクと立出で。お琴〳〵と呼び立つる、お附の女中も一同に。アレ召しますと云ふ聲に、弗と眼を覺ませば夢なりけり。月落んとして枯柳の枝に懸り、孤雁一聲雲重くして、風習々と衣を吹きぬ。覺めたる後も呆然と、お琴は夢を判じかねて、たゞ有耶無耶の境に迷ひて、兎角に出づるは涙なり。かゝる處へ椽側の障子を開けて入り來しは、山岡の女房お粂なり。持てる雪洞の火を消して傍に置き、お琴様何う遊ばしましたゝ、また父御の事を御案じなされてか、泣いて居る塲合では御座いませぬぞ、大石様の方にては、諸事萬端準備も出來、今かゝと討入の日をのみ待つて居給ふのに、未だ書きかけた繪圖

面も出來上らず、思はしい音信もせねば、何のやうに待ち詫びておいで遊ばすやら、あア心配ぢや心許なや、それではお琴様、今宵は妾も手傳ふ程に、何日ぞやの屋敷の繪圖を、書き上げて仕舞はうでは御座りませぬか、遲れて敵に知られては一大事ぢやと、氣強く云はれて、お琴も勇み。そんならこれを書きましよと、手文庫の内搔探りて、討入りの夜に用ふべき、吉良の屋敷の繪圖面を、一心籠めて書きはじめぬ。

夜は更けて木立を度る風凄く、水の音さへ微かにて、戸外は闇夜、室内もまた靜まりかへりて人語無く、漏々と響く時辰儀の音のみ、廊下に聞えて物淋し。お琴は一生懸命に墨摺り流して

繪圖を書けば、お粂は眼を四方に配りて、他人や來ると見てあるに、天の加護にや、知る者絶えてあらざるにぞ、二人は大に打喜び、首尾克く繪圖を書き了り、翌日密に矢間方に送り屆けて、復讐の日をのみ、今日か明日かと待居たり。

（八）

時機は再び獲べからず、傳へ聞く吉良上野介は去年來の警備に倦みて、今は殆んど我に敵あるを思はず、色に耽り酒に浮かれて、露ほども武邊に心を置かぬのみか、四季折々の物見遊山に、分外の華美を盡くして、小袖幕の内には美人の粹を萃め、驪山宮の俤を移して、肉羹の山に白魚の波を湛へ、宛らの酒池肉

林を見るやうなれば、亡國の兆は眼前に迫りたり。此時に討たずして、また何の時にか討つべきやと、堀部彌兵衛を始めとして、一味の面々心を協せ、聲を揃へて申しければ、大石内藏助も今は默止難しとて、窃に城州山科の家を遁れつ、暫時踪跡を晦して、人知れず江戸に下り、討入の夜の方畧などに思慮を凝らして居たりけり。

十二月十四日は朝來の凍雲空に凝りて、一天布めて覆ふが如し。高輪泉岳寺は丘に據りて建てたる精舍にして、門前には渺茫たる滄瀛を湛へ、漁舟波に隱れて白鷗汀に飛ぶの景色を貪り、境内には老杉古松森々として、風常に颯々たり。春は御殿山の夕

暮に、花を散らす鐘を撞きて、遊人に名殘の句を吐かせ、秋は袖ケ浦の月に、看經の聲を送りて、見る人の胸を爽かにすれど、冬枯れの朝、野分の夕、驛鈴の音遠く微に聞えて、物淋しさもまた一入なり。

赤穗の城主淺野内匠頭の墓前は、流石に荒れしといふにはあらねど、一家中離散の後は、構へて手入を怠り勝になしければ、荆草間々塚の邊に茂りて、霜夜の月を弄び、杉の木立の陰々として、晝と雖どもなほ暗かり。況てや此頃の寒空に霜重くして、墓石も凍り崩れなんとする中とて、香花絶えて人の訪ふ者なく、卵塔の傍には、霜柱の踏めば氷を碎く音あり。

斯かる處へ何人とも知れぬ旅打扮の男三人、彼方此方の石塔の間を拔けて來りつ、齊しく内匠頭の墓の邊に立止まり、後を顧み前程を眺め、見る人無きやを確めたる上、三人顔を見合せて、莞爾と笑みを傾けたり、中なる老人聲を潜め。大石殿矢間殿見る人が無くて仕合であつた、各々少しも早く亡君の御墓前に御回向申さうでは御座らぬか、我々本國を立離れてよりは、態と參詣の足を遠ざけ、御墓前を荒れに荒らしたる今迄の不忠は、今日ぞお詫びを致しませう、あア〳〵老の身の、亡君の御墓を見るにつけても、先立ものは涙ばかり、愚痴と笑ふて下さるなと、合羽の袖に眼を拭ひ、愁然として差扣ふれば、内藏助もう

ち凋れ。まこと原殿の云はるゝ通り、四十七士の同志ありとはいふものゝ、敵に内意を悟られては一大事と思ふがゆゑに、心ならず御墓參も致さず、荒れたる狀を見るにつけ、亡君が御無念の程思ひ遣らるゝ、えッ、已れ憎くき吉良上野、多年の遺恨今宵ぞ思ひ知らして遣らむ、地下に在ます先君にも吉良の屋敷に照臨まし〳〵孰れもが手練の程、枉げて御覽じたび給へ、今日の今まで家中の諸士が腑甲斐無さを見給ひては、嘸ぞ切齒くや思しけん、復讎延引いたしたる不忠の罪は、明朝一同御墓參の上幾重にも御詫び仕るべしと、涙を流し聲を上げ、拳を握りて振ひ泣く、十次郎も涙ながらに、閼伽桶の水を墓前に供へ、

合掌禮拜したりけり。

時刻を遷して人目に立たば一大事と、宗右衛門が云ふをそれぞと、各々別れ〳〵となり、家に歸りて日の嘿るゝをぞ待詫びぬ。

冬の日の暮れやすく、はや黄昏となりけるに、朝より催したる凍雲、漸う暖氣を含みて、誰彼れ別かぬ頃より、一天霏々たる雪とはなれり、大石内藏助は討入の準備全く整ひたれば、今や矢間十次郎が來たるかと、隱れ家の庭前を眺めやりて、松が枝の白うなるを、心地快氣に賞めぬ。

内藏助は色青白き方にて、脊丈は中人よりは小し、柔和温順にして常に言語少く、莞爾と愛嬌多き人なるに、今宵は復讐の夜

の事とて、滿身の勇氣、滿面の喜色、溢るゝばかりなりければ、威風凛然と四邊を拂へり。

降る雪を合羽に凌ぎて、息急き駈け來るは矢間十次郎なり。冠れる笠を門口に捨て、出口の椽に腰うち掛くれば、内藏助は辭をかけ。屋敷の樣子は如何なりやと問ふ。首尾は上首尾、今宵は雪見の宴ありとて、來客も數多あれば、出入の人に立交りて、屋敷に忍び入るべしとの愚妻が知らせ、天の與へ賜ふの時機、はや〳〵屋敷に忍び込まんと、勇んで云ふを内藏助は制し止め。否々、急ては事を仕損ずる、計畧は密なるをよしと聞く、さらば此趣を原宗右衛門殿へ知らせ遣らんと、立上る袖を抑へ、

その御手配は御無用なり、拙者此方へ來る途にて、宗右衛門殿に逢ひたれば、始終の樣子を打合せ、折好き塲合に合圖をなさんと約したり、御案じあるな、サア〳〵早く屋敷に忍び入らんものと、鵞毛に似たる雪搔き分け、鶴氅とも見る合羽の袖を掃ひもせず、吉良の屋敷へ急ぎ行きぬ。

（九）

武士も町人も太平の御代に馴れて、泥醉漢さへ滅多には鞘を外さぬ靜けさより、自から治に居て亂をうち忘れ、お侍が咽喉の美いのを自慢に、隆達節唄ふ元祿の末年は、馬も肥えて、脾肉のみ日毎に太る折からに、古今未曾有の一椿事こそ湧き出でた

れ。

元祿十五年十二月十四日は風神の怒號烈しくて、朝より飛雪紛〻と舞ひ下り、飛んで花の如く庭を粧ひ、積りては萬瓦を裹んで、苔は布を敷けるが如し。

復讐の日を今か〳〵と待詫びたる四十七士、今日こそ多年の本望を成就して、疇昔までは無爲に暮らす腰拔け武士と、嘲けりし者の眼を驚かし吳れんずものをと、滿身の勇氣、滿腔の熱血、撲たば迸しるべく思はれたり。

多年の辛苦その甲斐ありて、赤穗の義士は首尾克主君の仇を討ちぬ、その討入の夜の摸樣は如何なりしやと、當時の人の種々

に噂取沙汰しけり。

大石良雄は十四日の夕暮より矢間十次郎と共に、吉良家の裏門より忍び入らんものをと、同志の諸士に別れて、降り頻る雪を物ともせず、一目散に駈けつけたれど、未だ屋敷にては、お琴お粂の首尾整はざるにや、門扉堅く鎖して、吹雪に石橋は埋まりあり。

兩人顏を見合せて、邸内の準備は未だ整はぬなと、語らひつゝも往來の人に眼を注ぎて、更に油斷はせざりけり。

大事はこの一時の瀨戸なるぞ、千丈の堤も蟻の穴から洩るゝとか、十次郎殿前後に氣を注けられよと、良雄が云ふに打頷づき。

心得ました、が、邸内の樣子は如何やら、なんと氣の揉めることでは御坐らぬか。そは拙者とても同感なれど。急いては事の仕損じあり、其内にはお琴殿が門の戸開くるは必定なれば、暫時辛抱あれかしと、空をば佶と打見やりぬ。

夜に入りて月のあるべき宵なるを、雪は巴と降り頻りて、小歇みだに無き折からの、人は鶴氅を着て行くもあれど、みな白妙の衣の袖、濡れて鷺にも似たりけり。

待つこと良久しかりしが、門の開くべき氣色も見えぬに、兩人心、心は穩かならず、お琴お粂の身の上に若し變事抔ありはせぬか萬が一怪しと認められしとて、一命を捨てゝ勤むる兩人なれば、

復讐の事は死ぬとも口外いたすまじ、さアらば如何にせし事ぞと、苦慮一方ならざりき。

邸内にはお琴の物思ひ、今宵を瀨戸の大切な御用を、若し失策などあつたなら、妾は何うして好いものかと、末を案じて兎や角と隙のみ覘ふ其間に、日はハヤ暮れて奥の間は、今宵ぞ雪見の御酒宴と、銚子膳椀持ち運ぶ、足に隙無き腰元の身の上。

月無き夜を幸ひと、お琴は裏口から窃と忍び出で、雪を搔き分け踏み敷きて、漸う門へ辿り着き、弗と息して戸を開けば、此方は待ちに待ちたれば。其方やお琴かと矢間の聲、斯くとは知れど不意に驚き。えッ、十次郎樣かと呼び返し、雪明りに眼を

配りて、前後をッッと透し見つ。おう、ホンに逢ひたう御坐んしたと、戀に大事を打忘れて、寄らんとするを良雄は遮り。大事の前の小事を慎め、佇立みて他目につかば事は六ケ敷、いざ門内へと、云ひつゝ闇にも意を配りて、そろ〳〵と奥に踏ん込み、腰元部屋なる椽の下に合羽着た儘忍び入りて、夜の更くるをば待ち居たり。

上野介が居間の方にては、酒宴今を盛りと覺しく、歌吹の音の手にとる如く聞ゆれば、身は椽の下に置きながらも、胸は煮え立つ憤怒の炎。憎つくき上野介が擧動かな、主君長矩公は汝の爲めに非業の御最期遂げ給ひしに、世間の手前も憚からず、歌

舞遊興は何事ぞや、今死ぬる身も知らずして、酒や女色に現無きは、最期を早むる自業ぞと、云ひ合はさねど心は一つ、顔を寄せては共々に、口惜涙に袖を絞ぼりぬ。

神ならぬ身の斯かる事とは知るべきや、上野介は雪見の酒に盛り潰され、座に居るさへも太儀の身をやつと起して椽側傳ひ、女中の肩に抱へられ、ひよろ〳〵と行く千鳥足に、敷きたる毛氈に波をよらして、香燻き籠むる部屋の内に、ごろりとばかり寐轉びては水を持てとぞ叫びけり。

お粂はこれには頓着せず、他人の見ぬ間に握飯を製へて、手早く竹皮包みになし、闇を傳ひて裏口の、部屋の戸口に立寄りて

は、前後を睨みて安堵なし、履脱石に下立て、靜に呼べば微に聲あり、妾はお粂で御坐います、何程かお餓じからう、お腹塞ぎにこれなと喰べて待ち給へ、上野殿は今がお休み、夜更を待つて呼ぶ程に、暫時辛抱遊ばせと云ひて、早くも身を隱しぬ。

良雄は涙を流しつゝ。あァ是非も無き身の上や、我も一國の家老とて、千萬人の上に立つべき身を持ちながら、一つ二つの握飯に、餓をば凌ぐ境界に陷りたるかと、涙に咽ぶも道理なり。

（十）

夜の更くるまゝに雪は小歇みして、朧ながらに十四日の月の、庭前の木立を照り反して、油繪めける隈取の泉水築山の影を黑

むれば、風は篁を吹き騷がして、さら〳〵と池に音するは、積れる白きものゝ、搖はれ飛ぶなり、大石内藏之助と矢間十次郎は宵の中より、吉良家の奥庭に忍び込みて、更くる夜を鐘の音に待詫びつゝ、待てば嬉しきこと、悲しきこと、腹立たしきこと、嘆かはしきこと、口惜しきこと抔、胸に聚り來て、涙の露に袖を濕し、齒を嚙ひ切りて無念がるに、勇氣日頃に百倍して、腕の我から鳴るを覺えず、矢間は殊に血氣の壯漢、奥の間より洩れ聞ゆる上野介が、酒にたわい無き聲を聞きつけては、さても無念、もう忍耐がなりませぬ、奥に駈け込み、敵の細首たゞ一ト討ちにと、鯉口くつろげ椽側へ足踏みかくるを、思慮

深き大石は刀の鐺を緊乎と摑み。逸り給ふな、こゝ一時は生死のかね合、多年の辛苦を水に流すも、マッタ本望成就するも、今眼前に迫りたり、分別はこの大石が胸にあれば、騒いで人目にかゝり給ふな、潜むは伸ぶる裏なるぞ、表に同士はもう集まりたるか、えゝッ冬の夜の長さ、氣を揉ませることであると、制し止められ詮術無く、また静まりて時を移せば、丑満の鐘陰に響きて、其聲雪に凍るにや、天地閲然、草木も眠るかと思はれたり。

あれ聞ゆるは丑満の鐘、時分は好きぞ、十次郎殿用意召されと、雨戸の傍に立寄れば、冴えざるまでの月影も、二人の姿を地に

映しぬ。見る人無きかと四邊を睨めば、笠松の影、枯柳の影、さては燈籠の影までを、敵の忍び寄るにやと、身構へすれど、人の氣色も無きこそ道理、果は兩人から〳〵と笑ひながら、非情の草木にも心を置かる、あァ忍ぶ身の便なさよと、云ひつゝ立てば、雨戸の口より女の顔の月に白くぞ見えたりける。

それとは早くも目を注けながら、此方はなほも油斷せず、敵にやあると月光に透して、女の顔を佶と見れば、山岡が女房お粂なり。やッお粂どの、首尾は如何と詰め寄れば、サァ寢所に案内致ましよと、大石が手を執るに、矢間も後より摺足して、椽側傳ひに寢所に進み、それ此處なりと云ふがまゝ、障子の隙よ

りさし覗く内藏之助、つく〳〵隅々見撿むれど、それぞと思ふ人も居ず、訝かりながら室内に入れば、床は空しき總枕、たゞ燻き籠めたる香の煙の、枕屏風を黑むるのみ。

しなしたり、敵は早くも遁失せしか、えッ殘念と齒切をなし、腕を撫りて口惜がるに、お粂も驚き呆れしが、弗と案じつく隱れの小座敷、アノ邪智深い上野ゆゑ、こゝを寢所と見せかけて、彼方に臥すに極ッたりと、大石の手を執らんとして、提げたる刀の刃を無手と攫めど、慌てし折とて氣もつかず、その儘暗き廊下を行けば、椽側なる鐵行燈は風に消えて、烏羽玉の闇に歩みを運ばすに、地獄の路を辿るが如く、冥々としてまた冥々た

り、廊下を出れば中庭あり、閉め殘したる雨戸の隙より、向ふの小座敷を眺むれば、伊達に造れる圓窓から、行燈の火影洩れ射して、袖垣の雪を照らしぬ。彼方にこそと勇み立ち、障子の外に立寄りて、聽耳立つれば鼾の聲あり、天の與へと喜びながらも、なほよく室内を覗き込めば、枕元の燈火は寢顏を照して、眼鼻立の具合なんど、手にとり見るより確なるにぞ、内藏之助はうち喜び、それと下知すれば、障子を蹴はなし駈け入る矢間、其身も直と進み寄る物音に、忽然と眼を覺したる上野は、枕刀を手早く拔くを、鐵扇もて丁と落して。如何上野介、我等を何と心得るぞ、陰暗き事は汝が肚に覺えあらん、去ぬる頃、汝

が爲に怨恨を呑んで、御最期ありし淺野内匠頭が家臣四十餘人、今日たゞ今主君の讐を報ゆるぞ、觀念せよと呼ばゝりつ、立たんとする上野の腰の番ひを、力足もて蹴つくれば、よろめきながら倒るゝ間に、十次郎は椽側に立出でゝ、呼子の笛を吹き鳴らすに合圖の吶喊を哄と揚げ、門内俄に彝き合へり。この物音に南北兩隣の屋敷よりは、何事の起りしかと、屋の棟に斥候を上げ、定紋打たる高張提灯を、星の如くに點し列ねつ、斥候はやがて聲をかけ。深夜に他家を騷がすは、狼籍者か、强盗か、たゞしは意趣あつての業か、隣家の交誼、時宜によつては御助太刀の一手仕らんと、呼ばゝりたり、大高源吾は聲張上げ。

否左樣なる者にてはこれなく、我等ことは播州赤穗の城主淺野内匠頭の家來、故あつて今宵主君の仇を報ずるもの、目ざす敵は上野殿一人なり、もとよりして、狼籍いたす所存も無く、火の元堅く取締り申せば、出火の憂ひもこれあるまじ、御助太刀は御無用なり、それとも强て一矢を賜はらんとならば、武門の習ひ小勢なりとも、御相手仕らんと勇ましくぞ答ふれば、斥候の武士は靜まりかへりぬ。

朧ながらも月明りに、吉良の屋敷を打見やれば、右往左往の人の足は、宛ら立田川の秋にも似たり。

（十一）

浮世の夢の曉近く、入り亂れたる赤穗の義士に、長夜の眠を覺されて、寢耳に水の大叫喚は、實に三界は火宅の諺を現じて、綾羅の蓐に蝶と化したる女の童、腰元、仲間、草履取の小者に至るまで、泣き叫び遁げ迷ふ有樣は、殿司の筆に殘る地獄變相の繪に寸分も違はざりき。

されども義士の面々は遁げ迷ふ賤しきものには眼もかけず、目ざす敵は上野介一人なるぞ、物の數にも足らぬ下司下郎を失ひて、後々の物笑ひとなるな、別けて女性は緣無き者なれば、勦りて遁がせよと、表門を堅守たる原宗右衛門、老いたれども勇氣凛然と、長身の鎗を杖になして、雪に足塲を踏みゞめつゝ、

拮と睨んで呼ばゝりぬ。其聲朗にして凍るが如くなれば、了得に騷ぎ立ちたる屋敷も見る間に靜まりかへりたり。

朧ながらも十四日の月、雪氣を含む大空一抔に凝りて、影は玄關の廂を照せば、亂れ入る味方の火事羽織のみ、微にそれと見え判きて、松明高張のきら〳〵と入口の板戸に映るは、星飛んで庭の松に宿るかと思はれぬ。

折しも納戸の口より長刀を閃かしつゝ、現はれ出でたる腰元二人、緋縮緬の襷、白絹の額卷を夜更の風に靡かして、群れ居る義士の眞ッ只中へ割つて入りぬ。一同この有樣を勇ましげに見遣れは一人は花も羞かしかるべき美人、後に立てるは冬の松の

色無けれど、威風犯すべからざる女丈夫なりき。大高源吾は持てる松明を高く振翳し。さても勇ましき御婦人かな、兩刀佩む武士さへ、後背を見せて遁げ失する中に、吉良殿とは如何なる所縁のお兩方か、後殿して我等に手向ひ給ふこと、天晴の御心根、大高源吾ほと〳〵感服いたしたり、苦しからずば御名を名乗らせ給へと呼べば、不思議や女性は聲うるませて。大高殿よう問ふて給はりし、妾等ことは斯世に家無き果敢無い身の上、父や夫は赤穂方の御味方ながら、娘や妻は其方様へ手向ひせねばならぬ義理、何をお隱し申ませう、それなるは原宗右衛門殿のお娘御、これは山岡覺兵衛が後家のお粂、吉良家の内情探らんため、假りに奉公するとは云へ、一日仕ふるも君は君、今主君吉良殿が討たれ給ひしを、餘所に看て遁げらるべきか、斯くなる上は所詮赤穂へも歸れぬ成行、娑婆に家無く親なくば、潔く死んで忠義を徹底きませう、サア斬り給へ、いざ〳〵お手向ひ仕つらむと、持てる長刀振廻して、寄らば切らんと身構へたり。

後邊に凛たる聲あつて。今の一言殊勝なり、それ矢間どの生擒られよと、粋なる下知に重次郎は、進みかねてや二の足踏むを、心弱しと大石はなほ聲高く。矢間どの怯れしか、えッ優しやと呼んだりけり。並み居る面々、眼を注ぎて女性を見れば、實に

これ梅か、梨の花、艶なる色の紅白は、源平いづれ旗色好きか、風情はなほも一入の、露の涙に打凋れぬ。

二人は慇懃に手を支きて大石に一禮し。妾々斯く一同に取圍まれては、所詮遁げ延びんことも叶ひ難し、存分に御成敗給はれかしと述ぶれば、内藏之助は頭をうち掉り。いや、いや、其方がやうな忠義な者を、赤穗の武士は手に懸けぬぞ、生きて忠孝全うするは、おう〳〵それよ、兩人とも尼にして遣はすぞ、此處を立て、時刻移らば故障や起らん、各々吉良上野介が首級を揚げたるぞ、積年の鬱憤今ぞ晴れつらむ、これ見られよ、この口にて主君内匠頭様を嘲りしか、この眼もて能くも我君を蔑視

たるよなと、遺恨の數々並べ立て、一同歡喜の聲を震はし、嬉し泣きにぞ泣きにける。

はや夜は明けたり。アレ〳〵東方は白んで、鷄も啼き出でたるぞ、この間に一同引揚げよと、大石が下知に喜び勇んで、吉良家の門を立出れば、朝風亂れたる鬢の毛を吹きて、その寒さ肌を劈くが如し。

されども聞き傳へ云ひ傳へて。それ前代未聞の目覺しき復讐なるぞ、今の時に見後れなば、悔ゆとも詮なかるべしと、人の山、足元の波、一條の往來を差挾んで、中央を悠々と通り過ぐる四十七士の裝束、いづれも水火の難を辭せぬ火事羽織着て、積れ

る雪を黒めつゝ行く態の男らしき、鎗の穂先の立並ぶは、佃島の朝景色かとも思はれて、帆柱の林を兩國橋の上に見けり。

頓て泉岳寺も近うなりぬ。高輪の海晴れて、青波熨すが如く平かに、さし昇る旭日瞳々として水を彩り、鵠の飛び立つは引揚げを喜ぶか、滿城の人は恰も狂するが如くなりき。

高輪の出口に今朝咲きし二枝の花は、これお粂お琴が義士の泉岳寺へ引揚ぐるを、遠く打睨め居るなりけり。堅やの字の帶、御殿風の髪風俗、誰が目にもお屋敷の庭に芽生えの名木と、銘をも打つべき身にて、仲間もつれず小者も無く、伸び上り伸び上りて、嬉しげに物見する樣の怪しきを、通りがゝりの人々足

を留めて睨みぬ。

（十二）

あるに甲斐無き身と思ひながらも、浮世にあれば憂き事に責められて、涙に袖を干しあへぬ人ぞ悲しき、別けて女性の身は、粉膩のたしなみありて、紅よ白粉よと裝婆を飾り、世間を躰よく包み、枯木に色香を添へつゝも、稻舟の招く方に漕ぐことの口惜しさ。

原宗右衛門の娘お琴は、親に離れ夫に別れて、今は從ふべき人も無く、盛りの花を殘無や、頭ごぼと剃りこぼちて、墨染の衣に昨日の色香を包むめり。

お糸は固より埋木の、其儘朽ち果つべき身を、亡くなりし夫に操立てゝ、吉良家へ奉公に住み込み、首尾克義士に本懷を遂げさせて、それよりは浮世に用なしと諦め、これも優しき尼となり、圓頂白衣の垢無き境界を樂しみて、念佛修行に餘念無し。

一所不住の僧ならば兎も角、形ばかりとは云へ、乾坤の間に結べる草の庵ありては、夜半の嵐に袖濡らすこともあらで、唯一念に佛を信じ、花を供して、過ぎ行く月日を送りつゝも、なほ待たるゝは義士の消息なり。

世に恐ろしき大罪を犯せる夫すらも、家に待ち居る妻の心になりては、一日も早く牢屋を出でよかしと、待詫びける甲斐も無く、出家の今もなほ戀ひしき矢間は、父宗右衛門と諸共に、泉岳寺に於て四十七士殘らずの切腹、モ一度逢うてと思ひし綱も斷れ、お琴は漕ぎ行く船に離れて、沙上に足摺する程の悲しさ、其日初めて罪も無い神や佛を恨んで、聞えませぬと泣く心の不愍さよ。

斯くなりては愈々味氣無き浮世を觀じて、俗を慕ふ念は露しも無く、頭を圓め、白衣を着け、腰法衣を纏ふては、見榮も飾りも無くなりて、年數も積れ、皺の波も寄れ、化粧て見すべき男も無しと、たゞ後生の事を樂みけり。

閼伽桶の清き水を汲みては、眞如實相の月影も宿れかしと願ひ、

花を佛壇に手向けては、天より種々の花も降れよと望み、偏に我が住む庵を常寂の光土に見て、浮世の風は一切飛んで來なし、墨田の土手の塵一本、この竹樣には入れまじきぞと、精進退轉なし。春は鄙ながらも田を温める風の、花を吹いて香を窓に送り、夏木立の清涼、水も氷にやならむ、秋は虫の音に哀れを覺えて、昔時の夢に涙を浮べ、寒月枯木に冴ゆる夜は、思はず書寫の筆を捨てゝ、清光卒塔婆を照らすを拜む。あァ難有き世や樂しき娑婆や、俗にありて他人をも神をも怨みたりし煩惱は、實に意馬心猿のうたてき心にてありしと、今は珠數もて肩を拂ふことと屢々なり。

茲に埋もれて幾歳か過ぎけん。訪ふ人も無き柴の戸、水鷄にのみ欺かれしこの庵に、尋ね來給ひて、妾等が素性を問はせ給ふ御身は、如何なる因緣のある人やら、前生は必ずしも一河の流れを汲みける中にやありなん、興も無き長談義は比丘尼が馴れたる口の端とのみ思ひ給ふな、されば御身がいたく怪しみおはする掌裏の刀瘡も、今の話にて大方は察し給ひけん、固よりして浮いて尼となりし身ならば、經も讀まず、佛も念ぜず、氣儘氣隨に奉加しても世を渡るべきに、嬉しき世の中とて志ある人は我と足を運びつゝ、喜捨し給ふこと、これ皆大石殿が餘德、人間としてありたきは誠なり。アレあれを見給へ、梅は盛りに

咲きたり、咲くまでの辛苦を如何に思ひ給ふぞ、邪魔する雪に枝を折られ、雨風に吹き曝されて、世間を狭め、人に疎まれ、結句花と咲いたる今日の誉は、これに優る草木ありとも聞かず。武士の心懸けはこれ、婦女の手本はこれ、美くしい梅の花では御座りませぬかと、お衆比丘尼は聲麗はしく物語りぬ。男は始終を聞き畢り、膝を叩いて感心し。あァ左様な御身分の方々なるか、さりとは知らで先刻よりの無禮、平に御免下さるべし、我もお目付の役を勤めながら、斯かる名高きお両方を今日の今まで存ぜざりしは迂濶千萬、笑ふてばし下さるな、してまた御菩提所へは折節御墓參なされますかと問へば、比丘尼は爪繰る

念珠を止め。はい、殿様の御命日をはじめ、御家來衆の命日には何日も妾が參ります、これ御覽下さいませ、殿様はじめ御家中衆の御位牌を斯く吊うて置きますと、紙門を開けて佛壇を見すれば、まこと香花は新らしく、常燈微に煤びたる過去帳を照しぬ。

男は四邊を眺め居けるが、弗と片脇に立て懸けある短刀に目をつけ。これ、これは、何で御座る出家の御身に不似合なと、咎むる如く尋ぬれば、比丘尼は側のお琴を指し。それその尼に問ふて見給へ、妾は確とは知らざれど矢間殿が遺物とやら、世を捨てし身とは云ふものゝ、夫を戀はざる妻やあらむ、深く問ふ

て罪を作らせ給ふなと、云ひつゝ稱名申しけり。

いざお暇と立出る男、送り出す二人の比丘尼を後に見て、香に迷ふて行く田の畔に、人知らぬこぼれ梅二輪、これも渠の身に似たる花と、神妙に拾ふて懷紙に納め、家に歸りて世の人に吹聽しけるに、人は一代にして名は末世に高く。伽羅は香あるが爲めに挫けても、消えぬ薫りの今に殘りぬ。（廿五年作）

磯部驛吊二大野九郎兵工墓一

世上毀譽如レ葉輕。　多君遠慮捨二前盟一。
吾將二一掬同情淚一。　欲レ洗千秋不義名。

京屋娘

（上）

根が浮氣をふら〳〵と暮らす藝者新道。見榮と愛想の二軒目の、花屋といふを右に折れて、三尺にも足らぬ露路あり。露路といふはたゞ文字の上の名ばかりにて、兩側の檐と檐重なり合ひ、露さへ溝板を濡らせし事なく、朝な〳〵の日晷も、わづか障子の二ッ――三ッ目まで射すばかり、それからは終日拜んだことなければ、結句朝寐には持つて來いといふ處なり。氣根よく觸

れ歩く豆腐屋も、此處を氣樂横丁と名づけて、朝の一度は足早に通り過ぐとかや。されば雨の日の鬱陶しさ、もしも槇木焚く家のあらば、お化粧氣にするお嬢樣などの、なか〳〵住まはるべきところならねど、たゞ難有は葭町の庇陰たけありて、屑拾ふ人も住まず、襤褸買ふ商人も居らねば、本所の露路と比べにはならず。これが芝新網邊にあッたなら、通る人鼻を摘んで去るべきに。まとや隣りから隣りまで格子戸造り、一寸見て意氣なと振り返る若旦那もありき。總じて露路の窮屈なるは、此處のみに限らねど、盆栽一ッ据ゑる庭もなければ、水道の水半町先の大屋さんにあるばかり。まことに陰氣——不自由と、他人

の陰氣を頭痛に病む譯ならねど、ともすれば頭痛も病みさうなは露路住居なり。岡目の陰氣と裏表なるは、この露路の三軒目の家なれ。内には歌三味線の音絶間無く。格子戸の陰の下駄箱には、墨塗の小供下駄五足十足列を揃へて、人足の繁き割には板の間は存外に汚れず。上り口の障子は玻璃の中透にて、障子越に姿を現はせし四五人の娘。お師匠さん左樣ならの聲聞くと間もなく、身はハヤ格子戸の外に見えて、しかも口姦ましく「由ちやん、履物が違がやァしないかへ」「オヤ妾のが違てるわ」「いやな人だよ、妾のをつッかけてサ」「光ちやん御免よ、アラ待ッてゐらッしやいナ、ようムいますよ」と口五月蠅き十三

四の小娘。いま清元のお温習了りて、家路に戻る勇しさ。孰れ心は籠の鳥の雲井に啼く、思ひ嬉しきものなり「花ちやん、今日の御仕舞は例日より餘ッ程早いのね」「さうよ妾その譯知ッてるわ」「アラ花ちやんは可笑よ、譯ッてどんなの」「無ッてよ、光ちやん貴女知らないの」「知りませんよ、ほんとうに」「アラ虚。そら、そら、まだ判らないの、あの長火鉢の傍に……」「梅次郎さんが何したッていふの」「梅ちやんも今はあんな厭な藝人のやうだけれど、あれでもお師匠さんのアレで有たッて」「アレッて何んですよ」「ホ、、お弟子であッたんですとサ」「お弟子だからッて、何も可笑いことはないぢやない

か」「イ、エ」「ぢやア何」「それでもお師匠さんたア、をかしいッてサホ、、」さすがは藝妓新道の隣りに住居て、味な事見聞き覺えあると見え、年に似合はぬ口の利き振り。さりとては早くはじけ豆、實に油斷のならぬ世の中と、摩れ違ふた老人は念佛唱へて通りしとか。されどつら〳〵この娘共の年を見るに、未だ男のよしあし品さだめ、しらふでする柄にもあらず。察するに無心が大膽な事を云はするにてはあらぬか、六ッ七ッの腕白小僧、よく飯事の遊びして、隣りの花坊と嫁入の眞似。添ひ寐して耻かしとも思はぬは、みな無心のさすることにて、腹に汚點無き乙女氣も、また男女の影曇して、苦にせぬ類ひ

なるかそも。一人が話せば一人が答へ、面相頽して笑ふ中にも、氣取ッて歩く可笑さは、何處やらに踊りの手振を覺えて、乙に天神髷の天窓をふり、緋鹿子の帶太鼓に結びて、未だ肩上の殘るも愛らし。見る間に姿はチラ〳〵と、彼方に見えずなりにけり。清元の師匠と云ふは、もとは柳橋の流れに垢ぬけせしかど、ふける年には白粉の功能も無く。若い頃は一寸の流行ッ子と、持て囃されし昔時の夢も、今となりては駿馬の骨。誰に身を任さうともなく、この露路に引ッ込みて、踊り清元の師匠に送くる月日は早く。はや一年も過し頃には、近處隣りの娘ッ子、我れも〳〵と見習ひ、お師匠樣〳〵と賴みに來る者多く、今は活

計も結句氣樂になりて、藝妓の時の氣兼せしを、阿房らしいと笑ふ時もあり。されば身の樂になるに隨ひ、心もやう〳〵蕩樂に傾きて、此頃何やら形に添ふ影法師、時々雨夜の障子に映るとか、誓古に來る娘どもの噂とり〴〵。お師匠さんと云はるゝは、藝名延定本名は菱屋お定とて、今年三十一二、未だ何處となく匂やかな姥櫻。齒をも染めぬば眺め一層なり。されば娘ッ子とゝもに踊り、清元を敎へる外は、これと云ッて外に格別の用事もなければ、向ふの海水浴では長湯との噂とる位。お化粧の隙つぶしを、退屈凌ぎと思ふ氣樂。あるは長火鉢の傍に坐を占め、お三の雜巾掛するを横目で睨む位の用向、まづ隙のある

身躰なり。怪しいは雨夜の影法師、此奴未だ年若な癖に藝人風のなまめかしさ。まづ教育のない婦人には、好かれさうなめかす方、晝は清元の群れに交りて齊しく習へば、まづお弟子と云ふても宜い男。それが何うして雨夜の影法師、さても怪しや、此家怪物屋敷でもあるまい。お定は長火鉢の横坐に坐を構へて朱羅宇の長煙管を薫らせば廿二三の若者、その向ふ側に膝を頽して坐り居るのが、影法師の梅次郎といふ男なり。笑ひながら話しかけ居る側に、痩躰のさも柔和な美形一人。これは堀留の呉服屋、京屋の一人娘。年は十七、人並秀れて縹致も姿もの。たる方、此頃此處へ清元の稽古に通ふなり。今日は店の都合の

悪るいにや、例もの丁稚長松、時間を過ぎても迎ひに來ず、何うした事ぢやと待てば梅次郎に話しかけられて、乙女氣のモヂ〳〵しながら、問はるゝに答へ、語るを聞けば、なか〳〵その談話の耳ざはり好き。見れば身裝も目に慣れし番頭の質素な樣子と違ひ。意意な素振に戰として、問はるゝ事も身に染み亘るやうに覺え、初戀のこはゝ〳〵しさ。何んと云つて好いものやら、どぎまぎするをお師匠さんも悟られてか、いろ〳〵な事梅次郎の肩を持たるゝに、何んとして此場を拔けやう。こんなに恥かしい目をするのなら、いッそ早く迎ひが來れば宜いと、待つに其の人は來ず。話はいやましに進み行き、師匠のお定憚りへ立

つ間の極りわるさ、我身で我身を持て餘す位なり「お香さんモウ淺妻をお上げなすッたの」「ハ……ハイ」「夫は何うも御勉強でゐらッさやいますこと」「イヽエ一向なんで御坐います」「チト敎へて戴きたう存じます」「アラあんな……、おなぶり遊ばして……」思はず顏を紅らめ下を向いて、羽織の紐を捻ねる床かしさ「イヽエ串戲ぢやァありませんよ、ほんとうですよ、あなた」「妾知りませんよ」これはしたり「ぢやァ淺妻の身振を何う遊ばして、右の手をかう上げて。これで斯う履むので御坐いませう。どれあなたのお手を」と云ふや否。お香の手を確と握り、斯う斯うと師匠ぶらるゝ氣味惡るさ、お香は俄かに顏熱

くなりて、目はチラ〳〵し、その極り惡るさ。今が今迄こんな耻かしい目は見たことなきものを憎らしい男の心。折りから師匠のお定、手拭で兩手を拭ぐひながら、奥より來るにお香は穴へも入りたき心地。「お師匠さま、淺妻のお稽古を……」師匠のお定、お香をじッと一目見て、「梅さんに敎はつてゐらしつたのホヽヽ」「あらいやな、お笑ひ遊ばして」お香は最早坐にも耐かね、モヂ〳〵する中。丁稚の長松、お迎ひに參上つかまつりぬ。「何くら待ッたか知れないよ」罪もない長松に當り惡るく、遁ぐる樣に暇乞して、門を出て見てホット溜め息。思はず振り返ッて「長松やお前早かッたね」

（中）

四里四方を二つに割ッて、東へも二里西へも二里。東海道の廻り雙六、此處からふッて京都で上る。さてさて長い通り、あめが下の眞中は東京の日本橋なるべし。其處の堀留と云へば、河には舟楫の便ありて、向ふの藥屋――唐物屋の荷倉へ、船頭が捻ぢり額卷勇ましく、荷を擔ふて這入れば、煩はしき大八の力假るにも及ばず。夜は出船の欵乃に明けて、旭きら〳〵ど水を彩り。晝は入船の炊ぐ烟に暮れて。火の番の拍子木幽に響く。商家は孰れも豪の者のみ集まりて、黑塗りの土藏棟いかめしく。中にも檐下の天水桶に金目見えて、紺地に白貫きの長暖簾、筆

太に京屋の二字古風に染め出せし家は、此邊でのえらい者と見え、手代丁稚も數多く。帳場格子の陰に光るは、眞鍮の火鉢ならで、支配人の善兵衞天窓を蠅がすべるも知らで、算盤に目はパチ〳〵、はじくなりけり「半どん、若旦那の仙臺へお立ちになるのは、明日の一番だらうね」物價表を拾ひ讀みして居たるは手代半六。善兵衞に問はれて、火鉢の陰から天窓を擡げ「へイさうでせう」「さうでせうでは判からない、奥で確と聞てお出でな」「へイ」半六を濱々立たせて、次には丁稚長松を叱りつけ、「コラ〳〵行儀が悪るい、なんだその懷手は」「へイ」「あゝと貞どん、お華主の御土産に印附の手拭三反ばかり包んでお

くれ。そして熨斗紙ぢやァ品が悪るいから、水引をかけてな、いゝか」「ヘイ」折から半六奥より來り「只今奥でおッしやいましたが、若旦那のお立ちは明朝の一番滊車だそうです」「ナニ一番滊車？、それぢやアモウ荷造にかゝらなくちやァならない、奥へ行ッてモ一度聞いてお出で、荷の中へ入れる物がありませんかッて、あゝ好い私が行かう、誰れをお供に連ていらッしやるか判らないから」。善兵衛の奥に入りたる後は主無き天下、思ひ〳〵に申戯交りの高嘶し。半次といふとぼけもの、莞爾〳〵と笑ひ出して。「貞どん〳〵、粂子さんが來て居る子」。「粂子さん？、あァお粂さんか、なんだ粂子さんッて、乙に學者

ぶッて」。「學者ぶるんぢやァない、向ふを學者に見てやるんだ」「なにも子の字が付いたッて、學者に聞える譯がないやな」「だッてもそれ、何々令嬢ッて云はれるお方は、みんな子の字が付くぢやァないか、畠野芋子、そら〳〵、子の字の付のは女學者の符帳だ。宅のお香さんなんざァ令嬢ッて云ふのよりは、寧ろお嬢樣の方が適當だ、アンな踊りや清元が上手だッて、令嬢ッていふ柄ぢやないやね。お粂さんなんざァ大層學者だッて、だから何子樣ッていふのは適當なんだ」「ヒヤ〳〵」「オヤ洋語なんぞ遣ッて、ヘン」「だッて學者の談話にやァ、學者らしい返答もしなくッちやァならないサ」「アハ、、洒落てやがらァ、リ

ーダーの一冊目も讀めない癖に」「リーダーを知らなくッても、レデー位は知ッてるよ」「ヤ、誰から聞いた」「聞いたゝア恐れ入ッた、僕だッて竈はストーブ、豆腐は田樂位は……」「へン、そんな事は獨案内にもありません、お氣の毒さま」「半ど ん失敬ぢやァないか、そんな事知らなくッて」「オイ〳〵、何を饒舌ッてるんだ、品物を出しッ放しにして」思ひがけぬ後ろより善兵衞が九天の霞をもれし鶴の一聲。一同。「ヘイ」聞けば此家奥羽中國に手廣く商ひて先代より堅氣との評判高く。江湖の信用いと愛でたくて、日に增し殖える華主の數。餘れば溢れて、主人の金兵衞ふとした病氣に死歿り、近頃漸やう忌も明け

たばかりの跡は、後家のお濱、未だ悟るといふ年にもあらねど、一人娘の成長を樂しみに、道心堅固に守りて、身裝はかへッて質素に拵へ、姿は年波の寄るに任せ、お化粧で隱す下心もなく、佛壇の花挿下女の手を待たず、食前のお勤め能く佛に仕ふ。獨り身になりてよりは、一層に店の締りに心をつけ、召仕ひを勦りて、仕入に氣を入れ、注意到らぬ隈もなければ、支配人の善兵衞も老實〳〵しく立ち働き、飾りはなけれど翼となり鰭となり。大旦那よりの家名は落すまじと、大風呂敷を脊負ッて立つ强の者、老人も居らねば家の締りはつかぬものなり。主人金兵衞の在世の頃より、娘お香に定め置ける夫あり。名を石井慶三

郎といひて、今年廿二の若盛り。一寸あの妓に好かれそうな男振り、なれど締りのない巾着旦那の類ひにあらず。廿一の秋商業學校を卒業して、或る商會の顧問役に撰ばれ。眼は實際の懸引に慣れ、廢物利用の謀方寸に秘め置く事なれば、他人の名跡を繼ぐ養子如きは好ねども、京屋とは緣家の間柄にもあり、娘は縹致好く素直の性質なれば、せめてもの賴みに親の慂慫に從ひしなり。されば金兵衛の病中より、引き續いて京屋にのみ寢泊りすれど、未だ婚禮の式も擧げねば、妹と云ひ兄と呼ばれて寢るさへ部屋の別れ〳〵。母御の心怨めしけれど、母には母の苦勞ありて、未だ肩あげも愛らしき、お香が身躰にさはりはせぬかと、慈くしむ親の心には、何歳になりても小供の樣に取扱ふは、これも眞の一つなるべし。

娘の我儘は母御の甘口より起るものにて、京屋の後家は旦那に死なれてより以來は、娘ばかりを一層に可愛がりて、それお香が何うするの、彼うするのとお手玉取て勤れば、芝居も好きになり、寄席も好きになり、好む衣裳に金銀を厭はず。花見遊山には女中の四五人も連れ、日毎〳〵の贅澤三昧、慶三郎は氣に食ねど、未だ同衾せし中にもあらねば、染々と意見も云はず、云へば何時も母御の氣色を損ずるばかりに、眉を顰めて一家に住めば、何時になく親子の間に針の棚を立てける。

お嫁さんになると三味線も習へぬ、清元も習へないと、お香のねだりに母親は延定に通はして、好き次第の藝を仕つくれば、娘心の變りやすき、たとへば春慣れぬ蝴蝶に等しく、櫻の色香に惚々して此花ならばと思ひしも、今日となりては昔の事。海棠の婀娜な姿、これにもまた心うつり、羽かた敷きて恍惚しては、思はぬ露に濡るゝことあり。さればお香も仇めかしき歌の文句に、年並ならぬ戀知り初めて人知れぬ苦勞を我から求め。踊りの身振りに仕打慣れて、通らぬ思ひに強ねて見ては、罪もない乳母に當り惡く。御飯も食べず口も利かず、夜は人より早く寐て、うつら〳〵とツイ明方の夢見惡しきに、降らす涙の玉

あられ。あられもない人に思ひをかけて、我身の上に比べて見れば、恐ろしいやら怖いやら、向ふの人の心も知らず、此方ばかりが苦勞しても、嬉しいものは初戀の頃なり。されどお香が踊り清元の稽古を望みしも、惡氣ありてせしにはあらず。此娘なか〳〵負嫌ひの性質ありて、たとへば交はる朋友の中に、唄三味線の類ひに限らず、諸藝總てのもの、己れより立ち優るものあれば、俄かにそれを乘り越したき心する癖あり。これは我儘氣儘より增長せるものなれども、この性質今一歩正道に進まば、天晴人の下風に立べきものならねど、見識如何にも狹く。交るは己より眼下の者にて、談話とし云へば俳優の噂、遊藝の

品評ごときに止れば、お香の智慧の增すべき道理もなく、上見ぬ里の蝙蝠。よく〳〵世の中に暗いゆゑに、清元の稽古を望みしも、或る宴會の席に呼ばれて、同じ年輩の娘がしてやりし藝に膽を潰し、さて急に稽古を思ひ立しなり。されど師匠の延定夫しやの果。賴まれもせぬ事の師匠ぶりて、未だ色づかぬ初紅葉に、思はぬ霜の媒するとは。賴む娘のお師匠さまがこの通り、さて〳〵世の中は怖いもの。慶三郎は面白からず日を送れども、一旦此家の養子となりては、輕々しく家も出られず。ことに知る人の思はくもあれば。暫らく樣子を伺ひ居るを、支配人の善兵衛三人の中好からぬを、粹樣に悟りて、俄かに若旦那に勸め

ての仙臺行、代替りの花主廻りはほんの名ばかり、實は若旦那に日光松島を見物させ、その留守に三人の中を具合よく和らげやうとの下心。慶三郎が氣に入りの棟梁を供にさせて、いよ〳〵明朝の出立と極りたり。慶三郎が實の妹のお粂と云ふは、今年十七才の美形。其上兄の氣性に似て、學文に勵み宗教を信ずるゆゑに、自然見識も高く、行末は天晴の女學士となるべしと學校での評判。明日は兄の仙臺へ出立するとて、見送りの爲め泊りがけにて京屋に來れど、お香の氣性とは思はしからぬ中ながら、お粂なか〳〵如才なく、心萬事に行き亘り。その上淡泊なる性質なれば、後家のお濱殊の外可愛がりぬ。日もはや暮れた

れば、いろ〳〵と翌日の用意も了り、一家親しき物語初まりたり。一夜明くれば、平日より二時も早く起され。手代丁稚は目を摩りながら、はたき懸るあり箒取るあり。雑巾の見えぬに丁稚臺所にうろつき、御飯の者え立ち遅きに、お三何時になく奥のお眼玉にふれ、その混雑云はん方なし。

縁り無き人の去るさへ、名殘惜しきものなるに、現在夫と定る慶三郎の、今はや奥州へ旅立たうとするに、お香は一間に籠りてお化粧に氣を奪はれ、家内の者へは顔を少しも見せず。それに引きかへお粂は兄の事、何彼にと心を注け世話する氣立の嬉しさ。されど慶三郎は堪へかねて母に向ひ「おッ母さん、お香

は何うしましたの」母は俄かに心付きし樣に、一寸あとを振り向き「オヤほんにお香は何うしましたらう、今朝は少ッとも顔を見せませんよ。お粂さん憚りさま、一寸呼んで來て下さいな。兄さんがモウお立ちなさるからッて、お坊ちやんで困るよ、屹度恥かしがつてゐるに違ない」。お粂はお香の居間に至り、「お香さん兄さんが立つとこですから、一寸見送ッて下さいッて、おッ母さんが左樣おッしやいましたよ」お香は一寸後を振り向き「オヤさう、兄さんは未だお立ちにならないの」。と云つたぎり、お化粧更らに止める氣はなし「妾はね、お師匠さんと梅ちやんに、芝居へ連れてッてもらふ約束しましたから、それで大層忙

はしないの」。お粂はグット癪にさはりしかど、左あらぬ躰「さうで御座いますか、それぢやァお忙しいでせう、折角お化粧遊ばせ」。言葉を殘して立たんとする處へ、椽端を走ッて來し後家お濱「お香や、兄さんがお立ちになるのに何をしてお出でだえ、いやな人だよ、お前耻かしいと思ッてだらうッ」「アラあんなこと、いやな氣の早いのね。お母さん妾が行かなくッたッて、いゝぢやァありませんか」「宜くないから迎ひに來んですよ。よ、一寸でもお出な、ホンたうにお母さんに世話を燒かせる子だよ、オヤこの子は何うしたんだらう、泣いたりなんぞして、妾がチット何かいふと、直ぐ泣く人だもの困るぢやないか。そんな泣き顔なんぞ見せちやァ、かへッて兄さんの氣に障るから、モウ御挨拶をしなくッても宜いよ。ホンたうに云ふとを聞かない子だよ。」これも云ひ棄てゝ、慶三郎の傍に來れば、慶三郎は待ち兼ねし樣子にて、帶の間より時計を出し一寸眺めてオヤと驚く「お香は恥かしいのだから、慶三郎あんな子に構はないで……」。慶三郎俄かに眼色を變へしが、見れば妹お粂の莞爾笑ふ機嫌顏に氣を奪はれて、口まで出でし厭味も呑み込んで勇ましく「それぢやァお母さん行ッて參ります。みんな留守を賴むよ」「道中氣をお付けよ、いゝか棟梁賴みますぞ」「左樣なら御機嫌よろしう」見れば黑塗りの車三輛餘る一輛は善兵衛が停車場まで見

送るなり。茜色の雲追々東より西に流れて、上野の森に鳥の音勇ましく、良らくして風鈴の響チリン〳〵。

（下）

娘氣の染まり易すき、實にしら絲の亂れては、容易く解く由もなく。京屋の娘お香は、慶三郎の旅立ッてより以來は、いや增しに募る戀。されどもまだ初戀のことなれば、梅次郎が顏容の麗しきに惚れ込み、たへて氣立の善惡しを知らねば、末愛でたき戀にはあらず。一たび悟りの道に近づきなば、忽ち醒むることあり。まこと梅次郎の樣子、一寸見て藝人肌の垢拔けせし抔、なか〳〵店のもの丶類にはあらず、衣類も人の目に立つものを

好めば、外歩くにさへ乙に氣取りて色男を鼻にかけ、誰の聲色やら妙な口の利き振り。これで女の子に好かれるとはさて〳〵世の中は樣々なり。今日はお香も慶三郎が生家の振舞に呼ばれ、厭やながらも一座には就けど、一時も早く家に歸りたき心は山〳〵、されど世の義理人情もあれば、厭やな顏も見せられず。御馳走の珍味も殆んど目を瞑ッて、口に入れし位、面白からぬ宴會なり。是までは我が眼下の者より外に交はりし事なきお香。今日此家に呼ばれて見れば、お粂の朋友と見ゆる如何にも立派なる令孃あり。孰れ見識のあるらしく見えて、我れながら少し恥ぢらふ樣子。なれど身裝のよきをせめてもの自慢と、お粂に

導かるゝ儘に別室に通れば、此家は書齋と見えて、左程に廣き座敷ならねど、床の間、違ひ棚の拵へいと古風に見えてゆかし。お糸もお香は兄の細君なれば、眞實姉の如くいと心切に扱け目なく取り扱ひ、更らに間を置かねば、それに幾分か氣を勵まされ、庭先の景色など眺めて、思ひを遣水の此方、樹の間に光る燈籠の、池の水を射りて面白く、一入に眺め居たり。共に一座にあるはお花とて十七八の令嬢。今日はほんの近付の初なれど、これもお糸が學校の朋友と覺しく、語る談話さへ思はず知らず理に落ちて、お香の氣には更らに面白からず「石井さん貴嬢春の舍の妹と脊鏡を御覽遊ばして、可哀さうに學問がないので、

とう〳〵身を投げました子」「さう〳〵、夫になんぢやァ御座いませんか、水澤も教育のない女子を妻にしたので、あんな不幸……、男の薄情ばかりでもありません子、婦人だツてアノ通り顏色で善惡を定めるやうぢや、何うしてもいけません、氣立があはなくッちやァ」眼は木立の間に注げども、耳は敏くも二人の談話に向ひ、芝居遊藝の品定めに聞きあきし耳には、今の談話は聞慣れぬだけ面白く覺へて立耳すれば、これはしたり。お香が身の上を當摩する樣、我身から氣を廻しては、負け惜しみの氣性にたゞ腹立たしく「子ー石井さん、何うもさうの樣で御坐いますね。西洋の小說なんぞ讀みましても、教育のない婦人

は夫婦間の愛情も……」「さう〳〵何うしても劣情に傾く樣で御坐いますワ。學識のない婦人は……」

お粂は持ち前の淡泊な氣性。一氣阿成に云ひしものゝ、氣が付いて傍を見れば、お香が恥らふ樣子の何處となく物憂げに見ゆるに、俄かに話柄を他に轉ぜしかど、お花孃は斯くとも知らで、ます〳〵話しの圖に乘りて、いろ〳〵とお香の氣に障ることのみ語りぬ。お香は負け惜しみの念募りて、口惜しさに堪へねど文學のことなど露知らねば、他より口出す便宜もなく、怨みを呑みつ耳欹つれば、一言〳〵氣に食はぬ事のみ多く、膽攫まるゝ樣に覺へて、坐にも堪へかぬる位なれど、暇もらふて歸る譯にもゆかず。さりとて膝交へて話す事も慵く。家に居ては女中と打ち交りて、世間の噂咄しするは得意なれど、この學識ある姫方と言語交ふべくもなく顏を斜向けて庭先を見やれば、松の葉は針を食む如く、風にすごく柳は我をぢらすかと思はれて怨めし「お香さんチトお話遊ばせ」と云れて辭むに由もなく、座に交はりしが、二人の談話を聞くばかり、さて外に詮なし「お香さん貴孃新富の替り目を御覽遊ばして」「ハイツィこの間行ツて見ました」「左樣で御座いますか、今度の六歌仙は大層好う御座いますツてね」「さうで御座いますよ、貴孃まだ御覽遊ばしませんか」「ハイツィ學校が忙はしいもんですから……」

學問に忙がしき人さへあるに、自分は遊藝に暇なしとも云はれぬ時宜思へば恥かしき身の上なり。お花は俄かに思ひ出せし樣子「お粂さん日曜日に教會へゐらッしやいますか」「參ります貴嬢もゐらッしやいませう」「ハイ御一所に願ひます」お香は我が身に比べては、恥かしきことばかり、この年の若さに神頼む殊勝さ。我れは戀ゆゑ神頼めど、他人は身を修むるに神頼む。さても心のいろ〳〵さよ。お花はさも馴れ〳〵しく「お香さん貴嬢聖書を御覽遊ばして」「イヽエ聖書ッて何んで御坐います」「ホヽ未だ御存じないのですか」お香を見て柔和に笑ひし顔。お香はその恥かしさに、ゾク〳〵と身震する程なり「聖書ていふ

のはアノ新約全書の事で御座います」「オヤ左樣で御坐いますか」「御覽遊ばすのならお貸し申しませう」「何うぞ……」「それぢやアお粂さん貴嬢の餘分がありませんか」「あアありますよ、お香さん差し上げませう」親切に聖書を取り出だして、お香の手に渡すを、開いて見れば、當てにせし挿畫はなけれど、讀めば傍訓ありて解り易すし。お粂は聖書と共に持ち出だす本を、お花の前に置き、貴嬢これを御覽遊ばしましたか」お花は本を手に取り「イヽエ未だ拜見いたしませんよ、貴嬢御覽遊ばしたなら、妾も拜見いたしたう御座います」「御覽遊ばせ」お香は何本かは知らねど手に取りて、見れども横文字の讀むべくもあら

ねば、その中の繪のみ撰りて、眺めて居る傍よりお花は問ふ「お香さんそれは一冊目で御座いますか」問はれても横文字は一字だに知ねば、一さへ二さへ判らぬは悲し「一寸貴孃お貸し遊ばせ」。

此夜は三人心地好く別れしかど、お香は家に歸りても口惜しさ云はん方なく。さりとて女中に語りて鬱を遣るべき由もなければ、たゞ一間に籠りて聖書を繙き、拾ひ讀にすれば、初めの一二度とそ意味も道理も解らねど、讀むに從ひ顧みて己れの心に比べ見れば、恐ろしさ云はん方なし。次の夜は日曜日。お粂お花の二人に誘引はれて、最寄の教會に至りぬ。はや定めの時も

過ぎしと見え、室内に夥多の男女いと親しく打ち交りて、神に祈を捧ぐる殊勝さ。お香は二人の中に交りて、左右よりいと心切に聖書を教へらるゝに、我知らず一章讀み二節誦して、齊しく讃美歌を謠へば、その聲麗はしく。良らくして心を鎮め目を閉づるに、堂中靜まりかへりて、牧師の祈禱は信者の心耳を清めしむ。また目を開けば、彩燈堂中に閃めきて、さも氣高き米國婦人の演説聞くに、一々我が身を刺すかと怪しまれ、汗流れ唇顫けども、左あらぬ躰する苦しさ。間もなく耳元近くお香の腸を貫ぬく聲『妻なる者よ爾曹その夫に服ふべし。若し教に循はざる夫あらば、教に由らず妻の行に由て服はん。そは爾曹の

恐懼を以て潔き行をなすと見るに因りてなり。爾曹の裝飾は髪を辮み金を掛また衣を着るが如き外面の裝飾に非らず。たゞ心の内の隱れたる人則ち壞ることなき柔和活靜なる靈を以て裝飾とすべし』この章句はお香が胸には一句一苦。過てり定まる夫ある身にて、不貞とも不操とも仇し戀に心を亂し、今更悔ゆとも詮なけれど、懺悔には萬の罪も滅ぶとかや。我れたゞ梅次郎に優しき言葉かけられしのみにて、心を亂せしとせば、この會堂の男女は皆戀ゆゑに寄べきに、神に捧ぐる祈のために、親しく交りて親しく語る。斯くしてすら、人の心の善惡の判ち難きに、たゞ一言二言云ひ懸けられしとて、それを情けに實を盡

さば、世には鬼無く、天下の人みな戀ならぬはなし。悟れば昨日の迷の雲、あり〳〵晴れて月影の冴けきに、我が後姿も恥かしく、門口まで送られし二人に別れ、家に歸りて寢に就きしが、一度ならで二度までも同じ夢。平れ伏して今迄の罪を夫に謝すれば、たゞニヤ〳〵と微笑まるゝに、一層身の上を恥ぢて、たゞ嬉し涙に夜着の襟濡らせしかと思へば、東はハヤ白み障子に寫つる鳥影二三羽。此日の夕暮最寄の待合茶屋にて、師匠の延定よりお香さまに一寸來て玉はれとの使ひ。お香はハヤよき友得てより、見識も幾分か增したれば、鄙しき踊り清元の譽古は、今日より思ひ切るべしと諦めしが、さりとて十日なり二十日な

り、師匠と頼みしその人の只今との使ひに、いそ〳〵と供をも連れず茶屋に尋ね行けば、表は舟板塀の意氣造り。庭石傳ひてお師匠さんはと聞くに、彼方は一向怪訝な顔。お師匠さんは男の方かと問はれて、お香も訝しさに堪へねど、慥しかにお宅で御座いますと問ひ答への其中へ、二階の階子をトン〳〵下り來る女中。最前迎ひに來りし者とてお香を見るや、お待兼です彼方へと案内して、奥まりたる座敷に通し、女中は萬事如才なく、このお座敷ですと云ひ棄てゝ勝手の方に去りぬ。お香はお師匠さまと云ひつゝ、障子明ればこれはしたり。驚きし聲忙はしく、姿はその儘中へは入らず。

艶々しき島田髷夕風に吹かれて、鬢の毛のチラ〳〵頬にかゝるも怨めしく。黒塗の東下駄塵を蹴立てゝ、縮緬のけだしひらつくも急がし。お香はこの夕暮に供をも連れず、一人いそ〳〵と堀留の河岸傳ひ、家に歸りて母親に物をも云はず、己れが部屋に通りてたゞ潸然と泣く。母は常ならぬ樣子を案じて「お香お前何うしたの、泣いたりして、お稽古に行ッて誰かと喧嘩でもしたのかへ」問はれても答へず、たゞ口惜しさに袖嚙〆て、涙さへ——ほろ〳〵聲なり「コレお香、お母さんに譯をお話し、何がそんなに口惜しいのだへ」お香は口惜しさと、怨めしさに口も廻らず「お母さん口惜しつくて、モーチッとで人を慰みも

のに……」あとは問へど答もせず、女中に床しかせて寢るとの事ゆゑ。母は合點ゆかねど樣子有りげなれば、お香が心の鎭り し上にてと、思ひを殘して勝手に去しに、眠るかと思へば左はせず。燈搔き立てゝ涙を拭ひ、机に向ひ聖書繙き目を閉ぢて《アーメン》

翌日母は譯を聞きてこれも驚き、此日より清元の稽古を斷り、築地に居らるゝ米國婦人コールト、ヒング孃に就き洋學を修めしめぬ。延定より歸り來りし手代の話には、お定と梅次郎は其後近所で駈付ける程の喧嘩して、今は梅次郎の行衛も知れぬよし。お香は今日となりて、夫の離別を輕卒にせしこと思へば、

悲しく口惜しく。何んと云ッてお詫せうやら、一間の內に閉ぢ籠りて、言譯の文ながゝと認め、女中の手もからず、自から郵便函に投り込みぬ。心元に復りては、優しき夫の慕はしく日毎に母と影噂して。竢てば生憎に雨。晴るゝ日の少なきに、もしや道中に變りはないかと、用もなき電報度々掛けて、返事聞く事の嬉しさを、枕に通ふ移り香と見て、今宵も歸宅の夢に覺され、時ならぬ夜中に起き出て、母に何ぢやと叱られては、我れながら蓮葉に恥かしく。雨は晴ましたと云ひ扱けて枕に就けば、また一睡の夢とも判かぬ間に、夜はハヤ明けて旭キラ〳〵雨戸を射すに、氣もいそ〳〵と精一杯の化粧も、今日ばかりは

夫に喜ばせたく。お迎ひとして善兵衛を停車場へ急がし立てしが、後で無粋でゐらッしやると、心にも無く神様をお怨み申すも、まこと造物主の自在力ましまさば、この永い日を何んとして、蟇蛙よりの汽車上野に着くまでは。（廿四年作）

舞子

脉々涼風氣似レ秋。人遥斜日落邊樓。
沙明水碧鷗聲遠。一片煙帆是淡洲。

須磨

晩潮空咽水濱村。荒逕斜通山寺門。
公子墓邊眉樣月。漁歌聲裏又黄昏。

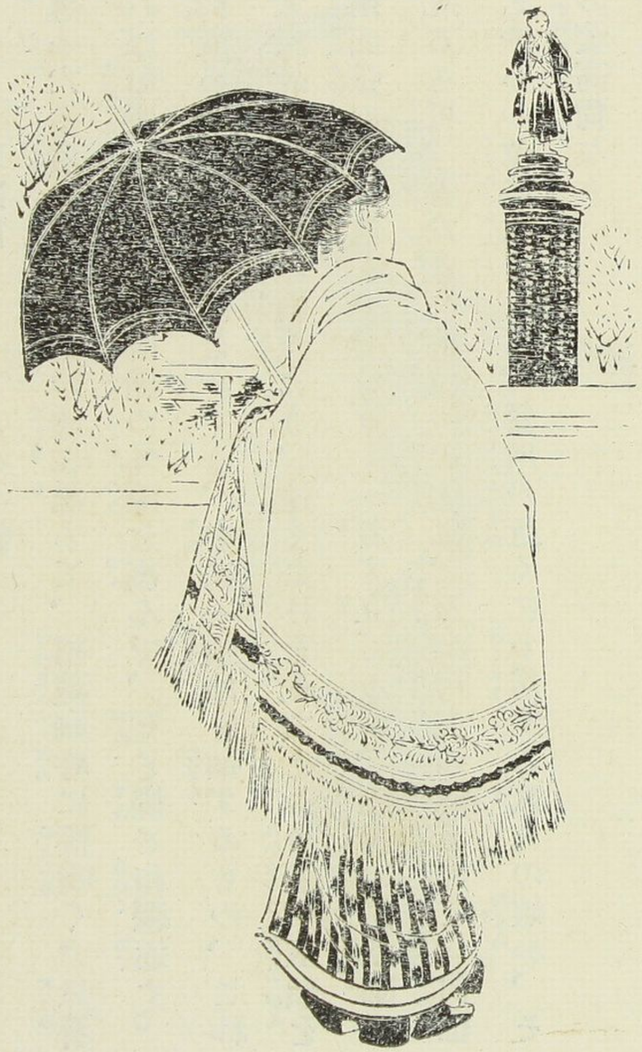
娘姿十五區

東京は了得に天下の大都、住む人の上を見れば方圖が無く、下を見ても方圖がなし。その上つ方は愛宕山の塔の如く、下つ方は鐵道線路の下にある新網の町にも似たり。ニタリあれば、田舟あり、傳馬船で花見する人あれば、炬燵で雪を見る客のあり、されればその風俗區々にして區々十五區の風俗は、十人十色の上に出でゝ、みな相異れる所ありと、まことや麹町娘の令孃風なる、淺草の藝人じみたる、居はその志を移すとかや。

人情も此理に基き、區々に依て厚薄あり、土地によりて質素と

奢侈とあり、一錢三厘の洗湯に、糠袋一つで間に合はして、尚ほ垢拔けのする新造あれば、玉子糠、絲瓜、花筏、牡丹精、香水、小町水などを遣ふても、瓦に光無き娘もあり。水は美人に關係あるか、美人は水に緣あるか、京は女の名物にして、東京は男の產地といへり、然らば即ち東京の女の子は落第者か、否々、然らず、今や改良水道成らんとして、八百八町產湯を遣ふに便利よく、滿都の人士、悉く神田の兄哥と、高慢の鼻を齊ふし得らるゝに至らんとす。

こゝに美人十五區の時世の態を寫して、衣服の嗜好、流行の興抔左につらねたり。皆さん！御覽じませと云爾。（廿八年）



麹町區　ショールの令嬢

遲々たる春光、牛ゲ淵の邊に滿ちて、招魂祠畔に櫻咲く、只看れば紅雲一帶、近衛師團の外濠を裏んで、花と蝶と相驅逐す。彩霞あり、馬場の柵をめぐる、中に一頭地を抽ずるもの、これ大村故兵部大輔の銅像なり、遠くこれを見たまふ令孃、玉顏を兩面張の傘に包んで、ショール着て立てる態、銅像の影法師と見るも可、着たる矢飛白の衣裳は、父が弓矢の餘光にて、何位とやらの位に叙せられ、營所の近くに卜居する武人の娘か、その姿高尚なり。

散る花や矢飛白の娘ヌッと立つ

神田區　職人のおかみさん

内儀の俗稱、山の神と呼び、おかみさんといふも、尊敬の意味は離れざるべし。正一位などいふ尊號は、貴婦人方にあらずして、却て外神田の裏店などに住む、親分達の女房につくなり。見よ、夫は終日働き通して、日給鳥の塒に歸る頃や、女房は家に在りて、一日の經濟を辨じ、夕餐の膳に一合つくる兵站部の行屆きたる仕方は、長屋中での司令官なるべし。萬筋の半纏に青耳のある八丈の襟をつけて、蚊飛白の單物は、年も葉櫻、節も極暑に間はあるべし。

更衣未だ半纏のとつおいつ

日本橋區　小紋羽織の御新造

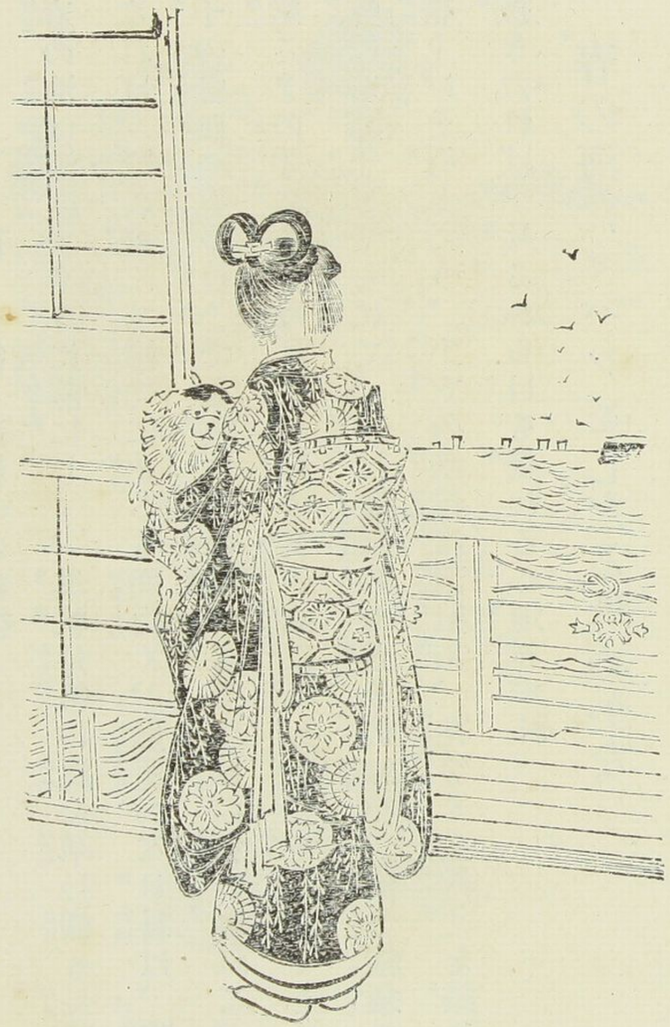
霰小紋の羽織は召せども、浮世の冬に霙降る貧乏人の境界を知り給はず。常に塗土藏の裏に起臥し給ふても、米の直は御存じなく、土一升に金一升といふ生へ抜きの本町に住めば、都の中にこれより好き處はあらざるに、物見遊山に供を騒がして、芝居の代り目は欠かした事なく、眉は剃つても、役者のお贔は止め給はず、子を産めば、乳母よ、子傅よと徵發して、其身は年中摩り研きにのみ氣を遣つて、それで御新造の役目が濟むとは、實にこれ天下の樂境。

湯がへりのピーヤ　ヤりするや　初嵐

京橋區　珠數爪繰りの御隱居

老ひては子に從ふの諺を守りて、浮世の事は孫子に打任し、身を佛門に歸依して、朝暮念佛三昧に耽り、珠數爪繰ることの殊勝さよ。ことさら老人の目敏き、耳敏き、まだ東も白まぬに目を覺し、寺の鐘に心耳を澄して、築地の六條樣へと急ぐ、冬の晨は霜柱に寒さ一入なれど、老ひの一徹合點せずして、納豆頭巾に、龜甲形の被布着けたるは、萬年も生ん心にや、年は七十幾つといふに、色も艶々して、目だに霞まぬは、此人の春長きことよ。

袖頭巾念佛たゝむ隱居かな



芝區　位爵も高輪のお姫様

春の海は波熨すやうに靜にして、眞帆片帆の風を孕む樣も長閑なれば、鷗の飛んで椽先に止るも面白く、影麗かな日暑は、障子の骨四つ五つ目までを映す程の温かさ。手飼の狆の馴れて、姫さまの手にまつはれば、鈴の音の幽に鳴もいとやさし。その髪はお稚子とやらにて、帶は金襴のお狹みに結び、鬱金縮緬の帶上げを召したり、上衣の幽禪は薄鼠に、花笠と糸柳とを染め抜きたれば、見るから目も覺むる心地ぞすれ。

春の海たゞパッとしたる眺めかな

麻布區　華族屋敷も廣尾邊の令嬢

廣尾の秋草はまた格別にして、枯野に水の白く流るゝさま、晩鴉塒に歸らんとして、冬近き杜の木の、夕陽を射けて、紅燃えんとする景なんど、畫にも及び難し。こゝに大藩のお大名、その昔の下屋敷を、今の本邸に改め給ひて、忠臣の三太夫に諸事を賭はせ、殿も姫も、花月に朗詠して、浮世の塵に染み給はぬ境遇、これ人間にあらずして、殆んど神に近かるべき清興、髪も束髪とはホンの名ばかり、天人がこんな髷を入れて居まするとは、御出入の女髪結の言○

庭つゞきパノラマに見る枯野かな

本所區　春は花の顏冬は雪の肌の藝者

雪は鵞毛に似て、飛んで散亂する向島の土手を、鶴氅代りの合羽に凌ぎて、銀鼠のお高祖頭巾の、目ばかり見せたるは罪なるべし。春は花の雲に裏まれて、鬼事に客の興を添えたりしが、夏は葉櫻と世の人にからかはれて、素通の涼み船に嘲けられしも、雪の日の興あるは格別なり。山谷堀、待乳山の夕景色を向ふに眺めて、お座敷の歸り路を急げば、路には二の字の痕を殘し、家には行火を暖めて、待つお袋の慈悲深氣なる。

雪の日や竹屋はそこに見えながら

赤坂區　ゴム玉の色も赤坂邊のレデー

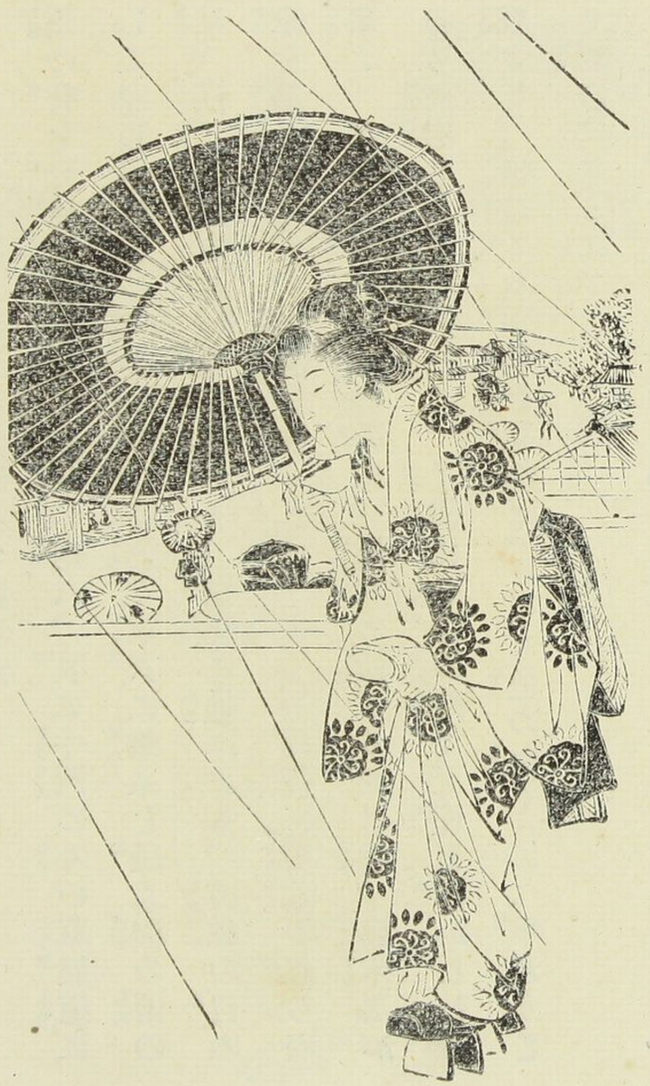
御所の甍、高く聳へて、雲を摩づれば、濠の氷の春の日に溶けて、水禽の羽音させて飛ぶも勇ましゝ。こゝに唐織の洋服召して、お妹御と共に散歩なさるゝレデーは、そも誰人の子におはしますぞ。鳥に比するは勿躰無けれど、そのお姿孔雀の如く、ポンチットの鳥の毛は、お羽孃とでも呼ばれ給ふ姫君か、風船玉に餘念無き妹御の罪の無さは、天使か、神の子か、頰の肉は豐かにして、笑ふ顏の優しさは、春の小波の戰ぐかとも怪まれけり。

ゴム玉の蝶を追ひ越して春の行く

四谷區　黒紋の羽織はさても高尚な奥様風

まだ二十歳の坂は超え給はざるべきに、根上りの丸髷、五分玉の珊瑚珠に、金脚の釵は仲働がして呉れた奥様風、羽織の着附、小紋の上着、いづれ位などのある家の令嬢なりしや。新婚旅行の道中に若い者を羨しめたるは、ツイ近頃か、仕打の初々しき、物事の控え目なる、飯事のやうなりなど、評されて顔赤むる程の優しさは、結句花嫁の地金見えて、人間一生の快事、今この時にあるは、これなる人の身の上なるべし。

若葉して鐵漿似合ふたる新婦かな



牛込區　遠見に神樂坂の藝者姿

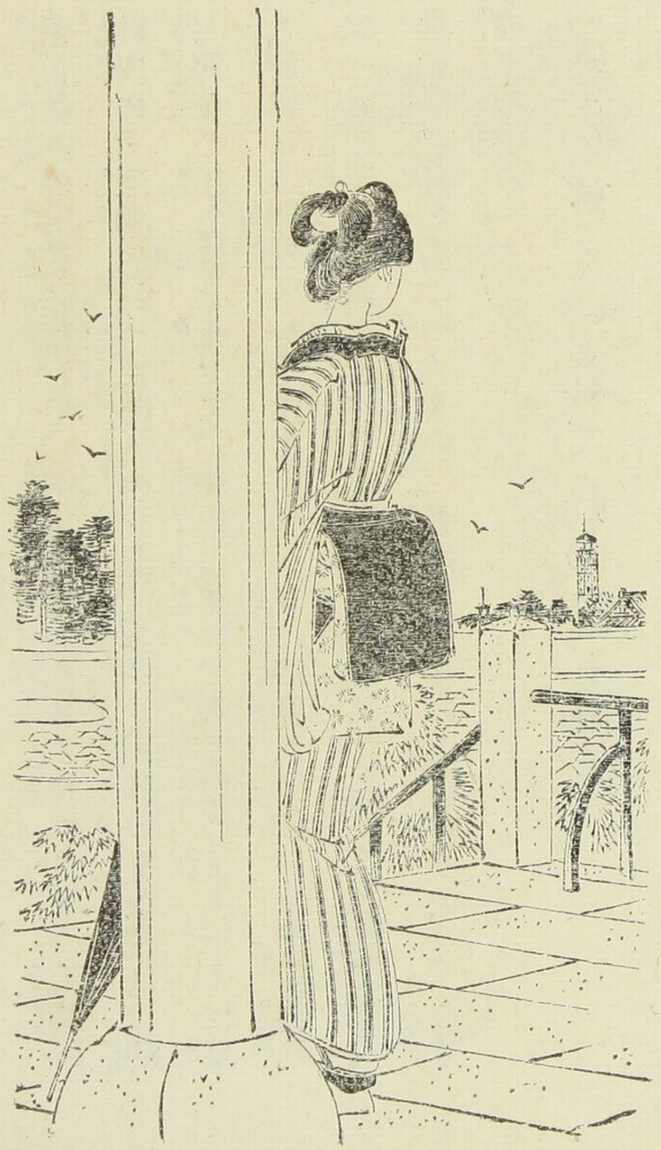
馬の脊を分けて降るといふ夏の雨は、實に牛門の外の草履道にして、しかもこの神樂坂は、空色の單衣に銀糸を縫ふ程の雨の足。横丁の姐さんが糠袋喞へて、湯屋に通ふにも、澁蛇の目の傘を翳しかけて、横降を凌ぐとは、よくも馬背に境論の起らぬ事よ。だらし無い朱子の帶に、浴衣の褄どりたる態、塲末ながらも何處となく垢拔して、丁得に三味線持て、座を浮かしむる腕よと。傘持てる手筋を見れば、さても色の白くして、手どりとも思はれざるに……。

新道を夕立の颯と通りけり

小石川區　新芽は未だ柳町邊から學校通の娘

初三の月の圓かれと願ふに遲く、娘を育つる親の待遠がるは、愛の深き故なるべし。道は遙かなれども、學びの道は高等なるこそよけれと、お茶の水の邊まで通はして、螢雪の業に精出さすること、世にあり難き惠なれ。包み抱えて、傘さしかけて、柳町から通ふを見れば、春は芽を吹く、出世する。氏は無くとも、怠りなくば、玉の輿にも乘らるべし、今日の襤褸を錦繡に代へて、花を飾るの日のなかるべき。

秋の日やいま學校を出たばかり



本郷區　新茶の湯島出花は茶屋女

色を新茶の出花に移して、茶屋女となる身の憐れさよ。天神の社内に、天神に結つた美人の立姿、朱子と更紗の晝夜帶は、終日終夜の忙しさを見せて、棒縞の袷は、階子段の上り下りに足も棒になる印なるか。たまさか一日の暇貰ふては、お芝居物見に一月半年の壽命を延べて、辛氣臭き身の上を嘲つも道理なり、世に籠の鳥と名のつくもの、豈傾城の身の上ばかりかは、こも亦その中の一人なるべし。

雲の蜂くづれて鳥の歸りけり

下谷區　品は上野の不忍に蓮見る娘

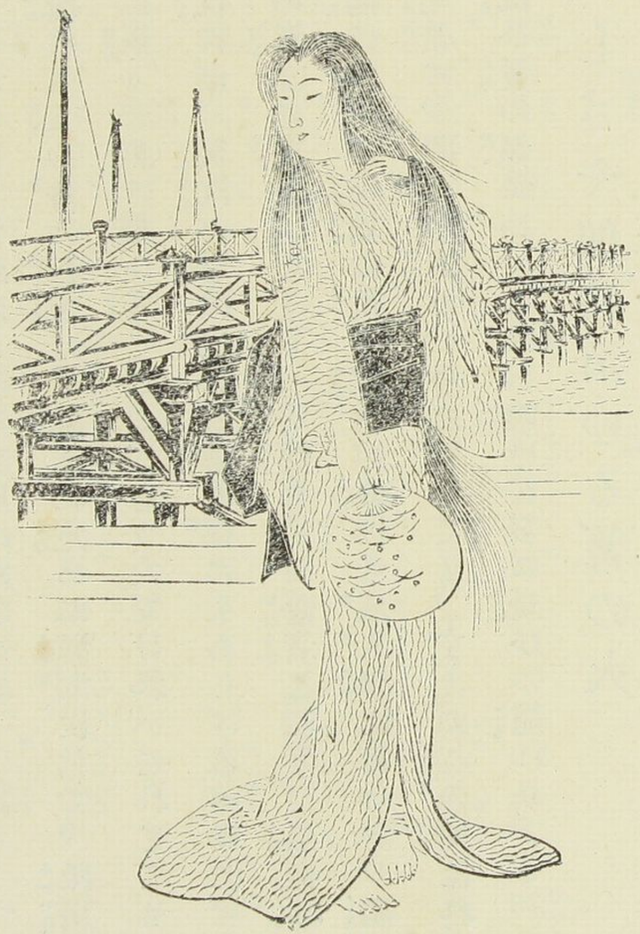
漢法醫者などの娘か、古風に化粧立てゝ、月前に物思ふ風情あるは優なり。文金の高髷に、菅糸の根がけ、中振の單衣に純子のお太鼓、黑塗のポックリに、コックリ思案の躰などは、悪い洒落といふべきか。芙蓉水を出でゝ、夕風袂にあまる、美人歩を轉ずれば、野草の露、はらゝと溢れて、轉々珠玉をまろばすも妙、日落ちて、鐘聲煙を罩め、月出でゝ、燈影水に流る。風無きか、荷葉動き、人無きか、短笛樹間にあり。光景、眞箇に小西湖。

蓮咲くや未だ靄ながら塔の尖

浅草區　未だ十歳の上を被布三ツと越えぬ孃樣

鳩に豆飼ふも功德の一つや。浅草觀音の境内に、慈悲する親の多きは、我子の福德圓滿を望めばなり。されば仲見世の繁昌多きが中にも、翫弄物屋の數あるは、子に甘き母の夥しき證據、よし浅草寺の誓ひは浅くとも、愛の泉は深かるべし。女中に手を引かれ行く娘の年、十二か三か、きり下げの髪を、近頃ひき伸せしか、しかも上品なる姿風俗は、有福なる町人の御秘藏なるべし。衣裳の模樣は華美にしてしかも優し。行水に扇流の幽禪は、末廣かれとの心にや。

木枯をフンまへて立つ仁王かな



深川區　嵌ればこれも深川の圍ひもの

水の流れと人の身の行末は、思ふに定めぬ淵瀬にして、深川の深流に嵌り、男の圍ひ者となるこそうたてけれ。これとても素性を洗はば、濁江の岸に生ふる蘆の根にもあらざるべきに、稻小舟の思ふに任せざるより、零落して日蔭者となり、黑板塀の裏に圍はれて、匈奴に泣く昭君が哀れも他人事にあらず、黑朱子の丸帶に、明石の衣を、身に着けても、すまぬ心の結ぼれてや、洗ひ髮の頰にかゝるは、態とならぬ憂ひの籠れり。

涼しさや佃に消ゆる篝の火

鷹の羽

今歲も早く花の飜れて、春は一雨毎に地に敷くといふなる昨日今日、未だ葉櫻の葉も揃はぬ枝に、五日あまりの月の懸れるも、何處やらに淋し氣な心地がする、和田鷹城君が、雲の彼方に入相の鐘霞む夕間暮、せめても手向の花一枝と、躑躅花を折つて、君が寫眞の前に供へ、回向と共に想ひ出さるゝ、生前の逸事の一ツ二ツ、朧ろげなれど、こゝに書いつけて見んか。

年は忘れたが、僕の未だ山形市の太物屋に、丁稚奉公をして居る頃の事であつた。固より學資などいふものは、目藥にしたい

程もなく、書籍は市村といふ豪商のと、八文字屋といふ本屋の店のとで勉強した、その折その本屋には政助、大吉といふ二人の管頭がゐて、僕の貧を憐んで、竊に店の本を貸して、讀まして呉れた、たかしその本は賣品であるから、旦那の店頭に居らぬ折を見て、僕に内々に貸して呉れる、それも一冊一夜の約束で、二冊も三冊も纏めて貸して呉れた、僕はそれを白い紙に包み、手垢をつけぬやうにし、徹夜をしても讀んで返したものである、恰度その折であつたらう、或日大吉君のいふには、今東京から面白い本屋が來て居る、紹介して君を逢はさう、屋號を春陽堂と云ひ、和田鷹城といつて、商人に似合はず、義俠心に

富んで、愉快な男だと云つて話してゐる中に、一個有髯の偉男子が、白天笠木綿の大風呂敷で、本を山のやうに脊負つて、この八文字屋の店に這入つて來た、管頭は低語して、噂をすれば影とやらで、今君に話したのは、この人なんだと云つて、言葉を轉じ、時に和田君、この小僧さんは、年のお若いのに、小説が好きで、作るのも巧手なんです、何うか引立てゝ下さいと引き合はせる、僕は不愛想に一禮して、その人の顏を見ると、髪は其頃自由黨刈とでも云ひさうな伸び鹽梅、額に八の字の皺があつて、鬚は顏の半面を隱してゐる、この學者然、否、耶蘇教の牧師然たる偉男子が、これが商人であるかと、再び君の容貌

を覘ふに、威あつて猛からぬ物の云ひ振、可愛らしい口元から、滴るばかりの愛嬌を傾けて、貴君小説がお好きですと、勉強になります、お遣んなさいく、旨く書けたら出版しますよと、云つて呉れた、その時の僕の愉快さ、君を神か佛かのやうにも思つた、僕は斯うして居る中も、傍に主用を抱えて居る身の上豆腐の御用が遅くなるといふ鹽梅で、急いで旦那の家に歸つて見ると、果してお目玉、それも其筈一寸二三町の處で、二三時間も隙どれるのですもの。

斯くてその翌年の春であつた、僕は一旦郷里に歸り、病める母、君に隨行して、小野川といふ温泉に一月餘逗留して居つた、そ

の折に綴つた小説一篇を、臆面も無く、春陽堂主に送つて、出版せんことを云ひ込んだ、然るに別にその返事を聞かなかつた兎角する中その翌年の秋、母君は死去り給ひ、父君は幼より無き數に入られて、僕は邪魔する雲も無い一人者、飄然として東京に來たが、さて儘ならぬが浮世で、こゝでも二三年の辛抱泣くほど辛らい事もあつたが、それや是やで、春陽堂に原稿を送つてある事も忘れ、またその儘で二三年を送つた、時は廿七年の暮、僕が博文館と斯ふした譯になつたにつけ、君は同業者であるから、今後の引立を賴まうと想つて、君に逢つた、そすると君は膝を叩いて、左も一大發明でもしたかの如くにいふ、

ア、想ひ出した、乙羽さん、貴君に私は山形で逢ふたヲ、それは今より十年以上にもなりませう、その時分は貴君も渡部二橋と云つて、私に小說の原稿を送つた事があらう、その原稿今以て保存してありますよ、今お渡し致しませうと云つて、一纏めにした中から、姓も號も今は變つてある草稿を選り出して、僕の手に渡された、僕はその用意の周到なのに驚いて、能くまア保存して置いて下された、有難う存じますと云つて、棄兒が再び出世して親の手に戻つた程の、大悅喜であつた。僕は二度も三度も禮を述べると、君は微笑して、原稿で飯を食べる商人が我が物と定まらぬ草稿を疎末にして好いものですかとの謙遜、

これでこそこの業を成就された筈と感心し、敬服した、世の方々は斯かる例を御存じはあるまいが、今の僕には不斷に例のあること、日々に何十篇といふ投書が諸方から舞込むが、受身になる當人の左迄に重きを置かぬに引かへ、作者の苦心は尋常一般ではない、が、忙しいに紛れてツイ名も無い人の草稿を、十年以上も保存し置くと云ふ事は、到底出來難い處置だ、實にこの一事を見ても、君が事務に忠實にして、用意周到な人といふ事が判る、僕も今や元の丁稚にかへり咲、これからが一花といふ盛りの年、是非君の「用意」を手本として、丁稚は丁稚だけの職分を盡したいと思ふ、古より名人は時と相關せず、放擲が

學者の豪らい所だといふやうな中に、僕も矢張一ッ水を呑んで居ただけ、事務にかけては未だ一年生の心地がして、此所小心翼々の體に御座りまする。

斯く思ひついて、筆を採つた今夜は、恰も父君が十七年目の命日、手向の花の露未だ乾かぬ中での述懷、これも他生の縁でがなあらうか。（三十二年）

美人八容

雪こそ墨田の面白き眺めなれ、鶴氅を着て俳諧する茶人の、植

半に陣取るあれば、コートつけて行く娘の子の、小梅の田甫をぬけて、土手に出づれば、吹雪は枯木に花咲かせ爺の、灰にても撒きたらんやうに、紺羅紗も霜降に見ゆるぞ興あれ、川向ふの今戸橋塲は、眠れるやうに沈着いたる景色に、枕橋をあしらひたる、川には舟を漕ぐさへ見えぬ、觀音の屋根、五重の塔、さては十二階までを、遠くパノラマの如く見せて、雪にコテと塗り立てたる、厚化粧の遠見近見、さりながら紅いものは、微塵も見られぬ、この雪の中に、澁蛇の目の傘さしかけたる玉の腕の、袖口から洩るゝ寒紅梅の襦袢の袖、春はこれぞと藤色の頭巾の顔の、たゞ目ばかりなるぞ怨めしき。

土一升に金一升の譬はあれど、昔から升で量つて見た人もあらぬを、さて日本橋の賑ひは實に言語の外なれ、車馬絡繹、肩摩轂擊といふ辭の、旨く繁昌に當て嵌りて、五分とも隙の無い、土藏造りの奥座敷は、人馬の響きも聞こえねば、表通りと變りたる浮世の裏の、閑靜にして、しかも悠々たる活計向には、お孃樣の何時も、手飼の猫を愛して、玉や々々と巫山戲給ふ外は、鈴の音のチンとも聲無く、春雨のしめやかなる、中庭にある盆栽の塵を流して、手水鉢の根の葉蘭に、サラ〳〵と音するもうれしや、斯くて管頭共にランプとか綽名さるゝ大旦那の、セ、コマしく晝の飯喫べて、店に出られし跡は、また寂寥と鳥の

立つたる古渡のよしあし、役者の噂に日も七ツ下りて奥樣の墓參濟せて歸らるゝまでは、諸事は孃樣と乳母やとの世界なる、思ふに久松とお染樣との情も、退屈紛れの、コンな時に出來たのならむと、トンだ所で哲學を研究したものと友のわれを冷評しける。

炭手前だの、服紗捌きだのと、いろ〳〵七面倒の行儀作法ありてこそ、女子の姿を優しう形つくれ、夏は涼しき風呂の湯に、松風の音を聞けば青簾の蔭に午睡の夢も覺めぬべく、秋は濃茶の飲みまはしに、淋しさの暮も忘れて、友の寄居を喜ぶめり、冬の日の爐開き、枝炭の白き色の、雪の枝とも思はれて、茶の

銘の「白」とあるにも、氣も心も沈着きぬるぞうれし、春は花に浮き立ちぬる空を見やりて、こゝは茅屋根の檐に茶の煙の立つも興あり、茶よ、茶よ、われは酒の德を汝に讓りて、新に百藥の長者に押さむ。

お茶の水の邊にこそ、今の世の清少納言、紫式部はお在すなれ、幼くして學びの窓に入り髮を唐輪に、紫の袴をひらつかせて、雪か霞かの唱歌に、春の野邊を蝶の如く飛びまはり、それよりしては蟹の這ふ横文字の、文の林に分け入りて、また踏み迷ふ言の葉の、テニハも落ちて秋の霜、鐘に更け行く月の夜を、ながゝしくも明方の、鷄の啼音に驚きて、夢ばかりなる勤學も、その甲斐見えて、卒業して、また百年の身を他人に寄する、女子の末ぞ憐れなる。

漾々たる春の水、これを一家團欒の裏にも譬ふべく、嫁なる人の柔順なるには、鬼千疋てふ小姑の角も折れて、お袋樣の御機嫌は不斷に宜しく、父親は何時も布袋面の福々しさ、愛の水も、笑の波も溢れて、家中は喜び聲の春の海、たま〳〵嫁の里に歸りても、舅姑の上を案じては、一夜も泊りたることは無く、今日も風折なき柳島の土手を、下女に送られて、暮れぬ間にと急ぐ家路、お三どんは膨れ面の愛嬌もの、問はざるに話仕掛けて、御新造さん、丸髷が大層お似合ひなすッて！

これも疇昔は綺羅を着飾りたるを商賣の手違ひなどより、通町の店も張り切れずなりて、八百八町も塲末の擔並に、詫びしく暮らす大家の三代目、零落れての今も、娘には美き衣着すれど、憂は目元に聚れり、この夕暮を手を引きつれて、妹と共に語らひ行く姉、容目の尋常なるはよく、ゆうに優しきも、諸人の愛は惹くべし。

天地も目覺ましてや、東の空明うなりて、夏の雲の流るゝやうに消え行き、やがて日は昇りたり、蓮の花の二ッ三ッ四ッ、齊しく咲きて、青き葉の上に、水晶の如き露の殘れるも清し、不忍の池の畔には、昨夕氣の藝者の、寢くたれ髪を五月蠅さうに

搔上げて、蓮見と洒落たるも憎らしく、猫ぢやらしの帶のしだらなき、新形の單衣を風の吹き捲くるに任せて、東下駄のカラコロの音床しく、チョイと姐さんの聲もなまめかし、彼は芙蓉水を出づるの趣あれば、此は海棠の雨の朝といふ姿あり、路に大學生に行遇ふても、洒啞々々乎たるは、蛙の面に化粧の痕もなく、口紅は摘み食ひせし時に落ちしまゝ、片頰に枕の痕の殘るもうたてし、しかも身は夜を晝なる稼業の、人並に朝起して、蓮の花見とは、物數寄屋町の姐さん達、イヨ大出來と、この處大マケに褒め置くべし。

三圍、牛の御前の花は、所謂俗に近くして、妙ならずと、乙に

澄ましたる女學生の、バイブル片るは物凄し、總じて生學問は鼻に由結婚をやりたがりて、お腹が膨ふ人の多きは、田舍出の女書生に花を織り出す向島は、鐘ケ淵に至鏡の如く澄みて、舟を行る人の、波は遠山の黛を凝して、白帆のき眺望ぞや。（三十二年）

送蓮山人辭

友あり、蓮山人といふ。學は舶壇にポッチャン小説の一派を開くて、永らく市に隱戀坊なし、戀川蓮と號するは故郷忘じ難しとの滋賀の浦涙には忠度も花に涙を灑紫式部も石山寺に五十四帖の服紗在りて、いかで斷腸の句なかるべを汲みたるなり、初紅葉は立田山

青けれども、他人は其文を將て輕妙といふ、これ東男が京の水に磨き上げたる腕前なり、豈垢めけせざるを得んや。

山人の文章はたとへば水彩の畫の如し。多情多恨の圖取は千縷萬絲の隈を描けども、何處やら愛度氣なき所作は、なほ桃太郎の黎團子に同じく、日本一と稱してよし。予幸に山人と交を結ぶことを得て、文を談じ詩を論ずるこゝに五年、友情恰も妹脊貝の如し。今やその貝の間を割て、山人は嵐峽の麓に遊ばんとす、地は故郷に近きのみかは、東山の晩翠保津川の殘紅、一々山人が藥籠中のものとなりて、携ふる所の貝は彩毫を浸す繪の貝皿となるべきも、予が手に殘る片貝は片思ひの怨みとなり

て、花にも鳥にも涙をそゝぐ器たるべし。吁嗟別時、名殘なほ未だ盡きじ、未練は秋の蝶と化して、行く人の餘香を趁へども、翼無き身を如何せむ。時は晩秋、殘月白く驛鈴冷なる處に、山人の行を送りて、不肖聊か餞の辭を爲す。（廿五年）

木枯や君を送りて一里塚

勇み肌

幕府世盛りの頃。しかも花は櫻木、人は武士の中の八萬騎に、坪内左近といふ侍あり。武藝において免許を得ざるものなく、殊更馬術を能し、騎射に長じけるが、ある日雉子橋御廐に出で、

譽古の歸へるさ、九段坂上にさしかゝるに、萬屋といふ酒屋の前にて、樽拾ひする小僧、または中年以上の下男なんど、店頭に仕入たる酒樽の積みあるを、各々さし上げ競べしてありしに、左近も興あることに思ひ、馬をとゞめて眺め居る中、弗と口を辷らして。その酒樽一つ位をさしたりとて、力あるものともいはれずと嘲りしに、居合はす若者ども聞きつけて腹うち立て。何を云ひ給ふぞ、己は馬に騎りゐて、他人の力業をけなしなどするは、腕わざを知らぬ者の言さまなり、下りて一さし指し給ふべし、首尾克くさしたらんには、この酒樽は御身に進上すべしといへば、左近からく〳〵とうち笑ひ。いざ武士の手練を見せ吳

れんずと、馬上にありて並べある四斗樽を、左右に一ッづゝ引提げ。こはかたじけなし、町人たしかに貰ひ行くぞと、馬を早めて駈行けるさまは、さすがに武家の若殿原とて、勇ましき振舞かなと、人々賞めぬはなかりけり。

雷電は世に鳴り響きたる力士なるが、寛政の頃かとよ、春を孕みし隅田川の櫻花は、昨日今日より咲き揃ひて、堤に人の山を築き、舟には何々丸の銘を打て、宵ならねども千金を惜まぬ客も多し。雷電もいざ花見んものと、容貌美き妾を伴うて、三圍の社近く來りけるに、弗と堤にて行逢ひたるは、その頃蒼蠅き朱鞘の一群、しかも劍術に名うての男谷某といへる侍が、門弟

數多引連れての花見三昧に、かねては名聲を羨む下郎の意地きたなきより、酒狂に事寄せて、一人の門弟が手にしたゝか唾をかけ、雷電の顏へなすりつけたれど、さらに意とせず。其處はあぶなし、脇差の樹の間をくゞらんよりは、花の下道こそ心安しと、土手を下りて田甫道を、妾と共に行き去りぬ。男谷は却て赤面し、いたく門弟の狼籍を戒めていふやう。世に力士ともいはれ、幕ともいはれたらんものゝ、いかでさる些細のことに喧嘩や買はん、政宗の刀は柴を樵るの器にはあらぬぞと、叱りつけしとは、實に興ある話ならずや。

人も知る鼠小僧治郎吉は壯年の頃、賭場に在りて丁半に耽け居

る時など、見分が金錢の無心を云ひ込めば、何時も胡座組みて、勝負する金錢を股ぐらより掴み出し。サアと云ひて手を背後にまはし、その人の顏を見ずして貸し遣るを。不斷の事にしければ、餘の人不思議におもひ。親分が金錢を貸すに、いつも手を背後に出し遣るは如何と問ふに。さればなり、人は今日絹布の廣袖を着たりとて、明日は菰を着ること無きにしもあらず、その時借人の顏見覺え無くば、返し呉れといふこともなるまじ、よりて背後に出して、その人の顏を見ぬなりと云へる由、江戸氣性の勇ましといふはこゝなるべし。（廿五年）

京の雪

われの京に遊べるは、いつも春の初めにして、雪の東山を、春月の夜に見ることなり、先つ年勝を三井寺に探りて、疏水を下り、蹴上げの泥を脚袢に浴びて、草鞋を三條小橋に脱ぎたりしを、柳の馬場の漣の聞きて、われを「おのぼりさん」と罵倒せる折なりき。一夜風荒みて、さらりと降り積りたる雪の朝、川原に近き旅籠の、二階の窓を押開くれば、東山も鴨河も、雪に厚化粧の、容姿をつくりて、たゞ眞ッ白のその中に、川添の柳に鴉の止まれる、黑きはそれのみの、華やかなる朝日は、水晶簾

を透して、木屋町の翠帳を照せば、紅閨に未だ睡足らぬ美女の、日闌けて欄に凭るもありき、われは懷中寒き窮措大の、四條の蠣飯屋が手頃なる頃ゆゑ、他人の贅のたゞ小癪に障りて、財布の錢のあるに任せ、菊水の支店に、腹を鱈腹膨らして、清水に登り、雪の京を見渡したる時の愉快さ、今もなほ忘れ難し。さる程に去年の一月も、恰度京に逗留して、柊屋の二階を城廓と、用心堅固に打守りつ、他人に敗を取らざりし翌日、恰も好しモト京都守護職たりし會津侯の令息、松平容大子と、東山の雪を見捨てゝ、歸りたる時の無念さ、今もその景の眼に殘りて、忘れ難きを如何せむ。（卅一年）

まる窓を額に見立てゝ雪の山

團洲別墅

日本市川團十郎が茅ヶ崎の別莊は、遠からんものゝ、音にも聞き。近くは寄つて眼にも三升の親分が、數奇を盡せしものなる事は、先刻から知るも知らぬも、午前八時よりとの招待によつて、云ひ合はしたかのやうに新橋停車場に寄り集る、その面々には伊國公使。葡國代理公使、西國領事、外數名の伊太利人、日本の名士には積積（陳重）和田垣兩博士。神田男爵、朝比奈碌堂、尾崎紅葉、長田秋濤の各外國通と予もその列に連りて、

待合室に手を握り合ふに、いづれも團洲とは相識の士なるも面白く、瀛車は八時半といふに新橋を出でぬ、一車借切の水入らずなる中には、葉卷紙卷の莨をいやが上に積み込みて、鼻からは煙、口を衝いて出づる話柄は何事ぞ、和田垣博士の川柳論、先づ幕明きを告げて。滑稽頤を解く間もあらせず、次は紋章の話から、銘々のお里を洗ひ出して、君も我輩とズウ國かと笑ひ轉けるもあれば、話は端なくも碌堂君が朴齒の古足駄の論に移りて、その相棒の古麻裏を、秋濤君の穿けるも可笑し。我が物を棚に上げて、他の帽を評する次で、紅葉君の茶絽の長袴を、珍らしと手にとり見るなど、時鳥も啼きさうなる曇空を、かけ

る瀘車中、テッペンから爪先まで、批評し合ふ事なれば、就れも身構へして、敵の襲來を恐れ入るが如きも興あり、瀘車は水を出で、山に入り、杜に隱れ、野を行く毎に、眼を窓外に遊ばすれば、天地たゞ青きが中に、白く輝く小川に傍ふて、駄馬の駈くるなど、畫にもして欲しき眺望なるを、寫眞氣ある僕の、何條見遁すべき、たゞ籠の鳥の出るに由なきを奈何せむ、戸塚の隧道の闇も、車中は葉卷莨の星の閃めき渡りて、紳士の口元の髯ある邊のみ、火を吹く毎に明きも妙なり、さて洋人の高聲にて談論するを、何事ぞと耳を欹つれば、曰く港務局權限論、曰く海軍裁判說など、御身分に相應なるも面白し、瀘車は頓て

茅ケ崎停車場に着く、見れば染五郎の羽織袴仔細らしく着飾りて。我等の一行を出で迎ふるに會し、直に茶屋に赴きて、少憩しつゝ、それより十數輛の拳車を驅りて、元の東海古道の松並木を通り拔け、百姓家の二三、夏木立に交りて建てる村外れに出づ、そこには榮華の夢を午睡に見るべき、粟餅を賣る茶店のあれど、洛陽に汽車の出來てより、わざ〳〵此處に腰を休むる、青雲の書生もあらぬなるべし、漸く濱邊に近づけば、ザク〳〵路の車は遲く、四十分ばかりにして孤松庵に着きたり、斯くて我等一行、谷口氏をも合せての十六羅漢、先づ本堂に居並びて、結跏趺坐と打寛ろぎ、マアお羽織をお上衣をと、右から左から

新橋特派の尤物が手を出して、下にも置かぬ待遇に、名々顔の相好を頽されたる處、正にこれ李龍眠の羅漢畫、和洋折衷、似た顔の無い所が妙とや云はむ、扨當日團洲が欵待優遇の一班は、秋濤君の筆に讓りて、故らに予が減らず口を叩かずと云。（卅二年）

日光結構記

この月十七日は、内地雜居といふ前代未聞の盛事なれば、歐人も米客も浮かれ出し、新柳二橋に入浸りて、赤ひ鼻毛を延ばし、碧い眼の眦を下げて別嬪さん、日光結構ありますと、和洋折衷

の駈落も仕かね間敷き見幕なるに、負け嫌ひの我黨四人が、奮然として立ちたる脚袢がけ、麥藁帽を阿彌陀に被りて、草鞋穿きの足輕く、上野停車場に駈け込みたるは、第一回の回遊列車に乗らんとてなり、時は恰も數入の十五日、さして行く地獄の釜の二荒山、明け放れたる東雲の、朝は未だ五時といふなるに、ガタリピシンと鎖す戸の、窓から白み鷄の啼く、東を出でゝ大宮や。栗橋、小山、宇都宮、さては鹿沼に、今市と、わつが四五驛を停車せしのみ、千里一飛の勢もて、八時を少し過ぐる頃、目ざせる驛に着きたりき、乘つたリ〳〵、停車場より神橋まで、立錐の餘地すらも無き人の波、兩側の旅籠屋から、お休

みお泊りと五月繩いふを我々は他所に見て、鳴蟲山を左に、お宮の下手を直とぬけて、大谷川に沿へる茶屋に憩ひ、こゝにて寫眞機を負ふべき人夫を雇ひ、先づ御用邸を拜觀して、八幡の社に詣で、延命地藏の坂を下りて、蓮華石村に出づるに、このわたり一圓は、近々に東宮殿下を迎ふるため、道普請の用意をさ〳〵怠らず、大日堂に至りて、先づ一枚とレンスに景を疊みて、中は見られぬ玉手箱、細尾村に出でゝは、牛馬鐵道に傍ふて上り、馬返に着きたるは正午近き頃なりし、こゝにて晝餐たぶるに、湖水の名物赤腹の甘露煮と、干瓢を皿に盛つて出すを、松魚子それは何やと問ふ、こゝの赤腹は東京のハイ、奥州にて

はハヨと云ひて、我は至極の好物なり、さて香の物を何やと見れば、若き胡瓜の鐵砲漬、緣にからまる紫蘇の葉に、悪い落だが、ハイの干瓢とは、面白き洒落成ずやと、我の一座を笑はしたるも、近來稀有の一興なりし、こゝを出でゝ二三町、岸に傍ふて行けば、斷巖削り成すか萬仞の皺、水は激して、雪となりつゝ流るゝ彼方の木立に瀑布の懸るなど、奇とや云はん、妙とや稱へん、女人堂とて、昔時はこゝより女人禁制なる阪に上れば、山は嶮峻、森嚴と評しなば、川中島の形容めけど、慈悲心鳥も啼くなる木下闇、空は曇りて薄靄の、樹々の梢を裹みたる、雲の中行く九十九折を、兎角して方等瀑前の茶屋に着き、澁茶に

喉をうるほしては、また上り行く劍ケ峰、大平に出づる途中にて、果して驟雨に遭ひたりき、賴む木蔭と人無き茶屋に腰打かけて、暫時霽間を持ち居る中、我は機械に肱を置きて、うつらくと居眠る時、耳元にて大喝一聲、この野郎とて詰め寄りたるは、氣早の松魚子なり、彼方は雲助の無作法にも、他の鼻の前にて、破れ草鞋を穿き交ふるに、その飛沫の此方の顏にかゝりしとて、怒り立ちたる樣子ゆえ、我は先づ松魚子をなだめ、雲助に詫言云はせなどするに雨は上りぬ、いざこの間にと、急ぎて山を上り、平に出でゝ少しく行けば、水聲滔々として聞えたり、一行は直に華嚴の茶屋に走せ着きて、瀧の面を見渡せば、

靄深く立籠めて、瀧ある方のそれぞと明るく、わづかに白く淡く眼に映ずるのみ。水晶簾を懸けたりと、古人の評せる絶景は、見えざりしこそ怨みなれ、崖の小道を少しく下り、危うげなる掛茶屋にて、雲の晴れるを待てど暮せど、たゞ轟轟たる水聲の、一上一下、耳元近く聞ゆるばかり、折節は岩燕の黑く靄の中を翔翱して、眼前咫尺、猿架といふ一種の苔の、霧藻のやうに、大木の梢にもやゝ〳〵と懸りたる枝に止まれるのみ、何時まで待てど雲の斷れぬに、止む無く歩を轉じて中禪寺に出でぬ、南岸橋の上に立ちて、湖水を近く觀望すれば、一帶の白雲萬疊の山を繞りて、青き頭の影のみを水に映せば、岸には小舟の二つ三

つ、翠樹青草の下に維がれあり、黒き華表の此方には、畫樓倒まに湖面に落ちて、欄に凭れる美人の影を蘸するなど、繪も及び無き風景なり、折から晴るゝ靄の奥より、美人の乘れるボートの來りぬ、遁しはやらぬと玉に寫して、さてその人の素性を問へば、佛公使館一等書記官ボンヂー氏の夫人及び令嬢なりき、我は直にその家に抵り、刺を通じて、事の次第を告げ厚く禮を述べて退り出でつ、行きて蔦屋に憩ひたり、こゝにて寫眞の乾板を入れ交ふべき、戸棚は無きかと搜せしかど、いづれも光線の徵塵洩れぬはあらざれば、詮無くて、地底の氷室に入り、外より堅く戸を鎖さして、寫眞の用事は辨じたれど、さて戸外の

番頭の我一人を闇處に棄てゝ、呼べど叩けど、答へは無く、氷の上の阿鼻地獄に、半餉ばかりも幽閉めたりき、漸うにして同行の及堂子、慌てゝ扇を引明け呉れしに、蘇生りたる思ひして、婆裟に出づれば日は未だ高し、これから湖水を舟にて渡り、湯本口まで驀地に至らんものと、宿の亭主に相談ずれば、仕立船にて六十錢、只今直に出まするといふ、それ宜しと、ビールと佳肴を用意して、裏手の波止場を出帆せり、かくて舷を叩いて、朗かに詩を吟ずる松魚子、肱枕して夢想兵衛を擬ぬる春葉子、酒は濃く、肴は味美く、しかも荷負ひの老爺の質朴にして、折々滑稽を演ずるなど面白く、船は紅白だんだらの帆を孕ませて、

矢よりも疾ければ、それ新椰よ、古椰の村よと、湖畔大方は異人館なるも怨めしく、歌の濱、上野島など次第に遠くなりて、勝負が濱のやゝ近づけるを喜びつ、水は兩岸の樹影を蘸して、潮面は鏡の如く輝き渡れる景の美くしさ、形容に辭なきを奈何せむ、岸に上りてよりは急ぎにいそぎ、地獄川を渡る頃は、空は怪しく搔き曇りて、山雨將に來らんとす、風は樓に滿てりなどゝ、中禪寺に在る騷客の、詩を作れるもある頃なるに、我等は雲を衣にして、猿聲轉た感深き、この男躰山の麓より、戰場ケ原に出でたる時は、荒涼寂寞、自ら涙の零るを覺えざりき。見れば雨は咫尺に迫りたり、雲は天地を縮め盡して、たゞ目前

なる落葉松と、野の草花の二片三片、踏む草鞋の下に白く、闇を破りて咲けるのみ、人はと見ればたゞ我々の一行の、梅鉢の紋の形にかたまりて淋しげに行く原中より、白雨颯と落ち來りぬ、雨を凌ぐべき器だに無き名々の、衣もズボンも只濡れにぬれて、絞れど絞れど袖の重きを奈何せんや。かくして歩すこと一里餘、山路にかゝれば雨は霽れたり、路は湯の湖に沿ふて進むに、五日ばかりの月は出でぬ、樹の間に透して、湖水を望めば、松も杉も根より水に浸りたる、淡き影を蘸せる中に、月の光の映れるなど、その景の物凄さ、冬ならば如何に哀れなるべきぞ、草臥たれば足を摺る音の、杜深き山に響きて、湯本は未

だかとの繰言は、前後の人の口より洩れぬ、崖をまはれば火影は見えて、湯の匂ひの遠くより來れり、一行は狂するばかりに喜びて、足も輕く、氣も輕く、直にその町に入りて、松本屋といふ一等宿の、第一樓に坐したる時は、たゞ歎息の聲のみなりき、濡れたる衣を脱ぎ代へ、湯に浴り、膳に向ふに湖水の鯉を煮、鮒を炙り、瀧の海苔など、名物のあらん限りを味ひ盡して、酒はビール正宗、好めるまゝの品あるに、醉も十分、足踏み伸して、按摩に草臥を按らせ、松の音に夢を任して、前後も知らず眠りける。翌朝は未だ衣の乾かぬまゝ、借衣の袖を風に吹かせて、湯本十湯、片ッ端から浴し試み、酒に濕氣を掃ふては、坐

に疇昔の苦を忘れ、また降る雨を物ともせず、升形に松の一字を印たる、番傘をさしかけたる五人男、今日は戰場ケ原を其處此處と、景好き處を寫し歩きて、跛引く人もあらず、湯瀧、龍頭の瀧などを寫し了り、今度は潮畔をそゝろ歩きつ、古椰の茶屋の前より、また舟を雇ひて、それに飛び乘り、中禪寺に着けば日は暮れたり、今宵は蔦文の第一樓に上り、夜に入りて、絃月の微に、湖心を照すを見、白雲帶に似て、數峰の腰に搖曳する樣など、詩も成り難き風景を見盡しつ、翌朝再び華嚴の瀧を見るに、雲亦晴れで、たゞ水聲の轟くがごと聞ゆるのみ、下山の道の快よき、腋に翼を生ぜしかと疑はれて、一脚千里、瞬く

間に馬返の蔦屋に下りぬ、こゝにて名物の阿部川餅に下腹をこしらへ、また大谷川に沿ふて下り、含滿の淵を撮影し、日光町に入り、小西屋の奥の間に、我は寐轉んで詩の本に天窓を埋め、松魚、春葉、及堂は御廟拜見と出かけて、膽ッ玉をつぶしける、歸京は十七日の夜、宇都宮よりの上等汽車に一點の星亨氏、我等は回遊の赤切符なる、これも旅の恥なりかし、めでたし〳〵。

（卅二年七月）

麥藁帽子

情を以て景を憶ひ、景によりて情を憶ふとは、まことなる哉。

慌しきものは、忙殺されんとして、なほ景色の美を憶ひ、幽靜に居て、なほ且つ出世の緒をおもふなど、人の心の我儘なるは今に初めぬ事ながら、春は花の早く散りなんことを憂ひて、野山に終日遊びくらし、秋は紅葉の雨を分け行きて、猿に小簑を借らんとする。さて三伏の暑さ、夏は何として遊ばんや。儘よ一笠双鞋、山水を跋渉して、麥藁帽子の西行法師を氣取らんものと、七月の初め、ブラリと家を出れば、緑陰滿地、時鳥明方の空を啼き渡りて、錠前かけたかと叫ぶ。止しやァがれ、跡は野となれ、山の奥にと志し、車を駈けて新橋に行く。滿足に汽車に乗り、横濱まで行き、こゝより徒歩して杉田に至

る。春ならば、梅を探ぐる人引きもきらざるに、樹は青葉と變り、根には青苔厚ふして、それ花よ、香よと、弄ばれたる疇昔の樣に似ず、山には濱風徒らに吹いて、酒旗を搖かす無く、里の童の犬かけさして、唐人笛を鳴らす飴屋の、遠きより來るなど、人意自ら隱なり。吐月峯の麓より富岡の方へ行かんとすれば、境幽にして、景頗る佳。こゝより本牧の風景を眺望すれば、煙波四に迷ひ、白鷗一點天に印して飛ぶ。その地は武藏久良岐郡の東端より東京灣に斗出する岬角の名にして、横濱市を距る南一里に近し、十二天の社あり、海水浴旅館あり。懸崖千尺、老樹蟠屈して、風光畫も及び難し。遠くこれを見る時は、

花鳥の刺繡せる屏風を樹てしが如く、美なること言語に絶す。なほ進む。こゝに故三條相公の別墅あり。松青く波白き間に閑雅の結構を極めたり。金澤に入れば、景色一變す。この地南西北の三方は丘陵を環らし、東一面は海に瀕し、近く野島、夏島の小島嶼を望み、遠くは房總の峯巒と相對して、風光絶佳、所謂八景とは洲崎の晴嵐、瀨戸の秋月、小泉の夜雨、乙艫の歸帆、稱名寺の晩鐘、干潟の落雁、野島の夕照、内川の暮雪なり、歸化僧心越の詩ありて世に名高し。能見堂あり、八景を一眸に收む。能見堂は筆擲山に在り、この山に惠心僧都の作れる地藏菩薩を安ず、堂前に古松あり、筆擲の松といふ、昔日巨勢金岡八

景を寫さんとて、畫の眞景に及ばざるを歎じ、松下に筆を投じたるより、しかいふとかや、山を下り瀨戸の斷橋に至る、橋畔に東屋といふ割烹店あり、また西すれば瀨戸明神社あり、南の小島に辨財天の祠あり、江州竹生島の天女を勸請す、こゝを距る七八町、金龍禪寺あり、山を飛石山と云ひ、その頂にあるを九覽亭といふ、これ八景に能見堂を合せての名なり、算盤から割出したものなれど、牽强附會ならず。成るものならば尙ほ三景を增して、ダース樓などいふ料理屋の出來れば妙。斯くて稱名寺の晩鐘に、合方キツパリとなり、本釣鐘を打出すと、そろ〳〵暮れかゝる誰彼時、道を急ぎて朝比奈の切通しに行く、國の名

も相模と變れど、鏡だに持たねば、草臥れし姿見るともなく、疲れし足を引摺りて鎌倉に入るに、鎌の如き月柳の枝にかゝれり。月を迎りて柳の都の古跡を尋ぬるも妙ならめと思へど、疲れては詮あらずと、長谷の三橋に泊る。

湯に浴りて疲の癒え、食して餓も忘れたれば、これより月明りに古跡を探らばやと、行李捨てゝ、いとゞ身輕を覺えしまゝ、團扇の風に藪蚊を拂ひ、小草の露を踏み敷きて、其所や此所を浮かれ行く。雪の下、扇ケ谷の名のみにて、夏忘れぬる涼しさに、足の運びも捗とりつ、只ある坂にさしかゝれり。此所を何處と夕顏棚の下涼みする翁に問へば、化粧坂と申す。その由

緒いかに。曰く。昔時平家の大將の首を化粧して、實檢に供せしより此名ありとも云ひ、またこゝは遊女町なりしよりその名を呼ぶともいふ。この地に曾我五郎時致の馴染を重ねし遊女ありしが、梶原源太景季も齊しくその遊女を愛したれども、彼が操の堅かりけむ、時致死して後、頭をごぼと剃落して佛の道に入りたりとか、惡七兵衛景清も編笠格子に立寄りて、傘かりたが緣となり、その遊女に馴染みて、子まで設けたること演義小說に見ゆ。道の左に景清が土の牢あり、傳へ云ふ景清鎌倉に降り、八田知家の宅に預けらる、其後建久七年三月七日大佛供養の日を數へて湯水を絶ち、終に牢中に死せりと、また景清の娘を

龜ケ谷の長に預く、後その娘は亡父追福の爲め窟の傍に庵を結びて、十一面觀世音を安じ、勇猛精進にして一生を終りしといふ。その庵今は無し。翁と別れて去るに月落ちて路黑く、蟲の音四に聞こゆ。古への跡大方は頽れて、城南に行かんとして、さらに城北を忘るゝ想ひあり、家に歸りたれど、世の興亡沿革胸に浮びて、さてすがに眠られねば、想ひの走するまゝ、眼を閉ぢ手を叉きて、英雄の跡を追懷するに、末路の轉た凄然たるもの、比々みな然り、豈鎌倉氏のみならんや。夏艸や兵者どもの夢の跡と、實に夢の跡となり了しぬ。思ふて此處に至れば知らず、一聲の牧笛夢を喚んで寒し。

翌朝早起海水に入る、潮浅くして、三才の兒も戯るべし。此處を由井ケ濱といふ、鶴岡八幡宮の大華表より五六町、東は飯島、西は靈山ケ崎に渉れる海濱の名にして、昔し源頼朝こゝにて弓馬の技を演習したる處なり、眺望快濶。これより鶴岡八幡宮にいたる。地を雪の下と云ひ、國幣中社に列す。かくて殘る方なく鎌倉を見了り、七里ケ濱を傳ふて、江の島に渡り、金龜樓に宿りぬ。下絃の月のあるにまかせて、夜を更かす。あくる朝は片瀬を過ぎ、藤澤を經て、小田原より箱根に行く、湯本、塔の澤、宮の下、底倉、堂ケ島、木賀、木湧谷、葦の湯の、客多ければ、今西行を宿すべき貧の草の家のあらず、地獄池のほとり

に至れば、何となく天地も陰に曇りて、賽の河原は雨降らんとす。石地藏に腰うちかけて、草花などを拷りとりつ、漸うに湯の匂ひの消え行くと共に、路は下り坂となりて、頓て葦の湖の邊にいたれば、水鏡の如く、老樹欝蒼として、晝も尚ほ小昏し。離宮のある處は、小高き丘にして、嵐氣檐に横はり、水色窓に映ず、仰けば芙蓉青巒の上に跨り、俯すれば扇面湖に落て、影搖かんとす。扁舟の葉々乎たる、筏師の棹を揚ぐるなど、その景色のよきこと言語に盡し難く、權現は湖水の砌にあり、社古く神寂びてよく、箱根驛は荒れたれども、湖畔の小村、詩人の眼には何と見るならむ、月清き夜、風靜なる朝、神澄み心爽

なる時、翠草の上に偃臥して、徐に古文を誦せば、神來りて、吟魂を掠め去るべし、古人絶景に遇ふ毎に必ず筆を擲つ、知らず今の詩人は如何。この月中頃、海に浴し、山に嘯いて、東都に歸る、今日よりまたも吐呑する所の大氣、これ熱、これ血、想ふに口頭呵するもの悉く火か。嗚呼世因累あり、都門の人をして、永く身を青山白水の間に於かしめず、遺恨千秋。（廿六年）

夏の夜

五月雨のこの頃、或夜ひそかに帳場格子を抜け出でゝ、珍らしくも松に月ある、築地の首府旅館に、こそ〳〵もので相集まれるは、日頃親しく語らふ友の二十五人にて、今宵の主人は文武堂主、今たび初航海を世に出したる、その船出を祝はんとての催しなりけり、旅館は居留地の海岸、波の音松の嵐を聽き得べき處にありて、出船入船の欵乃面白く、佃島は前に横はり、品川の海遠く晴れて、白帆の往き來ひも興ある眺望也、欄前に安樂椅子を据へ、葉巻莨長閑に吹いて海面を望みつゝ、亞米利加は何方にあたれる、歐羅巴は彼方にやなど、窮り無き空想を浮べて、他年遠く海を渡らむ折の、所思を辿るも妙なりき、晩餐は大食堂にて、内外の人々雑集して卓に就くのなれば、早くも

雜居後の日本のごとなど云ひ合ふて喜ぶめり、支配人は米人にて、いとよく肥えたる男の、敏捷く待遇して、客に遺憾無からしむるなど一同滿悅して、こゝを立出で、月の明きに浮かされて、佃島にぞ渡りぬ、乘合船なれば、多くの漁夫どもに立交りて、中流に出づれば、月は中天に澄みて、海はよく晴れたり、江に入りて碇下せる船の檣の、林の如く立並びて、白き燈を一樣に吊したり、佃は月に背きて、島影一帶に黑く、渡頭に華表の見えわたれり、漸う住吉社の前に着きて、上陸し、それより社前に額づき、漁夫の町に入れば、戶々みな簾を下して、涼を床几に納れぬ、中に一人の漁童の、短笛を弄びて、節面白う

吹きすさめるあり、我等は旅の客ならねど、先づ腸を斷つ想をなして、暫時は只ある橋の上に彳みたり、夜は九時にも近かるべし、歸路遠く、家遙かなる人々は、こゝより辭し去り、殘れるは同行十人、なほ月の涼しきを便りて、草に露置ける野を斜に朽橋を境にして、小川のあるを溯り、渡船場に出でぬ、そこには板葺の小屋あり、孤燈高く揭げて、客を待ち顏なれど、舟の一つだも無きを以何せむ、月光は棧橋を照らして、波の白く朽杭にかゝるのみなれば、一同聲を上げて、舟を呼べとも答ふる水の音だもあらず、斯くして半時餘も過ぎけむ、漸うにして一艘の小舟來りぬ、我等は飛び乘りて、造船所の裏手を傳ひ、

越中島をめぐりて、深川の漁夫町にかゝる、こゝにて舟を岸に維ぎ、我と心利きたる二三の人と上陸して、罐詰の酒と、肴二三種とを買ひとゝのへ、また舟に上りて、小川を溯り、洲崎辨天社に詣でぬ、松黑く波白く照りて、境古りたり、時は十一時に近かるべし、夜更けて月は澄みに澄み、空は青く凝りて水よりも清らかに、逃げ塲を失ひたる雲の、一片二片の、折々は月に邪魔して、木塲の木立に鳥の音を聞くも幽なり、やがて船は歸路に就きぬ、只ある橋下にかゝれば、上には洲崎に通ふ若者等の、綱にてもつけたらん腕車の、轟々と鳴りて雷の如く、西より東へと通ふもあるらし、舟は永代の橋下をくゞり、新川

に入れば、兩岸の白堊に月影のさして、雪よりも白き土藏の、伍をなしたる美くし、鎧橋の此方、靈岸橋のほとりには、未だ寢ねぬ酒樓のありて、美人の欄によりて立てるも見ゆ、兜町の裏手にかゝれば、大家高屋甍をならべて、實に土一升に金一升の土地の、錐を立つべき隙だも無きまで、人煙に埋められたるも心地よく、澁澤氏の洋館は、電燈やら瓦斯やら白晝の如く輝きて、令息歐行の夜會にてもあるやらむかと思はれぬ、江戸橋を過ぐれば、魚河岸には漁船數多着きぬ、鎌倉邊の初鰹も海より上りて、翌日は市塲に小判の値を呼ぶべし、弗と郵便局の大時計を撿すれば、夜は正に十二時なり、月は明く興は未だ歇き

ざれど、名々明日の課業に忙しき身の、無下に夜を更かさんも愚なる業なりと、日本橋下に船をすて、みなとこゝにて袂を別ちぬ、われは今川橋の邊まで歩を運び、そこにて小石川戻りの腕車あるに飛び乘りて、神田明神の坂を登り、菊坂を下りて、巡査交番所の前にかゝれば、交番の人の我を訝かるも可笑しく、我は敲く月下の門、昨日五分刈の天窓の影の僧に似たりしも一興なりき。（三十二年六月）

酒池肉林

今茲十一月某の日は、三井一家が朝野の紳士を招待して、盛大なる園遊會を催された。其會場は、三井一家の集合場で、即ち麹町區有樂町である。見るからに壯麗宏大なる一構は、妙な言草だが、御大名の御本邸とも見える。その大門の形容から、玄關の工合、流石は天下に名たゝる持丸の、三井家の倶樂部として、些の遺憾はない。

予も此日此盛會に列するとを得たので、見まゝを書いて見やうに、先づ第二の玄關には、社員が禮服着用で、來賓を奥坐敷に案内をする。

構へは日本風であるが、一面に華やかな絨氈を布きつめてあつ

て、土足のまゝで、ズーッと奥へ通られるのである。此日は生憎、朝來の雨天であつたので、惜い哉、數奇を盡した庭園で、園遊の樂を受くることは出來なかつたが、しかし廊下には例のおでんや、鮓屋、酒屋、團子屋、などが、所々に店を張つて、新柳二橋といはんよりも、寧ろ東京全都の美形が、繰り出したといふ騒ぎだから、それこそ、春の花と秋の月を、此一堂に集めたといふもの。

此等の尤物が、赤襷赤前垂、の甲斐〳〵しい仕度で、賣子になつて居るのもあれば、客引をしてるのもあつて、來賓の若旦那も、御隱居然たる御方も、見つけ次第に、何所其所の御前だの、

何々の旦那さんなどゝ、威勢好く掛聲をして、客を引く鹽梅、矢張其道は其道で、中々凄いものと、眞面目に云ふより外はない。

其中の聯隊長は、ひさご屋のお女將、喜樂のお女將、花屋のお女將などが、前後左右に采配を振つて、千軍萬馬の間を縱横無盡に驅け回る樣といつたら、實に古名將の風ありと謂つべしだ。

餘興としては、常盤津林中の得意もので、その二十幾年、鍛へに鍛へた美音を、此所一番、思ふ存分に見はした時といつたら、實に天下の善を盡したものであつた。

それからまた、家屋の構造を、讀者に紹介せんに、東西二棟に分れて居て、一は純粹の日本風、一は和洋折衷である。日本室の方は、取り立てゝ云ふまでもないが、全躰糸柾の白木造で、洵に品の好い造り方である、椽側を傳つて和洋折衷の室に入る中途に、茶坐敷がある。此室は極めて、數奇を盡したものであつた。

さて折衷の室に入れば、書院風の構造で、椽側が如何にも、廣々として居る。その外側には、御殿風の欄干があつて、所々に階段が設けてある。坐敷は疊や絨氈を用ひず、床を珍奇な木材の嵌木で張つて、天井は合天井で、極く古風な所を見せてある。

そして、室の中央には氈を布いてあつて、純子張りの美々しい安樂椅子が、幾個となく并んである。その次の室はこれも合天井で、はめ木の床であるが、一躰の模樣は、頗る趣向を凝らしてある。境の襖は日本風の、極めて淡泊なものを用ひて飾りつけの金屏風や、御厨子黑棚の結構は、また頗る人目を惹くべきものである。

茲には中央に、大形の卓子が据えてあつて、極質素な卓子掛が掛つて居る。それより椽側を傳ふて、玉突室に行けば、此所は全く洋風で、他の室には、多く日本風の書畫を用ひてあるに引かへて、此所はまた極めて西洋流に、洋畫の優美なものを飾

つてある。

即ち玉突臺が二臺備へてあつて、萬般の用意、周到至らぬ隈もなく、此所に遊ぶものをして、實に搔ゆい所に、手の屆く感を起させる。其他大廣間の後部には、談話室、秘密室などいふのが、いくつもある樣に覺えた。今其構造を一括して評し去れば、御殿風の構造に、歐風の粹を交へたものといつてよからう。で、所謂和七分、洋三分の構造といへば、間違ひはあるまい。此建築の技師は、工學士横川爲助といふ人の、創意になつたものであるとのことで、目下駿河町の、三井銀行の鐵材建築も、矢張此人の擔任であるとのことだ。

扨て、立食の饗應に充てられた食堂は、今度新らたに建築したもので、大凡長さ二十間も、あるかと思ふ大食堂、屋根はトタン葺を黑く塗り立てゝ、飾るに悉く蘭の花と葉を以てして、それに紅白の電燈を點じた光景、實に龍宮城へでも、舞ひ込んだ樣な心持がする。

軈て立食となつた。予は度々、斯る盛宴にも列したことがあつたが、此時の如く悠然として、そして食餌のゆたかな、宴會は今に始めてゞある。近時大倉喜八郎君の、還曆の宴會は、其豪奢の度は、當代の紳士社會を一驚せしめて、交際場裡の一快談となつた程であつたが、三井園遊會も、其山海の珍味を山積し

た點に至つては、おさ〳〵これには劣らなかつた。で、予は他日折を得て、大倉家、及び先頃これも仝じく、還暦の祝宴を開いた安田家、及び此の三井家三家の、園遊會なるものゝ比較てふ題にて、自分の目に興じ、耳に感じたことゞもを書綴つて、一つ其優劣を論じて見ようと思つて居る。

抑も酒池肉林といふことは、一躰日本風の宴會には、多く見ざることで、實は此の立食の宴會、即ち今夜の如き、光景を云つたものであらうと、予は私かにさう思つた。見渡す限りは、雪をあざむく食卓の連なり渡つて、其間には名も知らぬ花束をつくり、三鞭の泉は地からでも湧くが如く、ポンチの雨は天から

でも降るかの樣で、飲んでも盡きず、酌んでも絶へず、滾々として平生の酒泉を湛えたのは、ても、さても心地よい次第、これを盛宴と謂はいで、抑も天下何處に盛宴と名づけるものがあらうぞ。

さなきだに燕尾服に、瀟洒たる風采の紳士の腹は、便々とふくれて、ポンチの庇蔭に、恰ら玆に一場のポンチ畫を演じ出したも、時に取つて滑稽の次第。あるは接待のシガーの煙を、四方に吹いて意氣揚々と、食堂を辭して例の安樂椅子に倚れかゝり、我物顔に陣取つた樣、鷹揚とも申上奉るべしである。

この醉客貴賓の間を、例の待合の如才内儀が、双の腕によりを

かけて、御機嫌を取る工合、長夜の飲とはこれであらうか、不夜城とは此れを申さうか。歩を轉じて元の席に歸れば、嚠喨たる音樂の聲聞えて、醉を醒ますべき、ラムチ、ビール、水菓子、ビスケットなどが、山積してある。また出口には、一家の人々が禮服を着流して、賓客を送る鹽梅は、流石に文明の風の、四邊に滿ち〳〵て居るを覺えた。

ア、世間不景氣の呼聲は、何れの里も、全じ哀れさを感ずるものかと思つたに、それは唯霙降る九尺二間の長屋住、世に哀むべき、貧民窟にのみあることで、所謂弱の肉を食ふ强者の、世に時めける富豪の家には、夢にもあつたものではなく、流石の

貧乏神も、とても祟り得ることではない。

見よ一夕の宴會に、巨萬の財を費して、以て一代に其豪富を衒ふものはあるが、悲哉、つい鼻の先は新橋發の滊車窓から、哀れに見ゆる芝、新網の貧乏長屋に、一滴の涙を灑ぐ樣な慈善家は、とてもあることではない。今更云ふまでもないこと乍ら、世の中は正に是れ、利己と云ふことの外はないと、斷言するに躊躇せぬ、知らず今夜三井家が、費したる黃金の種子は、他日如何なる美花と化して咲く事であるか、金が金を生む世の中に、何れこれとて、棄たりきりの贅をやられた筈のものではなからうと、自分が醉つた結句の管を卷いて、長々しう申すも

野暮か、兎角浮世はと、上機嫌で腕車を家に驅つた次第であつた。（三十一年）

駒塲の秋

農は國の大本といふ、で、一度は其本元なる農科大學をも縱覽しやうと熱望して居たが、今日しも不計折を得て、横井教授を大學に訪ふた。

學長の松井博士とは日本繪畫協會で、共に美術の批評を試みた緣故もあるので、かた〳〵博士を訪ねて、大學の模樣も聞かう

と思つたが、生憎不在であつて、詳細なことは聞くを得なかつた、しかし大橋某といふ大學生に導かれて、諸科を縱覽するを得たのは、頗る愉快なことであつた。

農科大學は駒塲といふ所にある。元とこの駒塲は、幕府時代には駒塲野といつて、將軍家の御狩塲となつて居た、彼の御成道といふのは、新宿から一直線に、日本橋より三里とした所である。

其時分は雲雀、鶉、雉、兎、などが多かつたで、折節はこの駒塲野に御狩があつたといふ。江戸名所圖繪には駒塲町と題して、長谷川雪旦の挿畫があつて、精細に出來て居て、道玄坂といふ

小山を、野良に物を運んでる田夫があれば、其向には秩父の山を遠く見せて、旅人の野川に裾を揭て居るところもあり、小松原の遠近に見えて、鳥の高く飛んで居るなど、中々に幽靜な景色、殆んど江戸の中とは思はれぬ計りだ。

今日大學が此に設置されても、矢張り昔の俤を存して、秋更けて尾花の波の風にそよぐ工合や、丘陵起伏して、高きには茶畠を見、低きにはちよろ〳〵と水の流れて居るなど、農園としては、尤も位置の宜しきを得たものと思はれる。裏門の方より表門までは十四五町もあらうか、其面積も一方里餘もあるといふことである。

大學は本科と實科とに分れてゐて、本科には目下四十名計りの學生がゐる、卒業の曉は學位を得るが、實科の方は卒業の後、農學得業士といふ肩書を得ることが出來る。

構内には幾何にも科が分れて居て、彼方の森影には山林科があり、此方の丘の傍には農學科ありといふ風で、其前後に實習すべき農園が設けられ、種々の耕作物が時に隨ふて播種されつゝある。

予は何れの科も詳はしく縱覽を終えたが、中に尤も興感を惹き起したのは、家畜病院を見た一事である。

此の獸醫學科長は、奈良原男爵の令息で、田中學士である、病

馬、病牛等が多く打臥したる室の尤も奥に施術室がある、其所には恰も我々人間の病院の如く、寢臺が設けられて、驗温器だとか、ステートスコプだとか備えつけられてある。傍の鐵製の籠樣の中には、眼を病んで居る犬やら、鼻加多兒を起して居る、猫やらが、人間の患者の樣に枕を並べて居るといふ趣はないけれど、聊かも我々人間の病院に異らぬ樣な所は、また一奇觀であつた。

予が此奇妙なる病室を見舞ふた折、寢臺の上に物憂げに寐て居る犬を指して、何病であるかと尋ねて見たが、此は感冒であるといつて、犬を臺の上に立たせ、吸入器で以て、藥液を吸入さ

した、犬は乃ちチン〳〵モガ〳〵をする時の身振で、端然と尻餅をついて、大人しくしてゐた。

然る後其躰温と同じ樣に、温なる布片を病犬にかけて、看護おさ〳〵至らぬ所はない、犬も診察の間は從順にして、其病勢の一日も早く怠らんことを、切望して居る樣に見える。やがて、診察を終れば、看護人は頸輪を掛けて、各自其病室に引き取るのである。

予は今の病犬は何人の飼犬なるやと問ひしに、こは前の文部大臣、大學總長濱尾新氏の愛犬であるといふことであつた。斯樣にして、横濱居留の外國人なども、往々家畜の診察を此校に求

むるといふことであつた。

それより予は病理室、藥劑室等も順次に縱覽を終えしが、素より素人のことであるので、一々其理解を詳しく爲得なかつたものもある、しかし一見非常の興感を起して、毫も倦むことを感じなかつた、それより植物園へと廻つたが、時は冬枯の物淋しき頃なるに、名も知らぬ珍奇の草花は、晩秋を裝飾して、身は春にでも返つたかの感があつて、猶見るべきものは多かつたが、他日を期して予は愉快に大學を辭した。（卅一年）

神田覗機關

西窓に映る芭蕉葉の外には、語らふ友も無き、六疊の一間は我住む本城にして、青史黃籍四邊に散りて、さながら戰國割據の世に似たるも、主人元來懶惰なれば、洒掃の責を盡さず、首を塵埃の裏に埋めて、想を千古の遠きに馳せ、靜座書を讀む、時に蝶あり、栩々として机邊に飛來れば、身は早くも莊子の夢と化して、暫らく我あるを知らず、忽ち後邊の障子を容捨もなく、瓦落理と開く者あるに驚き、誰何すれば、見も馴れぬ貸本屋の草双紙四五冊を手にして入り來る樣の可笑しさに、眠を覺して

その双紙手にとり上げ、表紙を開けば、これは如何、世に和印とかいふなる書なるに、怫怫として大喝一聲、この本何ぢやと睨めつくれば、渠一向平氣な顔して、へゝゝゝ浮世は萬事お色氣ですと、取合ぬ商賣氣に呆れかへりて、双紙を戸外に投げつけ、用事は無いと邪慳に云へば、怫となさるは未だお若いと、冷笑して座敷を立出で、また、隣座敷に入りて、三國志の御用は無いかと廻り歩くは、これ神田七不思議の中の一つなり、それに未だ〳〵可笑しきは、近邊の下宿屋に居る下婢、白晝の間は垢つきし衣着て、髪も亂れし儘にとりあげぬに、はや黄昏ともなれば、夜騒ぐ蝙蝠の如く、髪梳り衣紋つくろひ、紅を濃くさし、

厚化粧する有様は、百鬼夜行の繪卷物の首座をも占むべく、思はれて怪しくも可笑しげなるが、夕餐の膳を座敷〳〵に持運び、媚を賣り世辭をふり撒きて、ポッと出の田舍書生にお芋を驕らす事、近頃大分火の手をあぐ、これも不思議中の一つに算へてよし、頓て夜にも入りければお茶の水橋のたもとに行き、涼しき風に吹れんものと、未だ寒からぬ此頃とて、八日ばかりの月代清きを幸ひ橋の上に至りて、上と下とを見渡せば、月光に向ふ對岸は青草の葉末に露置きて、きら〳〵と光る色面白く、一方の崖は、陰になりて、隈どりたる、異國の繪とも見ゆ、聖堂の森に寢鳥の聲も聞かねど、長き土塀のうね〳〵見ゆるは、蒼

龍臥すとも思はれて、師となるべき人々の、物學びする行末の目出度をも思ひやらるれ。お茶の水白く見えて、漕ぐ舟黒く木の葉浮ぶ如し、折ふし棹を下しては、澄む月の影を亂して江戸川の方へとのぼりぬ。この景色詩人の眼にはいと興あるべきも、住む家近き名所とて、左迄にも思はず、歩みをかへして小川町に出れば、此處は書生の蜂の巣とて、むら〳〵と出て來る兵子帶黨、袖腕にいたる先生のあれば、雲耶山耶譯の判らぬ豪傑もあり、先づ大道の古本屋大抵は見盡し、雜誌屋繪草紙屋と眼を配りて進み行くに、只ある牛肉屋の二階に方り、皿を叩きてオッペケ節を唄ふ殿方あり、我も以前にはこの黨なりしと、

そゞろに昔の戀しうて、其家に入るに、胡座組みて法理を談ずる民法家あれば、半熟の肉を割いて衛生を論じたまふ前期醫者どの、口角泡を吹き過して、隣の職人に談じ込まれ、失敬の捨臺詞に、情なくも敵に後背を見せたまふあり、實にや浮世は千差萬別、この二階の中に一つの世界を造れるは、妙、憶ふに氣の利いた小説家などが、若し茲に女中となつて半月も入り込まば、人間運命の説明所か、トンだ妙な趣向の湧く事は澤なるべしと、酒呑まぬ身の羨ゆるを待つ間の退屈さに、また家の樣子を熟々見れば、梯子の上り口に、一脚の床几ありて煙草盆に朱羅宇の煙管とを備ふ、床几に女中四五人、腰うちかけて煙吹い

て居る處へ、上り來し三人連の書生あり、女中は顔見るや、喫つた煙草をポンと投いて、佐藤さん、大分お見限りですねと肩頭を叩けば、來られない譯があるんだと、喞へた紙卷煙草の灰を拂ひて、わが傍に陣取りしにぞ、目も放さずその打扮を觀察すれば、蒙つた黑の山高を脇に措て、コウト何にしやうか、ロースで櫻田が宜かろう、自轉車は廻り過る、キリンは好んとした處で、花は櫻田人は麥酒、お春さん、早くして頂戴よと、自慢らしく指環を隣客に吹聽する工合、これが書生とは、情なく過ぎて涙が溢れる、着たる衣裳は、赤柄の唐綾縞の袷に白ッぽい艶消し双子の羽織を着流がし、皮色博多の帶を締めしは、何

う見ても緞帳の申上げますの種類なるべし、女中は梯子を輕業のやうに登り來て、お待遠さまと、盃盤を置いて、貴君大層お痩せなすつて。さうさ痩せる譯があるからさ。譯々ッて先刻からおつしやいますが、タヾは聞きませんよ。聞いて呉れなきやア察して貰ひたいねとニッタリと笑ふ、女中も一つ酌をして床几に戻る時、奥の方から出て來し書生、ふら〳〵する千鳥足を踏みしめ、床几の前に來て女中に串戲を云へば、一喫召上れと喫つけ煙草を出す樣は、色町の格子に縋る如し、これもまた七不思議の一つなり、後其家を立出で、小川亭の女義太夫を聽きに這入込みし大半の書生は、いづれも樂屋覗きの方にして、惡

口利くを得意と思へり、先づ樂屋口の梯子の際に居れる洗ひ張太織の袷着たる男、鳥打帽子を目深にかぶりて、欄干に身を寄せ、義太夫聽くともなく失神するところへ、前座を勤める義太夫娘、眞暗な物の蔭より伊藤さんと呼ぶ、梯子口の書生、おうと返事して座を立ち、こそ〳〵と耳打して、笑つたり囁ひたり、兎角する間に中入ともなれば、樂屋より二三人の女義太夫が出て來て、例の書生に一禮すれば、書生は菓子賣を呼び寄せ、娘共に好む菓子を取らして、己れ懷中より錢とり出して、拂ひを濟まして後、樂屋に入りてべちやくちやと饒舌くる中、また三四人の書生交りて、さも睦まし氣に語り合ふは、如何なる趣旨

か、これも不思議の一つなり、寄席はねたれば、家に歸らんと急ぐに、戸田家の前に、三人の書生往來に立跨りて用捨もなき放尿、無禮な奴等と思へば、行き過ぎながら振顧るに、巡査なんか構ふものか、咎め立すると法律でいぢめてやる、法は死物だそれを活用するは腕にあり、鷺を烏と云ひくるめても、法をくゞればいゝではないか、と云ふのを聞いて仰天し、さて〳〵妙な事を聞くものかな、法律を學ぶは詐欺取財を巧手にやる爲めでもあるまいに、馬を指して鹿といふを、腕がいゝとは、これも一つの不思議なり、夜も更けたれば、足早に行かんとするに、辻待の車夫ッと出て、旦那北廓へ參りませうと跟て來るに、

宅は近所と挨拶すれば、天窓を搔いて引ッ込む、總じて書生が北の方向に足を運ばすれば、屹度北廓と跟け來ること、神田の車夫の通例なり、これまた不思議といふの外なし、漸うにして家に歸れば、家人皆臥せりしに、隣家の二階にガヤ〳〵と人聲して、ヤクだピカだと爭ふは、まがひも無き花合戰、斯くして二時も過ぎ、三時にも垂んたるに、未だ爭ひの止まざれば、われは疲れて熟睡みぬ、夜はハヤ明けて七時に近く、朝日麗かに東窓を射りて、心地いと爽快なるに、臥房を出でゝ、朝餐濟ましし、文讀み行くに、十時を過ぎたり、されども花好きの書生は、未だに眠りを覺さぬは、何の時に學問する氣ぞ、これも不思議の一つなるべし、その他にも女學生の往來、下宿破戸漢等、數〻の不思議はあれど、煩はしければ略す。（二十四年）

おぼろ月

ことし彌生の初めつかた、大磯滄溟閣に毛利家歷史編輯の人々と會して、伊藤侯爵より親しく、木戸侯未亡人の義俠の事どもを聞き知り、ふと心に感じたる節を、新躰詩とやらんに物したる。

月に化粧のおぼろ夜は

橋の欄干も影淡く
柳をわたる雁の棹
大の字山にかすれ行く
春を眠むげの川添に
酒旗かゝげたる家のある
珠簾を捲けば蘭燈の
火影は水に流る見ゆ』
都は花に色まして
駒の心は勇めども
けふ九重の雲荒れて

人のおもひの安からず
さては洛中洛外の
春おしつゝむ八重霞
君ゐます空は風寒く
烏の塒ぞあはれなる』
右近櫻は咲きしかど
范蠡無きを奈何せむ
世は武士道にけをされて
御所の半蔀晝暗し
こゝに一人のますらをが

忠義に濺ぐ紅涙に
人の心を染めてより
橘の香の漏れ初めき』
中にも月の桂男は
この君をさす名なりけり
群議の苍に身を容れて
後に剣前に銃
身は無きものと思ひ知る
覺悟のほどぞ健氣なる
嗚呼國の爲め斯る時

いかで斧鉞を遁るべき』
故郷を出でゝ幾歳ぞ
霜は惣髪の額に重く
關山越ゆる夜はいかに
月は朱鞘の上に冴ゆ
雪に眠れる世の人の
夢は汗馬をかけ繞る
花に目覺めしものゝふの
鎧の袖を振はなむ』
それ者共よ油斷すな

志士を捕へよ縄かけよ
嵐に狂ふ花吹雪
人の膚に粟立たす
君は幸よく遁れ出て
五條の橋に身を潜め
妾は忍びて食おくる
戀は闇こそ便よけれ』
もとより妾はたはれ男の
興をたすくる白拍子
落花をはらふ繪扇に

春さしまねくさゝむしろ
山は夕榮暮れ初めて
寐よと知らする鐘の聲
三味や皷のにぎはしく
浮し立つるぞ恨みなる
東えびすの執念も
つき纏はるを振りはらひ
柳の絲に寄り添ふを
そらして立てる松の意氣
折りて投げたる三味線の

この身に報ふ撥あたり
うき世の波に幾浮沈
とりつく島も無りける』

春の夕の明けやすき
うつゝにも未だ君を見ず

夏來と知らすみそぎ川
まがつみ秡ふ幣も無し

かくても虫のくり言に
嵯峨野の昔忍びつゝ
鐘に更け行く雪の夜を

琴柱の占に夢を引く』
逢ふ夜はわけて更け易く
つもる河原の星の數

言ふべき事の跡たえて
通ふ千鳥の儘ならぬ

氣の強いのも男のつねと
怨まぬ眼にも露の玉

互の胸の有耶無耶を
明かしかねたる春の窓』

怨ずる毎に顫へる聲

忍ぶ思ひを抑ゆる胸
いざさらばと立上る
男の影もおぼろ月

山は霞に薄隈や
三十六の刷毛つゞき

人は涙にかきくれて
花の香のみぞ殘りける』

維新のいさを今成りて
菊の匂ひのかんばしく
朝日の御旗輝きて

松の光のわかみどり
櫻の下に篝焚く
衞士の衣の影白し
御代の春風吹きわたる
花の梢のおぼろなる』

夏の川

夏の小川に來て見れば
水晶ゆるく流れ行く

みどり小暗き木立には
鳥の啼音も靜かなり
神のつかひかわらべ等の
すくひの網に入る魚は
げに銀盤に露置きて
蕗の葉かげの涼しさよ
流れの裙は野にかくれ
朝靄淡く樹を罩めて
村一ッづゝ見え初むる

旭日の影ぞうるはしき
藁屋の檐のいさゝ川
立寄る妹の面痩せて
髪かきあぐる水かゞみ
夏こそ戀の恨みなれ

暮の秋

海のかなたは果知らず
そのはてしらぬ奥底に

國あるがごとはびこれる

あやしの雲の立ち迷ひ

傾く夕陽をおほひては

颯と吹き來る雨の脚

菅の小笠に音させて

馬追ふ鞭の重げなる』

雄鹿の島根は秋闌けて

さんざ時雨の一トしきり

降るかと見れば沖遠く

また夕榮す波の花

これは日本海の西

日は落つ韃靼洲の奥

鵬程萬里烏立ちて

ゆふべの雲にかくれ行く』

三十里程無人境

一路の白沙客を見ず

斷崖高く樹は枯れて

巖には波の痕殘る

水と陸との中行けば
四方を籠めたる水煙
銀山くづれ濤吼えて
奔馬の腹に打かゝる』

行き暮れたれど家はなし
星の明りに見渡せば
荒野に駒の二ッ三ッ
夜風に草の戰ぐ見ゆ
枯れて淋しき木立には

あぢ小屋の骨あらはなる
小高き丘に破れたる
舟一ッこそかゝりけれ』

馬子に何處と名を問へば
かなたの山の木かげこそ
世をすて人にすてられし
蘇武が澤とぞ答へける

それは唐土忠義の士
こなたは普天率土の濱

王土ならざる地無なければ
　などて匈奴のあるべきぞ』

さはれこの地の淋しさを
　胡北の景に擬せんかな

雪はあらぬど雨雲や
　羊に似たる夜の駒

折から月も出汐の
　輝きわたる幾曲浦

長汀一帶雪のごと
　馬上の衣寒げなり』

荻の一トむら路細く
　坂を上れば家はあり

蜑の苫屋の檐もりて
　火影微に煙立つ

近づき見れば楫添えて
　餘念も無氣に炊ぎ居る

訪はるゝまゝに擡げたる
　顏は戀にや窶れたり』

これは王昭の君かそも
心の蘇武のあらでやは
世はまこならぬものながら
樂しく住めば鳥の聲
いとふ浮世はいづちにも
つきまづはるは習ひなり
住めば都の山かげに
馴るゝも戀の媒よ』

花は野に生ふつぼ菫
女神の遊ぶ蝶の羽
錦をかざる夜まつりに
笑顔をつゝむ細布や
憂き事知らぬ一ッ家は
寄る年波も忘れたり
冬の爐に添ふ睦ましさ
寒梅一枝春は來ぬ』

さればうたてや都人

利にのみ奔り飢に泣く
まいて出世のかけはしに
迷ふ人こそ悲しけれ
故郷を出でゝ路遠く
粟炊ぐ間の榮達に
父にはおくれ子をすてゝ
名聞の鬼となるぞうき』
實にこの里は仙境よ
行けども荻の花つゞき

葉は人よりも高くして
入江も村も見ずなりぬ
時しもすさむ夜嵐や
流るゝ雲に風白く
寒風山の一角は
磨ける空に影高し』

古關の雪

奥の細みち風寒く

雪ふるさとにたどり行く
われ洛陽の一書生
故山を出でゝ幾歳ぞ
眼は螢雪にさらせども
事は意とたがひてか
つまづく足も冬の道
罪無き宇宙のたゞ白し』
天地をつゝむ六ッの花
汚れし身こそ悲しけれ

父、母、とくにみまかりて
ふるさとはたゞ名のみなる
されども胡馬の聲聞けば
朔風もなほ懷かしく
つゞれの袖にふりかゝる
雪も涙に解けぬらむ』
人はかくとも白旗の
松原行けば家見ゆる
檐にそびえし一ト笠の

松も昔の友なりき
文讀む聲はそも誰ぞ
雪吹き立つる夕風に
錦を織るか機音の
胸にこたへて響くなる』

われ零落の瀬に沈み
出世の路は雲隔つ
妹は誰をか待ちつゝも
衣に誠をこめつらむ

逢ふに嬉しき恨あり
語るに盡きぬ名殘あり
今はた戀に亂れなば
青雲いよゝ遙かなる』

男子生れて二十年
それより花の春はあれ
忍ばれぬ身を忍びてぞ
人の上にも立たるべき
吹かばふけ風降れや雪

髪髪白くなるまでも
精神一たび到りなば
獅子王吼えて丹花落つ』

さらばや父母の墓に
今非つばらに懺悔せむ
階前の雪路絶えて
夕陽赤く鳥歸へる
よし成功を告くる日の
ありとも塚の恨めしく
一百里外のふるさとに
たゞ戀のみぞ殘りける』

（卅二年八月新作）

涼楊詩味

一日の課を終へ、月に歩して、小石川にかへる、お茶の水は淡く、松影參差、小舟遠く去りて、杳々無からんとす、路初音町に入り、家に歸りて、先づ水を草花に灌ぎ、緣端に胡坐して、涼を竹蔭に納るゝに、終日の勞苦を忘れて、詩想新に湧き、惡

詩二三たちどころに成れり、燈下に書して、同人に示せば、衆皆笑つて可否を云はず、醉後歩を移して、氷川田甫に至るに、螢火點々、一川緩く野を流るゝ處、景色畫の如くなるを如何せむ、我は畫手にあらず、此景描くべからず、我はた詩家にあらず、風光を謳歌するの技無きを悲しむのみ、去て涼榻に詩趣を味ふ久しく、下に掲ぐるもの、乃ちその數首のみ。

信濃漫遊汽車中。讀伊藤侯爵所携賴山陽日本政紀。

鳥啼花落九春空。鐵路彎環究又通。一部麟經看未盡。
火輪飛度萬山中。

過雨宮開墾地

春山杳々雪斑々。落葉松間路似灣。剖判以來不毛地。
深林滿目水潺湲。

宿雨宮別墅與劍客日高氏話

一任春寒吹朔風。對盃中物意融々。鎮西劍客恨猶在。
話到戰時還淚紅。

汽車過輕井澤

轔々車響夢難閑。路入碓氷幾險艱。不怪朔風寒透骨。
天邊雪白淺間山。

城山館偶成

據丘高閣夕陽中。滿目山川望不窮。往事回頭茫若夢。

野花飄盡鳥呼風。

善光寺

暗々廊中色即空。寺僧頻說彌陀功。由來三寶衰頽久。衣食香龕不發蒙。

川中島

荒涼戰跡咽川聲。疎柳寒煙暗恨生。千古英雄呼不返。春山唯有雉兒鳴。

妙義山

轢轆聲中景色遷。摩霄妙義忽當前。山如筆架狀奇絕。騷客古來眞不傳。

大磯招仙閣訪末松博士

海光雲影共茫々。一縷茶煙望裏長。欄角几邊相對坐。與君話舊到斜陽。

客中偶作

夢繞楚雲湘水樓。人生何事似浮鷗。疎林無影霜有色。月冷山村黃稻秋。

題田家挿苗圖

仄路回迂傍野川。渡頭人家樹如煙。遽然甘雨壓山過。水白苗青田又田。

題山水圖

雨餘春漲上漁磯。滿岸桃花濕不飛。極目空江帆影斷。
白鷗一點印天歸。

文武堂主人大橋君刊初航海。招予等數十名。
飲築地首府旅館。內外人雜集。宴頗盛大。故及。

五洲之水渺無關。偕卓不論華與蠻、歐酒米羹今夜會。
陶然聯手醉歌還。

同人十名。航佃島。賽住吉祠。舟中所見。

夏月涼輝一水流。佃洲影黑喚將酬。小舟容與暮煙裡。
華表高邊是渡頭。

島上聞笙

點々漁家對月明。晚風如水入涼棚。少年亦解風流事。
獨弄清光吹玉笙。

越中島

物換星移面目更。越中島就日鍊兵。月明來照砲壇上。
耳底猶聞唎叭聲。

舟中偶得

臨水畫樓人未眠。湘簾高捲月明前。紅顏如玉愁猶在。
望殺搖々來去船。

船着日本橋

上岸高歌學謫仙。陶然被酒又登船。櫓聲伊軋忽驚夢。

日本橋頭月影圓。

花鳥集校了之夕偶然有作

十年苦學志難成。還訂殘編對短檠。簾外清光月前樹。
落花聲裏闇傷情。

初夏曉起偶得

雨足林丘曉色清。幾竿新竹映窓明。小禽繞樹低飛處。
一顆黃梅落有聲。

（三十二年作）

俳諧算盤珠

夫子帳場格子に隱れて、算盤珠に精根を疲らし、銀煙管をやに下つて、二一天下のス子者を氣取る、たま〳〵五月雨の時間無きに、下町通る、番傘を算へては、一ィ二ゥ三ィ四日市から、濡鼠のやうになつて、歸る小僧をつかまへ、まア聞けと俳諧の講釋、請ふ隗より始めよとて、郵便受箱に投げ込んだる、屑も積つて五十句とはなりぬ。これをしも千句と溜めなば、また例の貯金文學ともならうか。

菜の花に橋一ッ越せば出町かな

おぼろ夜や棧橋につく棹の音

若菜つむ人の出で逢ふ土橋かな

坊主山に麥二三寸そよぎけり
揚雲雀其處に川あり畠もあり
村はづれ杉二三本ほとゝぎす
明け近き峠の村やほとゝぎす
宿坊に碁を圍む夜や鹿の聲
雲よりも下に鹿聞く峠かな
弗と欄に凭れば鹿聞く夕かな
若竹をうつし繪にする小窓哉
卯の花の闇に一ッづゝこぼれけり
出戻りの紫陽花怨む姿かな

暮るゝ間や卯の花にそふ小酒盛
月細く卯の花垣にかゝりけり
卯の花に雨の夜ばかりつゞきけり
若葉かげ綾瀬は白く流れけり
萱きあへね門を水鷄のくゞりけり
木下闇村まで遠き麓かな
置きかへた机の下の藪蚊かな
親のゐる方へと向ける蚊遣かな
陳皮焚いて一人蚊を遣る親父かな
金魚鉢を蚊帳の中から眺めけり

竹植えて窓からのぞく月夜かな
筍を早起の子の見つけたり
若竹やいつの間にやら雀の子
從兄弟同士行儀揃へて田植かな
夏の山高低無しに茂りけり
五月雨や傘さして來る檀ひろひ
小簑ほす角の花屋や五月雨
氷屋のまだ起きて居る夏の月
隣りではモウ寐たさうな門涼み
今朝植えた竹の光りて飛ぶ螢

富士筑波それからそれと雲の峯
時鳥弗と見上げたる御堂かな
赤馬車の塵をかけぬく暑さかな
短夜の欄に居眠る禿あり
嬢さまの裳やいづれ燕子花
秋の日の杜から暮れて水白し
城あとに柳二三本散りかゝる
時雨るゝや山莊に立つ茶の煙
枯柳河岸に身投の噂あり
野狐のあとくらましぬ枯尾花

かけ茶屋や廣尾あたりの秋の色
棹の音入相寒き野川かな
やけ跡に假家二三軒冬の月
榾の火を見かけて遠き入江かな
たそがれの海を千鳥の雲に入る
蘆枯れて入江の村に汐のさす
年の暮わが反古買はむ人もがな

（三十二年作）

風月集 終

明治三十二年九月五日印刷
明治三十二年九月八日發行

著者兼發行者 乙羽生事 大橋又太郎 東京市小石川區戸崎町六十一番地
印刷者 石川金太郎 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所 株式會社 秀英舍 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

彩畫筆者 水野年方君
木版彫刻 五島德二郎君
彩畫印刷 吉田市松君
圖案 中川蓁舟君
鑄版印刷 獨興舍堀君
製本 前田福次郎君

正價金三十五錢

不許複製

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 東京神田區表神保町 大阪東區備後町四丁目 博文館
大取次 東京 盛文堂

特約大賣捌所

東京　東海信文合資會社
同　北隆館合資會社
同　瓦明堂
同　水野慶次郎堂
同　栗原春堂店
同　盛田中書店
同　飯塚書店
同　盛文堂
同　服部文書店
大坂　吉岡平助
京都　東枝律書房
名古屋　同　飯田信文堂
同　川瀬代助
同　永東書店
横濱　有隣田屋
同　新聞合資會社
神戸　同　倉田書店
同　丸屋支店
船井新聞合資會社　吉岡

千葉　久留米　佐賀　秋田　四日市　栃木　尾ノ道　酒田　高田　濱松　足利　石卷　山口　同　長岡　鴻ノ巣　上諏訪　宮崎　小樽　同

多田屋支店　菊竹壯書店　河内清助　成見清兵衛　伊藤善三郎　宮川庸三郎　玉芸香堂　兒木八　鈴橋喜書店　高島屋源三郎　谷泉　三德之助　山口世館　超一二　覺張村　西島六治三平　長谷川一郎　宮阪日進新　修島爲重　川南書　白鳥書店

熊谷久榮堂　虎與號　魁文舍　櫻井產作　積善館支店　宇都宮源　積善館支店　近藤文書　木村勘助　佐善館店　森岡書店　三義書店　中井田文書　平內書　武彌支店　週三郎　吉田營助　長崎幸兵衛　品川太郎　內田正書　柳川書堂

（後付の二）

此外全國各地到ル處ニ賣捌店有

賣捌所

神戸　內藤傳右衛門
宇都宮　內田濱吉
松江　川岡清助
札幌　小鹽自治堂
高松　龜友堂
松山　向井藏次郎
水戸　川又銀藏店
大津　太田支店
山形　八文字屋太右衛門
盛岡　佐藤庄兵衛
同　鶴鳴閣
前橋　煥乎堂
弘前　今泉道次郎
同　近松德太郎
津　關西圖書會社
同　河島九右衛門
高岡　學海堂
岐阜　郁文堂
松本　水琴晨平堂
米澤　素月
長野　西澤喜太郎

（後付の三）

候之間最寄ニテ御購讀希上候

近衛公爵題字伊藤侯爵題詞井上文科大學長序文、（石版眞筆）
紅葉、露伴兩君序六十五翁橋本雅邦翁、武内桂舟君極彩色口繪
乙羽生著（本書評判記三十二頁入）

賜天覽

花鳥集

小說あり、紀行あり、一種の眼光と一家の筆致とを以て社會觀を描寫し、風俗を記述したる雜文あり、小品大作、蔚然として羅集し、以て著者の全集とも見るべきもの、花笑ひ鳥啼き風薰し雲湧く、晴雨讀、以て著者を悉すべく、以て清閑を消すべく、又以て南船北馬の佳伴たるべし、

巡クロース洋裝美本
四六版紙數千三百頁
正價金壹圓郵稅二十錢

（後付の四）

小說

おさくも　高露
ひらし　小利

川山袖　貸

史傳

近衛公　鷹山公　元祿時代と英一蝶　松壽軒　西鶴

出世
小夜錦
當世
赤の十
男夏書
女忠の
霜二
捨の
か身
貧の
一番
鬼の
狐
一人
世間
大
福
孝
の
た
の
む
の
筋
の
登
み

奴
衣
裏
字
腕
し
師
道
虫
經
薄
病
槍
涙
入
帳

大石瓦雄
菅畫像辨
加藤公畫像
清正公畫像

逸話

人品五十題

こゝには逸話、雲聞五十種を集めあり人物の品位、時勢の變遷、人情の差異などを親ひ知るを得べし

風俗

衣　こゝには冠婚葬祭の大禮より衣食住の沿革、古今年中行事などあらゆる風俗を眼前に晴るが如し

食

住

紀行

晴雨奇好行

こは地理上の所說、或は紀行等を集む

右出版いたし候、用紙製本の美麗、印刷口繪の鮮明なるは、著者得意の大手腕を揮ひ、大意匠を凝らせるものに御座候、是非一本御買上被下度、さすれば看板にいつはり無き證據は上り可申候

再版著手中

（後付の五）

侯爵黒田長成君題字、　子爵長岡護美君題詩
男爵末松謙澄君序（東北紀遊十六頁）
幸田露伴君序　黒田清輝君畫　中村不折君畫
梅痴、謫天、質軒君題詩、乙羽生著（本書評判記三十二頁挿入）

（後付の六）

賜覽天

増補千山萬水

全壹冊洋製金字入
袖珍紙數八百餘頁
頗美製本
改正定價五拾錢
郵税拾錢

第五版

幾内東海東山道及中國四國九州風景寫眞百廿景
（十數遍彩色刷寫眞口繪廿八頁挿入）

本書は辱くも九重の御覽を賜ふの榮を得、發售以來忽ち第五版を重ぬるの運に會し、更に大增訂を企て四國中國九州一帶の案内記六十四頁と、其地の風景寫眞三十二ヶ所とを加へ、且つ旅人智慧の板てふ新遊戯をも挿みて、初版以來紙數百五十餘頁を增加し、一層釘裝を美にしたれば、之に優れる旅行案内はあらざるべし

九重の山　水海の山　瓜海嘯行
日光山の一夜　海の俗謡　滄浪閣の避暑
阿武隈川の秋　濱の離宮　吹浦の俗謡　椿山莊
常陸の平潟灣　植物御苑　酒田の覽窟　横須賀の夏月
勿來關　富士の山莵　最上河畔の夜泊　箱根の一夜
波立の藥師　七湯めぐり　尾花澤の下露　芭蕉庵
相馬の野　三保の松原　阿古屋の松蔭　多聞山莊
松川浦　清水の龍華寺　鷹山の遺風　深秀園
さんざ時雨　京遊記　葵坂の大邸　清風明月
竹駒の社　木曾五雞行　春の風　月瀨の春
津輕の淺虫　太田の渡　奈良の古都　笠置山の今
碇が關の雨　日吉峠　長柄山の夜雨　春の夏
立峠墨雲　須原の宿　花見汐干　熱海の冬
矢能代竹枝　寢覺の床　目黒の秋　法隆寺と初瀨
蘇雄鹿の島山　棧の跡　多武峰　練馬めぐり
武澤古事　義仲の舊里　鹽原越　柳島の萩寺
風山　烏居峠　横川の不動瀧　花屋敷と道灌山
寒雨　松本城　南會津の片山晒　雪の三井寺
湯本の寒雨　下川記　若松城　夢香洲
喜多方の在郷　柳津の山水　行春の日暮里
磐梯登山　光寺　喜多方の在郷　盆あろ記
米澤の夏　中島　柳津の山水　江の島入洞記
新奥の細道　月の松島　磐梯登山　夜雨の泉山
故郷の月夜　美溪の櫻　米澤の夏　青丹よし
飯坂の月夜　平泉の廢趾　故郷の錦繪　舞子の濱
雪の細道　外が濱路　雪の細道　武藏野の夏
噴火行　有耶無耶の關　噴火行　須磨寺の櫻漬
柳の都　横須賀の夏月　車上馬背
逗子の避暑　箱根の一夜　杉田梅見の楽
花見　熱海の冬　晴好雨記
黒　清風明月　花見　黒の秋
練馬めぐり　月瀨の春　練馬めぐり
柳島の萩寺　笠置山の今　柳島の萩寺
花屋敷と道灌山　奈良の古都　花屋敷と道灌山
夢香洲　法隆寺と初瀨　夢香洲
行春の日暮里　多武峰　行春の日暮里
盆あろ記　吉野の花　盆あろ記
江の島入洞記　磐見東海道　江の島入洞記
夜雨の泉山　雪の三井寺　夜雨の泉山
青丹よし　四京めぐり　青丹よし
舞子の濱　島原の春宵　舞子の濱
須磨寺の櫻漬　京の東山　須磨寺の櫻漬
車上馬背　車上馬背
杉田梅見の楽　杉田梅見の楽
晴好雨記　晴好雨記

（增補目次略之）

（後付の七）

紀行あり、小說あり、美文あり、韻文あり、小品に俳句に、新作舊編、著者が得意の作は容れて可憐なる此一籠の中にあり、春の野にあこがれて摘み溜めたる千種の若菜、秋夜春晝の玩びには、之に過ぎたる佳品あるまじ、御評判〳〵、

全壹冊袖珍美本
紙數三百二十頁
正價金二十八錢
郵稅四錢

若菜の春（表紙廿遍刷）
下村觀山畫
美人聽鶯（口繪卅遍刷）
富岡永洗畫

小說
- 春の夜
- 世話女房
- 鎗持勘助
- 犬さくら
- 子煩惱

雜筆
- 不老泉
- 淡粧濃抹
- 田家風月
- 小照錄
- 點景山水
- 望鄉臺

新體詩
- 閨ひの梅
- 柳かもと
- 浮世の影

紀行
- 富士登山
- 木曾路の春
- 鹽原の夏
- 江楓漁火
- 雪のふる鄉

俳諧
- ながれの末

第四版……發兌

從一位勳一等
八十五翁
乙羽生 久我建通公題字
著

名流談海

第三版

口繪
田中猪太郎製版
亞鉛銅版着色
舶來光澤紙摺

伊藤侯と山縣侯○伊藤侯の筆蹟○勝伯○京都無隣庵○伊藤侯と大隈伯○渡邊國武子庭園○石黑男と多聞山莊○末松男夫妻○橋本雅邦氏○紅葉氏○露伴氏○動物園の虎

著者の寫眞癖は獨り名士の風采を撮影するに滿足せず、高談雄辯奇言快話を靈筆に寫して、遂に此書の著とはなりぬ、卷頭の寫眞に風采を知悉して而て後朗誦一過すれば、宛も諸賢と一堂に會して握手欵語するの妙あるべく、其讀去つて興味盡きざる、實に近來の奇書なり、

袖珍洋裝頗美本
總クロース金字入
紙數三百餘頁
正價金參拾錢
郵稅金六錢

（後付の十）

目次

●山縣侯爵の園藝談
●伊藤侯爵の滄浪閣談
●伊藤侯爵の美術談
●勝海舟伯の洗足軒話
●同　伯の古今小說談
●同　伯の雅俗談
●同　伯の經歷談
●大隈伯爵の園藝談
●福羽子の王政振興談
●渡邊昇子の俳諧一家言
●渡邊國武子の支那談
●石黑男爵の茶の湯談
●末松男爵の文學談
●佐藤少將の日清戰話
●福地櫻痴君の懷舊談
●西村茂樹君の幕末談
●小崎利準君の芭蕉の話
●栗本鋤雲君の身の上話
●尾崎紅葉君の詩人の話
●幸田露伴君の修文談
●前田香雪君の意匠の話
●橋本雅邦翁の丹青小話
●黑田清輝君の洋畫問答
●看守人某の動物園の話

▲附錄▼

●著者の素人寫眞談
●同　木曾道中談

本書評判記……十六頁入

（後付の十一）

風多集

新版

口繪——極彩色密畫——清風美人圖……水野年方筆

文壇睡れり、著者獨り三伏の炎天に晝寢もせず、夜も深更まで目を覺まして、少しの間にも、ソラ散文、ソラ韵文、新聞讀む外は三分の隙も惜みて、作る程に書く程に、又も此冊子はなりぬ。一本を手にして、山に行く人、海に游ぶ人、旅宿のゆふべ、書齋のあした、繙く所として、風清く月白からんものなり。

全壹冊袖珍
總クロース美本
新案寫眞版入
紙數三百二十頁
正價金三十五錢
郵稅六錢

小説

●袖時雨（新作）
●こぼれ梅
●京屋娘

新詩

●おぼろ月
●夏の川（作躰）
●暮の秋
●古關の雪

紀行

○京の雪○夏の夜
○團洲別墅○酒地肉林
○日光結構記○駒場の秋
○麥藁帽子○神田覗機關

雜筆

○娘姿十五區
○鷹の羽
○美人八景
○送蓮山人辭
○勇み肌

俳句
漢詩

○俳諧算盤珠
○凉榻詩味

六大著
發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

公爵 二條基弘君　侯爵 黑田長成君
伯爵 勝　安芳君　子爵 福羽美靜君
子爵 長岡護美君　男爵 石黑忠悳君

題辭……（石版眞筆）

（後付の十四）

以上諸家題辭序文跋批評

井上文學博士、肝付少將、高山文學士、大町文學士、朝比奈知泉、幸田露伴、尾崎紅葉、佐々木信綱、大岡長峽、野口珂北、川崎紫山、巖谷小波、廣津柳浪、齋藤綠雨、高橋太華、中內蝶二、三宅青軒、田山花袋、野口寧齋、岸上質軒、柳井絅齋、中村桂軒、桐生法學士、鳥谷部春汀、坪谷水哉、林微笑、宮川雲外、森鳥城、奧村不染、上村左川、長谷川天溪、猪波曉花、武田櫻桃、竹林巖、

乙羽生著

累卵之東洋

第五版……明治三十二年六月出來

全壹冊洋裝袖珍
中村不折君諷刺畫
正價金十八錢
郵稅四錢

岌々乎として、將に累卵よりも危からんとする者は、東洋刻下の形勢に非ずや、玆に於て印度洋畔奇男兒出で、隻手頽瀾を既倒に廻さんとを謀る、悲壯淋漓慷慨欝勃、天破れ月駭き、風闇く花泣く、半宵朗誦すれば、鬼神も爲に壯烈に哭せん、見よ、見よ、日本の快男子、

發兌元　東京市神田區表神保町　東京堂

（後付の十五）

當地は皆様御存じの織物産地に傍近御座候

温泉名物に生絹織物の等あり地に御座候

場多く山水明媚の勝區に

旅館

米澤市立町二ツ橋畔

音羽屋本店

渡部治兵衛

米澤（佐氏泉）停車場脇

音羽屋支店

渡部はる

本店は當市第一繁華街にして近傍に電信郵便局銀行會社等櫛比建列あり故に旅客の事を辨ずるには便利此上なしと奉存候

支店は米澤停車場の前面にありて古松あり泉水あり遠山近丘風景畫の如く實に都人珍客の休泊に適し頗る爽快の趣有之候

（後付の十六）

T 7
11